鹿兒島県史料

旧記雑録追録　七

例　言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵本「薩藩舊記雜錄」を底本とし、そのうち追録巻百四十二から巻百六十一までを収めて、「鹿兒島県史料　旧記雜録　追録　七」として継続刊行するものである。年代は寛政二年一月から天保六年九月までの四十六年間である。

一文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。また巻末に文書・記事目録を掲げた。

一文書、または記事が数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ　文書の所在などを示す原注は、一字下げて首部に付した。

ロ　猶々書は、二字下げにし、その位置は底本どおりにした。

ハ　文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

ニ　附（付記）、但（但し書）は一字下げにし、改行した。

ホ　文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。

ヘ　書状は、底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「〆」に統一し、包紙への注記は底本にならった。

ト　引点は「謹上」とした。

チ　花押は（花押　No.x）と番号を付し、適宜人名を傍注するほか、巻末に花押集を掲げた。

一漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意体裁をそこなわないも

のは一部当用漢字新字体を使用した。

一異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尓（爾）　旱（畢）　吳（異）　珍（珍）　弥（彌）

一特殊文字としては、次の字だけを残した。

〆（しめ）　ゟ（より）　ゑ（まいる）　〳〵・〻（くりかえし）　ハ（候）

一変体仮名などは、普通の平仮名に改めたが、こ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝだけはそのまま残した。

一人名・地名および難解な語句などには、適宜傍注を付した。地名は旧薩藩領域外は国名のみ、また領域内は現在（昭和五十年四月一日）の郡・市名で表わした。

但し、国・市の字はこれを省略した。

一原注には括弧を付さず、新たに注を付する場合には、（　）で囲んで原注と区別した。

一欠所部の原注、本マヽ、欠、スリキレなどは、その部分を□で囲み、本マヽ、欠、スリキレなどと傍注した。

一文意の通じない字、またはその箇所は□で囲み、（ママ）、（〇〇カ）と傍注を付した。

一挿入、付紙、押札などは、右肩に（挿入）、（付紙）などと傍注し、他とまぎらわしい場合には「　」で囲んだ。

一朱書部分は（朱）と頭注し、その箇所を「　」で囲んだ。

一島津氏世録正統系図（東京大学史料編纂所所蔵本）より補った箇所は＜　＞で囲んだ。

一行間の書き込みは、底本の体裁にあわせたが、書き込みの内容が底本に齟齬しない場合は、その位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

一文書の行間に朱書された返書は、差出・宛所の関係を示す「上」「下」の位置は底本の体裁どおりとした。

一闕字・平出などは、原則として底本の体裁に従った。

一漢文は、返り点・送り仮名などは不統一に用いられているが、なるべく底本どおりとした。

一当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

同性（同姓）　陳（陣）　蜜（密）　次使者（継使者）　諏方（諏訪）　麑（鹿兒）　舩（船）　相摸（相模）

訴詔（訴訟）　飛彈（飛驒）　大守（太守）　太輔（大輔）　諸司代（所司代）

舊記雜錄　追録七　目次

題字　鹿児島県知事　金丸三郎

例言……一
目次……四
巻一四二　寛政　二年　一月―同　四年一二月　（重豪公・齊宣公）……一
巻一四三　寛政　五年　一月―同　七年一〇月　（重豪公・齊宣公）……四七
巻一四四　寛政　七年一一月―同　九年一二月　（重豪公・齊宣公）……九六
巻一四五　寛政一〇年　一月―享和　二年一二月　（重豪公・齊宣公）……一五二
巻一四六　享和　三年　一月―文化　三年一二月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……二一三
巻一四七　文化　四年　一月―同　六年一二月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……二七二
巻一四八　文化　七年　一月―同　九年一二月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……三四七
巻一四九　文化一〇年　一月―同　一一年　七月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……三九七
巻一五〇　文化一一年　八月―同　一三年一二月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……四四二
巻一五一　文化一四年　一月―文政　二年　四月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……五〇三
巻一五二　文政　二年閏四月―同　四年一二月　（重豪公・齊宣公・齊興公）……五五六
巻一五三　文政　五年　一月―同　六年　一月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……六一〇
巻一五四　文政　六年　二月―同　七年　三月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……六五六

巻一五五　文政　七年　三月―同　九年　一月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……六九八
巻一五六　文政　九年　二月―同　一一年一一月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……七四九
巻一五七　文政一一年一二月―同　一三年　八月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……七九五
巻一五八　文政一三年　九月―天保　二年　四月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……八三七
巻一五九　天保　二年　五月―同　三年一二月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……八七九
巻一六〇　天保　四年　一月――――二月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……九二九
巻一六一　天保　四年　三月―同　六年　九月　（重豪公・齊宣公・齊興公・齊彬公）……九七〇
花押集……一〇一一
文書・記事目録……一〇一五

(表紙)

重豪公　自寛政二年正月
齊宣公　至同四年十二月

追録舊記雜録　巻百四十二

(原寸縦三四・三センチ　横一六・七センチ)

先レ是天明七丁未、命二家老二階堂主計行且一、總三宰造二營二丸一、冬十一月二十五日起工、翌年秋八月二十四日廣間・書院等粗成焉、是歳會京師火、大内及二條城爲二烏有一、齊宣聞二大家之費用浩穰一、請二納金資一レ用、則報可命出二二十萬金一、於レ是慮二國用不一レ贍、使レ錯二二丸營作一矣、今齊宣雖レ受レ封、未以二弱冠一之故、重豪在二江府一尚攝二助國政一、是以齊宣與二家老一議、請下予之一如レ國親觀二察政事一且使中レ繼二營二丸一以待上焉、許レ之、而營作之事則雖下以二頃年國用不一レ給辭上レ之、家老等頻陳二便宜一不レ置、故亦使レ如二其言一、戒下以二質撲一主上レ協レ用不上レ宜レ至二奢費一、於レ是今茲寛政二年庚戌春正月二日再起レ工、至二明年六月十二日一便室内廳盡落成、越壬子夏四月二十七日、使下二一族島津若狭忠救一代成中移徙之儀上矣、

1

重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政二年」正月七日　信明判

〃　松平上總介殿(島津重豪)　(朱)「在口裏」松平伊豆守信明

2

重豪公御譜中

3

白木御文書六番箱　三十三号

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

寛政二年正月十一日　齊宣御判

包紙ニ　三十三

右膳殿より平田貞太郎へ御渡被成、白木御文書六番箱へ納置ル事

4

重豪公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ル、遂披露ル處一段之御仕合ル、恐ゝ謹言、

（朱）「寛政二年」正月十一日　信明判

（朱）「在口裏」

松平伊豆守

〃　松平上總介殿　信明

5

齊宣公御譜中

伊地知平覺名正幸、奥孝左衞門名元平、皆爲吾刀鍛冶職者、二人家素世業ニ劍工ニ、而正幸・元平得ニ其法ニ通レ神至レ妙、其所レ作刀劍究ニ鋭利ニ、其名顯ニ于天下ニ焉、於レ是奏ニ之於朝廷ニ、忝使ニ正幸任ニ伯耆守ニ元平任ニ大和守ニ、併拜ニ賜朝臣稱ニ、

6

重豪公御譜中

同年正月二十八日

家齊公遣ニ大河内善兵衞政壽于芝邸ニ、賜ニ貴鷹所レ搏之鶴一隻ニ、會微恙、久留島帶刀通同代レ余奉ニ恩旨ニ、又詣ニ各老邸ニ拜謝焉、

7

齊宣公御譜中

寛政二年庚戌春二月十五日關ニ狩於城北吉野ニ、齊宣親臨焉、

○二十八日觀ニ犬追物於演武館内之場ニ、謹按蓋所レ謂御代始犬追物（為初就國時行之典云）歟、而失ニ其手組者ニ、

8

近秘野艸　齊宣公

寛政二年庚戌二月二十一日觀上武士踊躍于下馬、二十五日復觀下武士踊躍、二十七日又觀上下市人踊躍、二十八日觀犬追物、皆佳例也、三月三日

大家念　公始就封驛送賜　公鶴、亦所使鷹捉者也、十八

日如市來、四月朔日觀諸役座、是歳中山王尚穆使宣野灣王子入貢江戸、賀　家齊公承大統、於是八月王子既來、三日朝謁　公於府城、四日復朝、六日上食、十五日　公以琉使首途府城、鉦鼓儀仗以扈從、十七日琉使謁南泉廟、二十二日召賜宴樂、

9

重豪公御譜中

正文在文庫

歳暮之

御内書可相渡ハ間、明日五半時

御城ハ家來可被差出ハ、以上、

（朱）「寛政二年」二月廿日　　松平越中守（定信）

松平上總介殿

10

齊宣公御譜中

三月四日拜下

幕府以二驛遞一賜中鷹獵之鶴上、

○二十一日講二犬追物於演武館内之場一、齊宣之生母堤氏觀レ之、

○一門元服之日舊着二素袍一、而當二（島津吉貴）淨國公時一倣二

幕府之禮一換以二長袴一、然吾家元服之禮所レ傳レ自二鎌倉代一者、當下依二古例一用中素袍上也、因今改レ制復レ舊、命二記錄奉行一、記二之於册一、

11

重豪公御譜中

正文在家老座

越前家・和泉家元服之儀、髪

（朱）本文達　御聽候処、善次郎殿元服ニ付而者素袍着用被仰付候、若狭殿・備前殿家・今和泉家跡儀茂已來元服之節者同様素袍着用被仰付候旨被　仰出候、

御そき已後御禮之節、長袴着用有之ハ様被究置ハ處、明

和七寅年當若狭殿元服之節、支度之儀ニ付、

（島津重豪）四月　御取次　谷村孫右衛門（谷村純章）

中將様御沙汰之趣有之、元文五申年

（島津吉貴）

總州様御意之趣御記錄奉行申出ハ書付達

貴聞ハ處、向後　御家來之御元服之節茂、御長袴御着用

可被遊と之　思召候旨

12

御沙汰被爲在、加治木・垂水兩家ニ茂同様可有之事候間、

（朱）本文　中將様達御聽候処、張紙御朱書之通被仰出候間、可被致取扱候、且以後元服之節、長袴着用ハ様可被申渡旨被　仰出、其通

長袴之儀ニ付而者

申渡有之ハ、然處去ル辰九月

總州様御意之趣茂有之候得共

太守様御傳來之御元服御式之節茂

御家之儀者

御素袍御着用被遊ゝ付ゐ㐂、御記錄奉行ゟ取調申付、別紙之通申出ゝ付、以來之儀㐂、御一門四家㐂以前之通素袍着用被仰付筋ニ㐂可有御座哉、又㐂寅年被仰出通矢張長袴着用ニ可被仰付置哉、於爰元何分治定難仕ゝ付、寅年被仰出之書抜等相添、御自分迄此旨申越ゝ條、被相伺御賢慮之趣可被申越ゝ、左ゝハ、達貴聞、何分㐂申渡ゝ樣可仕ゝ、以上、

公義被成向ニ爰無御構、鎌倉御伝来之通素袍ニ而宜筈之由、被仰出候段、谷村孫右衛門を以承知仕候間、可承向江者被申渡置ニ而可有之候、書抜等ニ都而相返、此旨及御返答候、以上

(朱)「寛政二年」三月六日　(朱)「上」嶋津石見(久邦)
(日付脱カ)
(朱)「下」菱刈大炊殿(隆邑)

14

齊宣公御譜中

年頭・八朔世臣獻ニ太刀一、其禮所ニ由來一久矣、而年頭身自捧ニ太刀一而來ニ于席上一置ニ之於前一拜謁、稱ゝ之曰ニ持參太刀一焉、如ニ八朔一唯以ゝ使獻ゝ之耳、今茲寛政二年夏五月令、八朔亦行ニ持參太刀之禮一、其他定進獻之禮皆倣ニ年頭例一、如ゝ左、

15

白木御文書六番箱三十四中

御記錄奉行ゟ

御一門家元服ニ付、髪御そき以後御禮之節、長袴着用被究置ゝ得共、此節嶋津兵庫殿(久徴、加治木家)嫡子善次郎殿(久照)元服ニ付同斷之節、素袍着用被仰付、嶋津若狭殿(忠敬、越前家)・嶋津備前殿(貫澄、垂水家)・今和泉家跡三家之儀㐂同樣、已來素袍着用被仰付ゝ、一長袴之儀ニ付ゐ㐂

總州樣御意之趣㐂有之ゝ得共

御家之儀㐂

公義被成向ニ無御構、鎌倉御傳來之通素袍ニゐ宜筈之由被仰出ゝ、

右之通被仰出ゝ條帳面可記置ゝ、

四月　石見

右包紙ニ
(朱)「三十四」
御一門四家元服之節、素袍着用之筋被仰出ゝ御書附壹通、
右寛政二年戊四月廿八日、石見殿ゟ黒田嘉右衛門江被成御渡、
白木御文書六番箱江納置ゝ事

16

白木御文書六番箱(朱)「三十五」中

御記錄奉行ゟ

嶋津兵庫殿

右㐂同氏善次郎殿元服付、進上物之儀内意被申出趣有

之、格別家柄之御取分を以、先格進上品ニ此節より御刀添、進上被仰付ハ、

一右通被仰付ハ付、御脇差拜領被仰付來ハ得共、此節より御刀拜領被仰付ハ、

右之通被　仰出ハ條、帳面可記置ハ、

四月　　（島津久昶）求馬

右包紙ニ（朱）「三十五」

嶋津兵庫殿嫡子嶋津善次郎殿江元服ニ付、進上物之儀被　仰出ハ御書付壹通、

寛政二年戌四月廿八日、求馬殿ゟ篠原善兵衛被成御渡ハ、白木御文書六番箱へ納置ハ事

17

重豪公御譜中

正文在文庫　　在白木御文書六番箱中　三十七

八朔

中將様ハ進上物之儀、是迄御一門方并嶋津左衛門一列迄進上被仰付置ハ得共、以來左之通、

御一門方

嶋津左衛門（久知、日置家）

嶋津美濃（久賢、花岡家）

島津圖書（久儔、宮之城家）

島津筑後（久毅、都城家）

御家老

若年寄

大目付

一所持

一所持格

右面々、於江戸名代を以御太刀進上被　仰付候條、年頭之通可被相心得候、尤右之内江戸詰之面々ゟ都ゐ年頭之振合被仰付候、

一右外、家格地頭職付八朔

太守様ハ進上物被仰付ハ分ゟ、都ゐ

中將様ハゟ御同様進上被仰付ハ條、仕向等之儀ゟ都ゐ御同様可被相心得候、

右之通被仰付候、

（朱）「寛政二年」五月

18

白木箱六番中　三十七

御記錄奉行ハ

八朔進上物被仰付ハ面々、是迄以使者差上來候得共、

以來持參太刀等被仰付ハ儀、別紙兩通之通被
仰出ハ條、可書留置ハ、

五月　　石見

白木御文書六番箱中　三十七

御在國

八月朔日

御座之間ハ

御出座

御一門方

右進上之御太刀、二之間上御敷居より下二疊目上ニ御
側御用人備之、同下ニ御禮、直御緣頰之方ハ着座、
順〻同斷ニ御祝儀被申上之、御家老御取合、
御意又御取合有ゟ退座、
一奥向之面〻
御目見、且席詰等之儀共、都ゟ有來通、
御書院ハ
御出座　　御家老
御先立　　御家老

右壹人充御太刀持參、三之間御敷居内上五疊目備之、
四疊目ニゟ御禮退座、
但御太刀一腰充奏者番拾之、

若年寄
大目附

右同斷、四疊目備之、三疊目ニゟ御禮退座、
但書同斷、

嶋津藤馬（久德）
嶋津相馬（久平）
嶋津多門（久備）
伊集院伊膳（久文）
畠山内膳（國典）
鎌田藏人（正謙）

右壹人充御太刀持參、三之間御鋪居内上五疊目備之、
同四疊目ニゟ御禮、御右之方ハ着座、御家老御取合、
御意又御取合有ゟ退座、
但御太刀五腰充奏者番拾之、

義岡宗次郎（久賢）

右三間御鋪居内上ハ三疊目ニゟ御禮退座、
但進上之中紙目錄

御出座前以於敷舞臺奏者番請取之、

一席詰等之儀共有來通御對面所ニ

御出座　　御先立　　御家老

嶋津左衛門

嶋津美濃

嶋津圖書

嶋津筑後

一所持

一所持格

右一人充御太刀持參、御中段御敷居内四疊目上相備、

同下ニ而御禮、御右之方ニ十人充着座、御家老御取合、

御意又御取合有ゐ退座、

但御太刀五腰充奏者番拾之、

川上主鈴（久禎）

右同斷、四疊目下ニ置之、三疊目上ニ而御禮退座、

但御太刀奏者番拾之、

新納次郎四郎（久儔）

新納五郎右衛門（久起）

町田主馬（久轉）

伊集院平治（久当）

諸地頭

右、次郎四郎・平治御中段御敷居内上三疊目ニ而御禮、

其外兩人充同二疊目ニ而御禮、

但進上之中紙目錄

御出座前以於鋪舞臺奏者番請取之、

桂外記（久武）

右進上之中紙目錄

御出座前以於敷舞臺奏者番請取之、御禮席之儀ハ是迄之通、

一大番頭以下諸御役人其外進上物等無之面々、御禮且席詰等之儀共、都ゐ有來通、

一江戸詰之御家老、於臺子之間名代を以奏者番ニ相付、

御太刀納之、

一御當地ニ不在合又ハ病氣之人、御太刀進上之分ハ夫々於席名代を以納太刀、中紙進上之面々ハ、於敷舞臺名代を以目錄納之、

一御在府之節、御一門方并御役家格ニ付、御太刀進上之面々ハ、於江戸名代を以進上被仰付ゟ、

尤右之内江戸詰之面々ハ、都ゐ年頭振合被仰付候條、

其通可被相心得ゟ、
一右同斷之節、川上主鈴於御當地御太刀進上納被仰付ゟ、
尤以來江戸ゟ詰合ゟ節ゟ、於江戸進上被仰付ゟ、
一右同斷中紙進上之分ゟ、謁前於鋪舞臺目錄奏者番請取
之、尤江戸詰之面々ゟ、於江戸進上被仰付ゟ、
以上
右三通之包紙ニ
(朱)「三十七」
八朔進上物、以使者差上来ゟ得共、以来持太刀被仰付ゟ段(ママ)被
御書附弐通右ニ付石見殿御添書壱通

20
重豪公御譜中
扣正文在右筆所
なを〳〵御表ゟ御禮申上ゟへとも、いかほともよろ
しく御沙汰たのミそんしまいらせゟ、めて度かしく、
一筆申上まひらせゟ、
上々様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、恐悦にそんし奉
りゟ、然れハ同氏豊後守儀、しくつき(宿次)御奉書を以て御鷹
鶴拜領仕り、私におひてあり難き仕合にそんし奉りゟ、
右の御禮申上度ゟ、御序の折から
御前よろしくよふに御とりなしたのミ入そんしまいらせ
ゟ、めて度かしく、
(朱)「寛政二年」
高をかさま
常盤井さま
萬里小路さま
梅の井さま
たき川さま
野むらさま
高はしさま
なを申給へ

21
重豪公御譜中
正文在文庫
爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平伊豆守(信明)可
述ゟ也、
(朱)「寛政二年」五月二日　家斉公墨印
松平上總介殿

22
仝御譜中
同年夏五月四日、私獻下所ニ自攻習一之馬青毛三歳四寸奥州三春神産一匹添立具

于　大樹家齊公上、是豫以レ有レ所レ請也、

23

扣正文在家老座

覺

一馬巾一通　表沙綾空色　裏紕沙綾

一押掛一　仙臺

一轡　一間

一手助一掛　紅糸

一手綱一筋

一鼻革一間　紫革裏付

一とちかね一　磨

一添縄一

一洗轡一間

以上

24

寫正文在文庫

一馬　一疋

一毛附書付　一通

一立具附　一通

右窺之上内々獻上ニ付

御本丸御馬預諏訪部文九郎(堅雄)宅ハ、馬預見習西郷八郎次、留守居本城源七郎同道ニテ差越、獻上之馬井伊兵部少(直朗)輔殿ゟ任差圖爲牽ケ段、御馬乘長谷川藤太郎を以申達、毛附書付壹通・立具附一通相渡ケ處、文九郎・八十郎出會、馬見分之上被請取ケ由被申聞、獻上相濟ケ事、

一同日、目錄一通、右馬獻上ニ付松平越中守(定信)殿宅ハ本城源七郎持參ニテ、井伊兵部少輔殿差圖之通、獻上之馬今朝五時諏訪部文九郎方ハ爲牽候處、文九郎・同姓八十郎出會ニテ被請取ケ、依之目錄差上ケ段、取次ハ申達相渡ケ處、請取ケ旨被申聞ケ由、

但目錄者獻上相濟ケ上差出ケ樣、前晩伺之節被申聞ケ、

(朱)「寛政二年」五月

25

(朱)「雜抄中」

色々無形ゟ浮説等申觸ケ儀、分テ御禁止之段、安永四年以來度々申渡之趣も有之、初テ　御入國も被爲在ケ付テハ、專靜謐を心頭ニ掛、猶又諸篇可相愼之處、段々聞得之趣も有之、第一　御上をも不憚不詮立事ニ御政事之妨ニも相成、他所之聞合も如何敷、甚以不屆之至ニケ、右

ニ付ゐハ、屹と糺方をも被仰付置ル條、於令露顯ハ、無御用捨切腹死罪等ニ被仰付、親類迄も迷惑可相成ル條、追〻申渡通、已來猶又取違無之樣堅相守、一切浮説等敷儀共不申觸樣、人〻相嗜、家來末〻之者共迄、右之趣を以嚴敷可被申付ル、

右之通向〻不洩樣可申渡ル、

寛政二戌五月七日　石見（島津久邦）　伊賀（島津久金）　求馬（島津久廣）　登（島津久連）　主計（二階堂行旦）　右膳（名越恒當）

26

白木御文書六番箱中　三十九

御額字

赫威靈

御裏書

寛政二仲夏

中務卿織（歟）仁親王

右御染筆御取次依御願如件、

六月朔日　嶋岡掃部俊在判

右包紙ニ

有栖川中務卿織仁親王御染筆

御額文字

上包ニ左ノ如シ

（朱）「三十九」

大雄山隨神門

御額文字　有栖川織仁親王御染筆壱枚

御額裏御名書壱枚　嶋岡掃部証文壱通

右寛政三亥正月晦日、鎌田愛（政詮）太夫ゟ被相渡、黒田嘉右衛門致首尾事

27

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鰹節一箱被獻之ル、遂披露ル處一段之御仕合ル、恐〻謹言、

（朱）「寛政二年」六月十九日　乘完判

〃　松平上總介殿　（朱）「在口裏」　松平和泉守乘完

28

重豪公御譜中

正文在文庫

端午之

御内書可相渡ル間、明日五半時

御城ニ家來可被差出ハ、以上、

(朱)「寛政二年」六月廿四日　　松平伊豆守

松平上總介殿

29

齊宣公御譜中　白木六番箱三十九号有栖川親王御筆

寛政二年庚戌夏六月、請二大雄山隨身門匾額書于有栖川織仁親王一、以揭レ之、

30

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政二年」七月六日　　信明判

松平伊豆守　(朱)「在口裏」

〃　松平上總介殿　　信明

31

重豪公御譜中

同年秋七月十九日

家齊公遣二淺野隼人長盈一、賜二貴鷹所レ搏之雲雀於重豪一、會微恙、久留島帶刀通同代レ余奉二恩旨一、既詣二各老邸一拜謝焉、

32

重豪公御譜中

寫正文在文庫

當御時節至極御難澁之儀ニ付、先年以來御慶事其外不時之御入用被爲續、御領内御産物料振廻屆兼ハ處ニ、右通之儀皆具存之前ニハ、然處、去ゝ年以來御金納被爲蒙　仰、去年迄二ヶ年分無滯御上納被爲濟ハ得共、跡二ヶ年分御出方不相見得、江戸・京・大坂御國中迄段ゝ被及御吟味ハ得共、其詮無之、當三ヶ年目之儀共、甚被及御手迫ハ折柄、右御金納外ニ莫大之御出方有之、是又被延置候儀難叶、旁以盡吟味、於諸向御貯銀皆同取集、其上御領國中人別・馬・舩迄出銀被仰付ハ外、御出方之手段一切無之段、委曲相伺ハ趣有之、御貯銀之儀何共難被遊御許容、出銀之儀ニ付ニ、先年以來、御所帶方御手迫ニ相成ハ砌より、度ゝ窺に相成候得共、御取揚無之、又ハ去ゝ申年至極之御手迫ニ成立、格別之御儉約被仰出、萬端御省略有之、江戸詰人數迄爲被相減儀ハ得

共、出銀ゟ下々困窮を御厭、御用捨爲被成置事ニハ、然ニ此節又々御難澁成立ハ譯、以人別出銀奉窺ハ付ゐゟ、何共難被黙止、別段被仰付樣之

御賢慮ゟ不被爲在、無是非被應其意ハ、右通下々ハ御難題被仰付ハ付

御隱居御方ニおひてゟ、御差分高迄ニゐ、御餘勢ゟ勿論、常式御續料迚ゟ被及御不足程之御儀ハ得共、何篇

御表御難題之一筋被聞召上、猶又

御手前之御不如意被差置、可成丈之御金可被差出と之御事故、江戸御家老初、其外御役々御受ゟ申上置、去々年ゟ御差分高之内三萬石、別段過分御金迄ゟ被差出、當時至ゐ御手迫被爲入ハ付ゐゟ

太守樣被遊　御承知候ゐゟ、御斷可被

仰上儀と奉恐察、段々奉伺趣有之ハ得共、いつれとも當

御時節之御事ハ間

御手初可被遊、其上ニゐ出銀等之取扱、御役々之心得可相成ハ、右通

御賢慮を以被　仰付事ハ間、奉得其意取計可仕ハ、尤下々迄出銀被仰付ハ年數二ケ年分ニゐ、乍少分御金五百兩可被差出ハ、其餘ゟ御出金被爲在度被仰付ハ得共、纔之御隱居御高之儀ハ得ゟ、何樣之御常式を被爲缺ハゐゟ、被爲叶ハ御程合ニ無之、精々右員數被差出御事ハ間

御表ニおひてゟ、御役人中

御趣意之程を深可奉汲受ハ、尤後年相成、御振廻立直ハゐゟ、御返金等ニゟ不被爲及候、右之通

御手元御不如意を不被爲厭、御調達丈之御金被差出、其上ニゐ人別・馬・舩迄ゟ出銀之儀、伺通被　仰付御事候間、　思召之程不取違、右　御初ニ被差出候

御賢慮之一筋奉承知、下々迄ゟ人別出銀之儀、當御時節を辨、御受申上ハ樣可仕ハ、

右之通表方ハ致通達、奥掛・御勝手方ハゟ相達、支配下與中・諸鄕地頭所其外ハゟ、不洩樣申渡有之ハ樣、向々ハ可申渡候、

（朱）「寛政二年」八月　（島津久命）伊賀

33

齊宣公御譜中

秋九月、齊宣欲二參覲發一レ國、故嚴令二家老・若年寄・大目附一、以二留守施政之事一曰、

在白木御文書六番箱三十中

家老
若年寄
大目附ニ

領國中取締之儀、從
御先代度々被仰出趣有之、先達而茂申付通り、當留守中甚致心配事り間、萬端緩無之樣、掛役々ニ嚴敷可申付り、近年中
中將樣御下向之儀相願り含ニり、
御下向之上一躰風俗被遊　御覽、不行屈筋ニ被爲在
御沙汰り而茂、我等申譯無之及迷惑事り間、此儀を能々相考、先々最通屹と其詮相立り樣、精々盡吟味可申渡り、

一重役始諸役人下役迄も勤向聊無私曲可致精勤り、申付置り役儀茂、輕身分たり共、其役場ニ被撰り茂重事り間、疎存り而茂本意不相叶り、往々爲ニも可相成と見掛り儀茂、役場之仕來又茂仕向相替り而茂、其役場之迷惑ニ茂可相成抔と、用捨り而茂、奉公ニも不相成り間、依事存寄之儀茂、同役中令熟談、吟味之趣可得差圖り、惣而平日之用向迎も不相屯、速相辨、請持之役職夫々一人前詮立り樣心掛肝要り、勤向不事足、科をも受り樣成立り而茂、誠殘念之事り、

一見聞役之儀、下役たり共重キ役柄り間、第一身分を相嗜、職分を相守、見聞之趣茂誰人之上たり共、無用捨可申出り、併役職を相守迚、差而不詮立儀を毎々申出ニ茂不及り、且亦役柄并奥向之面々出入之儀、弥以規定通相守可申り、若心得違之者於有之茂、卽可申出り、

一家柄之面々并諸士一統生立柄之儀、去年細々申聞置り、弥以其旨を相守、身分を相慎、稽古方等付高下入交之節迚も、風俗を不亂、律儀可相交り、吳見を不用、我儘生立、往々奉公方も不相勤、徒ニ一生を送り茂、殘念之事り間、兼々身近者共より幾度も申散、用立り樣可相生立り、

一學文武藝相勵り樣毎々申渡有之り處、近年茂心掛り由り、然共學文武藝さへ致り得茂、相濟事之樣取違り哉、申渡之趣意不汲受、容貌言語等一切無頓着之族も有之由、不可然り、右躰之者ニ茂、師範之者ハ氣を附、分而致教訓り樣可申付り、

一所帶方不如意之處、先般御用金被　仰出、當時年限中尚又儉約相用り得共、莫太之入用、中々一通之儀ニ而

ゟ難取續時節ゝ間、少事たり共せり詰、金納無滯樣存ゝ、勝手方之儀ゟ、掛家老專請持之事故、油斷無之筈ゝ得とも、表方ニゟ存寄之儀ゟ不差置及相談、勝手向繰合ゝ樣可有之ゝ、

右之趣從　御先代分ゟ被仰付ゝへとも難最通、就中留守中ゟ一涯手堅可有之處、却ゟ相緩ミゝ由、別ゟ如何之事ゝ、無程當地令發足ゝ付、此旨申付ゝ條得其意、表向ハ申渡ゝ節ゟ、猶又此餘意を取、委細之添書を以末ゝ迄不洩樣可申渡ゝ、風俗取締之儀ニ付ゟ

中將樣被勞　尊慮御事故、以來屹と其詮相立、被遊御安慮ゝ樣可心掛ゝ、

九月

右ノ上包仰出トアリ

外包ニ

〔朱〕〔三十八〕

太守齊宣公仰出御筆寫

右寛政二年戊九月三日、石見殿ゟ被成御渡御筆、

御本書之儀御手振不宜所有之ゝ間、御右筆ニ書改被仰付可相下旨　御意之趣有之ゝニ付

御本書同前可納置旨、本田孫九郎致承知之納置ゝ事

35　近秘野艸　齊宣公

寛政二年九月六日　公發府城、琉使扈從如首途時、自向田　公如陸路、琉使舟行會赤間關爲例、此行　公命定期會于大坂、十一月二十一日　公以琉使至芝邸、

大家遣松平和泉守、就邸勞之、二十五日行朝覲禮、二十七日

大家使松平伊豆守信明、進　公官位、敍從四位上、任左近衛中將、別使山田肥後守、賜廩米二千俵、十二月朔日公造朝拜轉陞恩、二日以琉使朝謁

大家行聘賀禮、五日復以朝謁、令奏方樂宴賚如例、既而遣還、十五日　公朝謁

大家於黒書院（類緣）松平右京亮贊之、而　公坐闕内（右方）、因閤老拜如前命、二十三日

大家内書賜　公時服三十・鯛一匣賀歲杪也、

36　重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲鳥居丹波守可述ゝ也、

「寛政二年」(朱) 九月七日　　家斉公墨印

松平上總介殿

37

重豪公御譜中

寫正文在文庫

豐後守(島津斉宣)は佐竹右京大夫(義和)殿妹縁與、願之通今日被仰出ゟ付、年寄衆同格本多彈正大弼(忠籌)殿は、留守居使者を以御禮申達ゟ、

但八月廿五日右願差出置ゟ處、九月廿七日明日類中ゟ壹人登　城候様、剪紙到來ニ付、久留嶋帶刀差出候處、願之通被仰付ゟ付、同人直ニ廻勤ゟ事、

「寛政二年」(朱) 九月廿八日

38

仝上

寫正文在右筆所

御ふミ下されゟ、今日は瓊岸院(家斉女)様御一七日に當らせられゟに付、御機嫌御うかゝひ被成ゟ御ふミ之趣、よろしく申上まいらせゟ、かしく、

「寛政二年」(朱)

松平上總介様人〻御中

常盤井
萬里小路
梅之井
野むら
高はし

39

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

御札令拜見ゟ、弥御堅固珎重存ゟ、然ゟ來月遷幸供奉、御子息被　仰出ゟ由、目出度存ゟ、就右御合力之儀委曲致承知ゟ、當分稠敷儉約中何方は及断ゟ、乍時節格別成御事ゟ付、被示聞ゟ通ニゟ難相辨候得共、折角致調進ゟ様申付ゟ、猶其許は差置ゟ留守居之者より可申入ゟ、恐惶、

「寛政二年」(朱) 十月十八日　　松平上總介

堤三位(敬長)様御報

40

仝上

正文在文庫

重陽之

御内書可相渡ゟ間、明日五半時

御城ゟ家來可被差出ゟ、以上、

「寛政二年」(未)十月廿日　　鳥居丹波守(忠意)

松平上總介殿

41

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

猶以代筆相用ゟ故、大意迄を爲相認ゟ、以上、

御札令拜見ゟ、如仰寒冷相增ゟ得共、弥御堅固珎重存ゟ、

然ゟ御蜜啓之趣致承知ゟ、委細其許ゟ差置ゟ留守居之者

より可申上旨申付ゟ、當時任取込、此段代筆を以及御答

ゟ、恐惶、

「寛政二年」(未)十月廿三日　　松平上總介

平松三位(時章)様　御報

42

重豪公御譜中

正文在琉球國司

尊書致拜見ゟ、

中將様ゟ爲年首御祝儀、目錄之通被差上之、到江府遂披

露候處御滿足　思召候、此旨可有洩達候、恐〻謹言、

「寛政二年」(未)十一月九日　　島津求馬(久昶)　實名判

三司官

43

仝上

尊書致拜見候、

太守様御禮席御着座之儀、被　仰出ゟ爲御祝儀、以宜野

灣王子

中將様ゟ御太刀一腰・御馬代黄金十兩并目錄之通被差上

之、到江府遂披露候處

御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐〻謹言、

「寛政二年」(未)十一月九日　　島津求馬　實名判

三司官

44

仝上

尊書致拜見候、

姫君様御婚禮被爲整、奉稱

御臺様と候爲御祝儀、以宜野灣王子
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代黄金十兩并目錄之通被差上
之、到江府遂披露ゟ處
御滿悦之御事候、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、
（朱）「寛政二年」十一月九日　嶋津求馬　實名判
三司官

45
仝上
尊書致拜見候、去歳
太守様御肴被遊御拜領ゟ爲御祝儀、以幸地親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀百兩并目錄之通被差上
之、到江府遂披露候處
御滿悦之御事候、此旨可有洩達候、恐々謹言、
（朱）「寛政二年」十一月九日　嶋津求馬　實名判
三司官

46
仝上
尊書致拜見候、當春
太守様御鷹之鶻被遊御拜領候爲御祝儀、以幸地親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀百兩并目錄之通被差上
之、到江府遂披露ゟ處
御滿悦之御事候、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、
（朱）「寛政二年」十一月九日　嶋津求馬　實名判
三司官

47
仝上
尊書致拜見候、
明姫様御婚姻被爲整候爲御祝儀、以幸地親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀百兩并目錄之通被差上
之、到江府遂披露ゟ處
御滿悦之御事候、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、
（朱）「寛政二年」十一月九日　嶋津求馬　實名判
三司官

48
重豪公御譜中
扣正文在右筆所
なを〳〵いかほともよろしく御沙汰たのミそんしま
いらせゟ、めてかしく、

一筆申上まいらせけ、
上ゝ様ます〳〵御機けんよく御座なされ、恐悦にそんし奉りけ、然ゝ此節同氏豐後守琉球人めしつれけに付て、上使を以て御米はひ領仕り、私にをひて有難き仕合にそんし奉りけ、右之御禮
御臺様に申上たくけ、御序の折から、よろしきやうニ御取成たのミ入そんしまいらせけ、めてたくかしく、

（朱）「寛政二年」　常盤井さま
萬里小路さま
梅の井さま
野むらさま
高はしさま　ゟ申給へ

49

仝上
寫正文在文庫
なを〳〵いか程もよろしく御沙汰たのミそんしまいらせけ、めて度かしく、
御ふミ拜見いたしけ、
上ゝ様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、恐悦そんし奉りけ、扨は御捉飼の鸚一羽、御表より進られけ付、拜領被仰付けに付、御内ゝにて
御臺様より拜領仰付られ、有かたき仕合にそんし奉りけ、此よし何分ニも宜御取成たのミ入そんしまいらせけ、めて度かしく、

（朱）「寛政二年」　御つほねさま
御返事

50

仝上
扣正文在右筆所
なを〳〵いか程もよろしく御沙汰たのミそんしまいらせけ、めて度かしく、
御意のよしにて御ふみ拜見いたしけ、
上ゝ様ます〳〵御機けんよく御座なされ、恐悦にそんし奉りけ、今日ゝ
御臺様御袖留させられ候御しうき、御にき〳〵敷御いわゐ遊ハされけ御事、千秋萬歳めてたき御儀ニそんし奉りけ、それに付御目錄之通り拜領仕り、有難き仕合にそんし奉りけ、此よし何分にもよろしく御取成たのミいりそんしまいらせけ、めて度かしく、

(朱)「寛政二年」　花まちさま
御つほねさま
とみたさま　御返事

51

齊宣公御譜中

先ゝ是天明六年

大樹家治公薨、七年四月

家齊公任征夷大將軍、今茲寛政二年中山王尚穆遣ゝ使賀ゝ之、正使宣野灣王子朝陽六月十四日、副使幸地親方良篤七月二十一日着鹿兒島、九月六日齊宣爲二參覲一發二麗城一、乃率二兩使一、十一月二十一日着二江府一、二十二日大樹家齊公遣二上使松平和泉守乘完一傳二　懇命一、二十五日齊宣登　城謁二大樹家齊公一、述二參覲之禮一家齊公更降二　懇命一、其他琉使登ゝ城拜謁等之事悉如二先規一、二十七日

幕府遣二　上使山田肥後守(利壽)一、賜二米二千俵一、因下是率二琉使一參府之先例上也、翌三年辛亥三月十三日兩琉使歸二着麗島一、

○冬十一月二十七日、敍二從四位上一、任二左近衛權中將一、

52

重豪公御譜中

先ゝ是齊宣敍二任從四位上左中將一、故今茲冬十二月朔日獻二卷物五及二種一荷于

家齊公、一種一荷于

御臺所一、奉ゝ謝ゝ之、

53

仝上　　九番中　長持一号
　　仝長持二号上
寫正文在文庫　　御叙任口　宣案等

一卷物五

(朱)「十二月九日、豊後守官位被仰付候付、御内々にて

一二種一荷

御臺様より仰文を以御祝被遊、御目録之通拜領物被仰付候、御受毎之通、

右　公方様は、豐後守中將官位御禮申上候付、伺之上

同十日文を以御礼老女衆連名宛二面差出、豊後守江拜領物之御礼書入申上ル

自分ゟ留守居使者を以獻上、　御本丸檜之間は奏者番

牧野備前守(忠精)出席、目録差出ル處、追ゟ可遂披露旨被申

聞ル由、本城源七郎(輝丞)相勤、

一一種一荷

(朱)「十二月十三日、豊後守官位之御礼として

右　御臺様は同斷ニ付獻上、

御臺様江目録之通致進上候処、披露相済候段、老女衆より文を以申来候」

一一種

右　蓮光院様は同斷ニ付差上、

但獻上之次第毎之通、
一豐後守官位之御禮申上ゟ付、蒙
御懇之上意ゟニ付、爲御禮老中方ゟ留守居使者を以申
達ゟ事、
「寛政二年」(未)十二月朔日

54

仝上
扣正文在右筆所
なを〳〵いかほともよろしく御沙汰たのミそんしま
いらせゟ、めて度かしく、
御意のよしにて御文拜見いたしゟ、
上〻様ます〳〵御機けんよく御座なされ、恐悦にそんし
奉りゟ、然れはこのたひ豐後守官位仰付られゟニ付、御
祝ひ遊ハし、御内〻にて御もく錄之通り拜領仕り、あひ(ママ)
かたき仕合にそんし奉りゟ、此よし何分にもよろしく御
取成たのミ入そんしまいらせゟ、めて度かしく、
「寛政二年」(未)
はな町さま
御つほねさま
とみたさま
御返事

55

仝上
寫正文在右筆所
口上之覺
松平豐後守殿官位之御禮として
御臺様ゟ御もく錄之通り御上ケなされ、ひろふいたしま
いらせゟへハ、めてたく　御滿足に思召ゟ、何もよふ申
せとの御事ニ御座ゟ、めてたくかしく、
「寛政二年」(未)
花　町
つほね
とみた
まつ平
上總介様ゟ
口上

56

重豪公御譜中
扣正文在右筆所
猶以御端書之趣、委曲令承知ゟ、以上、
御札令拜見ゟ、弥御堅固珎重存ゟ、今般御子息御元服首
尾能御整、目出度存ゟ、就右先達ゟ御内蜜之儀令調進ゟ、
御挨拶之趣、殊御傳來之　法皇宸翰一軸、預御贈與被入
御念儀忝存ゟ、恐惶、
「寛政二年」(未)十二月十五日
松平上總介
平松三位様(時章)
御報

57 重豪公御譜中
正文在文庫

今朝鯛一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政二年」十二月廿一日　乘完判

松平上總介殿　松平和泉守乘完

58 (島津重豪)大信公御子　御七男(為次郎)

寛政二年庚戌十二月二十一日生於江府、母同茂姫(實母有川十右衛門貞寛養女)、

○八年丙辰七月五日夭亡(以三日為忌日)、法號麗珠院殿本光慧明大禪童子、建墓於惠燈院及江府大圓寺、

59 近秘野艸　重豪公御子

爲次郎

寛政二年庚戌十二月二十一日生于芝邸、母市田氏(實有川十右衛門貞寛養女而松元盛右衛門之妹、名於里江、寛政三年辛亥三月進御年寄格、列於房方下、九月五日卒于芝邸、年二十六、葬大円寺、法名清貌院殿正月麗光大姉)、

八年丙辰七月五日(文政三年命以三日為諱辰)夭亡、法號麗珠院殿本光慧明大禪童子(安圭子、惠燈院)、

60 重豪公御譜中
正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平越中守(定信)可述ハ也、

(朱)「寛政二年」十二月廿七日　家斉公墨印

松平上總介殿

61 重豪公御譜中
正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政三年」正月七日　信明判

〃　松平上總介殿　松平伊豆守信明

62 白木御文書六番箱　四十号

吉書

一神社佛閣修造興行事、
一可專勸農事、
一可徵納國々年貢事、
右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、
寛政三年正月十一日　齊宣御判

63
重豪公御譜中
正文在文庫
爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、
(朱)「寛政三年」正月十一日　信明判
〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」松平伊豆守信明

64
重豪公御譜中
今茲寛政三年辛亥春正月二十七日
家齊公遣二木原兵三郎白鄕於芝邸一、賜二御鷹之鶴一、齊宣代奉二恩旨一、島津又吉郎詣二各老邸一、爲二重豪一謝レ恩、

65
重豪公御譜中
正文在文庫
歳暮之
御内書可相渡ゟ間、明日五半時
御城ゟ家來可被差出ゟ、以上、
(朱)「寛政三年」二月廿六日　松平越中守
松平上總介殿

66
仝御譜中
同年二月十三日齊宣上二願狀一、請下聘二佐竹右京大夫義和妹一成上レ婚允容爲、二十七日整二婚儀一、是日　御臺所以二女使一、賜二鯛一折于余一、越三月二十一日獻二縮緬五卷于家齊公、白銀三枚于　御臺所一、拜二謝齊宣婚姻一矣、

67
仝上
寫正文在右筆所
上々樣かた御機嫌能ならせられ御めてたさ、扨は御日柄よく豐後守殿御婚姻御整なされゟ御事めてたさ、それニ付、此鯛一折御いわゐ遊し、御内々にて
御臺樣より遣されゟ、誠に幾千とせ萬々年の外迄も御長

久御はん昌の御事にて、御目出度さのミいわゐ入まいらせゟ、何も心得ゟて宜く申せとの御事ニ御座ゟ、め出度かしく、

なを〳〵めて度かしく、

（朱）「寛政三年」

まつ平
上總介様
人〻御中

花　町
つほね
とみた
ゟ

68

齊宣公御譜中

三年辛亥春二月十三日齊宣上レ書、請下娶二佐竹右京大夫義和（出羽国久保田城主）妹一於幕府上、幕府允レ之、越二十七日成二婚儀一、

69

近秘野艸　齊宣公

寛政三年辛亥二月二十七日結納佐竹氏行婚姻禮、三月九日口　宣宣旨自京達　公受焉、二十一日久留島帶刀爲公造朝、獻物件謝婚姻恩、

70

重豪公御譜中

正文在琉球國司

尊書致拜見候、

公方様御代替爲御祝儀、以宜野灣王子

中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀百兩并目錄之通被差上之、到江府遂披露候處

御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐〻謹言、

（朱）「寛政三年」三月廿八日　　嶋津求馬　實名判

三司官

71

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

同氏上總介母方祖父嶋津靜山（貴儔）事、於國元先月十日死去仕ゟ、上總介儀當時之續半減之忌服左之通、

忌十日　三月十日より同月十九日迄

殘日數無之ゟ付、遠慮一日、

服四十五日　三月十日より四月廿四日迄

右之通及御屆ゟ、以上、

四月六日　　松平豐後守

72

仝上

寫正文在文庫

嶋津靜山殿、於國元三月十日死去ニ付、忌服屆書、御用番松平和泉守殿ゟ、留守居助伊木喜兵衞を以差出ケ、

但忌殘日數無之故、壹日致遠慮ケ、

（朱）「寛政三年」四月六日

73

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

なを〳〵いかほともよろしく御沙汰たのミそんしまいらせケ、めて度かしく、

御ふミ拜見いたしケ、

上〻様ます〳〵御機嫌能御座なされ、恐悦にそんし奉りケ、扨は、今日同氏豐後守國元ゟ發足いたしケに付、御ぬり重一くミ

御臺様より御内〻にて拜領仕り、誠に以て有難き仕合にそんし奉りケ、此よし何分にもよろしく御取成たのミ入そんしまいらせケ、めて度かしく、

（朱）「寛政三年」　おつほねさま　御返事

74

齊宣公御譜中

夏四月十五日

幕府以二上使一賜レ告、諸事如二先蹤一、五月朔日發二江府一、六月二十五日午上刻着二麗城一、

75

近秘野艸　齊宣公

四月十五日使戸田采女正齎巻物三十・白銀百枚、來賜公之國、十八日造朝拜辭

大家口命賜馬如例、五月一日發邸、六月二十五日至府城、十一月

大家念率琉人勞、特命　公宜明年述職於七月　特恩也、此月九日如國分、謁正宮、十二月十四日如加久藤放鷹、歷柁城謁長年寺、二十七日反自柁城、

76

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲戸田采女正可述ケ也、

（朱）「寛政三年」五月二日　家齊公墨印

松平上總介殿

77

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鯉節一箱被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政三年」六月廿三日　氏教判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正

78

仝上

端午之

御内書可相渡ゟ間、明日五半時

御城ゟ家來可被差出ゟ、以上、

(朱)「寛政三年」六月廿四日　戸田采女正

松平上總介殿

79

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ゟ、遂披露候處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政三年」七月六日　忠意判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」鳥居丹波守忠意

80

仝上

寫正文在文庫

御煙草盆　一通

右　御臺様ゟ　彰君様就御婚禮獻上可致旨、掛御老中松平越中守殿ゟ前以被申渡置、今朝留守居助伊木喜兵衛使こゟ獻上候事、

(朱)「寛政三年」七月六日

81

重豪公御譜中

同年八月朔日

家齊公遣二木原兵三郎白鄕一、賜二貴鷹所レ搏之雲雀於重豪一、島津淡路守忠持代レ余奉二恩旨一、既詣二老中第一拜謝焉、

82

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平和泉守可述ゝ也、

（朱）「寛政三年」九月七日　　家斉公墨印

松平上總介殿

83

重豪公御譜中

正文在文庫

重陽之

御内書可相渡ゝ間、明日五半時

御城ゝ家來可被差出ゝ、以上、

（朱）「寛政三年」十月廿日　　松平和泉守

松平上總介殿

84

齊宣公御譜中

三年冬十一月六日亥刻、側室（於八百）生二男於鹿兒島一、十五日當二七夜賀一、齊宣命二幼名一、稱二憲之助一、雖二長子一以レ未レ告二之於幕府一、仍用二島津氏一、

85

齊興公御譜中

齊興

初忠温　憲之助　虎壽丸　又三郎　豐後守　從四位下侍從左近衛少將　從四位上左近衛中將　正四位下宰相正四位上從三位

寛政三年辛亥十一月六日（亥刻）生於鹿兒島、母佐竹右京大夫義和（出羽国久保田城主、寛政八年丙辰六月十一日薨、法號芳運、院殿華蕚清心大姉、後改忌日爲同月八日）妹、實母鈴木甚五郎勝直女（於八百、以生母故称内證、弘化三年丙午閏五月十八日辛、法名宝鏡院殿圓爾妙鑑大姉、○於八百始以佐野氏女仕于我、而其実爲鈴木氏女、詳於父公譜寛政八年）、

謹按

（島津斉興）金剛定公之譜、舊藩中史官曾既爲之編集、而其稿及殆成、會明治四年廢藩其事弭矣、後又數年有丁丑之亂、其稿罹兵燹屬烏有焉、宗高今奉命再撰　公譜、而文獻不足、唯因岩崎文庫脱災僅存之文書等而爲之編輯、事詳于（島津斉宣）大慈公譜首卷、故今不復贅於茲也、

○十五日當七夜賀　父公命幼名稱憲之助、雖長子以未告之於

幕府、仍用島津氏、

近秘野艸　斉興公

公

初名忠温　後名齊興　小字憲之助　又改虎壽丸　又稱
又三郎　又稱豐後守　又改大隅守　轉任從四位下侍從
左近衛少將　從四位上左近衛中將　正四位下宰相

寛政三年辛亥十一月六日生于府城、母佐竹右京大夫義和妹、（実母鈴木甚五郎勝直女於八百方、文化四年八月命加殿字、文政二年正月大信公命進其爵称御内証様）

五年癸丑十二月六日始畜髪、七年乙卯四月改稱虎壽丸、

白木御文書六番箱中　五十三

御書院御番頭長谷川丹後守殿御組
同心

佐野善次郎養女
嘉代

右嘉代實父母并素性等之儀、内々承合ハ様承知仕、段々相糺申ハ得共、手寄等ニゐ承ハゐ者聢と相知不申ハ處、善次郎事當春以來御内用ニ付知人ニ罷成ハ付、昨日幸ニ私方ハ差越ハ間、外咄之序不差障様右次第相尋申ハ處、善次郎儀者養子ニゐ、養父佐野勘助と申者、元ト御勘定所付同心ニゐ、四拾ケ年程以前天文方西川忠次郎殿御役所御用手傳等ゑ相勤、其後御書院組同心被仰付ハ由、右勘助ニ男子壹人有之ハ處、病身ニ付家督相續難致、町醫ニ相成佐野養伯と申、最初ゐ本町邊ニ住居仕、其後所縁有之ハ付、甲府ハ罷越居、拾七ケ年以前於彼地病死仕ハ由、嘉代儀者、右養伯實娘ニゐ、三歳之時父相果ハ由、且又當善次郎儀者、牛込御徒士町ハ罷居ハ御徒士牧野嘉平次と爲申者之悴ニゐ、拾六歳之時勘助方ハ養子ニ相成ハ付、養伯儀者弟ニ致置ハ處、右通嘉代幼年ニゐ父相果、外ニ致介抱ハ者ゑ無之ハ付、嘉代儀者直ニ善次郎方ハ引取養育仕ハ由、嘉代實母儀者、其比甲府ハ罷居ハ町醫龜山宗因と申ハ者之娘ニゐ、養伯妻ニ致ハ處、嘉代出産之節ゐ相煩、其年病死仕ハ由、右牧野嘉平次并佐野養伯・龜山宗因三人共家跡當時相絶爲申由ニ御座ハ、

右之通承申ハ間此段申上ハ、以上、

（朱）「寛政三亥」　五月十六日　（朱）「御留守居付役」　桑山甚助

右一通

十一月六日亥刻
御誕生　御中蔦　やを

右二通ノ外包ニ

一寛政三年辛亥十一月六日亥刻　(朱)「五十三」

御男子様御誕生付御母名書壱通、

一右御母素生之儀、御留守居附役桑山甚助聞合書壱通、

右大炊殿ゟ内分を以、御記録奉行江為知置ル様被仰渡ル段、面高善右衛門御取次ニ而本田孫九郎致承知之、

右書付被相渡ル付書写、本書ハ相返ル事

(朱)「亥十一月八日」

88の1

白木御文書六番箱中　五十四

去ル六日於大奥御誕生之御男子様、昨日御七夜御祝ニ付

從

中將様御名被進

憲之助様と奉稱候、先御内分之御取扱ル間、此旨承置ル

様可申聞置ル、

右之通大炊殿ゟ御口達を以被仰渡ル、以上、

十一月十六日　　面高善右衛門

88の2

憲之助様御事、先御内〻之御取扱ニ而被遊御座ル御方様

故、嶋津之御性號被遊御用ル、

右之通可申聞置旨、大炊殿口達を以被仰渡ル、

十一月六日　　面高善右衛門

右包紙ニ

亥十一月六日御誕生　御男子様御名被進

憲之助と奉称、先御内分之御取扱故、嶋津之御称号被遊御用ル、

右之通大炊殿御口達ニ而被仰渡ル付、御取次面高善右衛門覚書

弐通、亥十一月十六日善右衛門ゟ本田孫九郎江被相渡ル事、寛

政三年亥十一月十六日　(朱)「五十四」

89

白木御文書九番箱中　三十二番

憲之助

右包紙ニ御名

箱蓋ノ裏ニ御誕生之節被進トアリ

外包紙ニ(朱)「三十二番」憲之助様と御名假名附

御目錄　壹通トアリ

(朱)「右齊興公御幼名ニテ、寛政三年辛亥十一月六日御誕生也」

90

重豪公御譜中

正文在琉球國司

尊書致拜見ル、

中將様ハ爲年首御祝儀、目錄之通被差上之、到江府遂披

露ハ處
御滿足思召ハ、此旨可有洩達候、恐々謹言、
「寛政三年」十二月四日　嶋津求馬　實名判
三司官

91
仝上
尊書致拜見ハ、
太守様御官位御昇進之爲御祝儀、以盛嶋親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代黄金十兩并目錄之通被差上
之、到江府遂披露候處
御滿足之御事候、此旨可有洩達ハ、恐々謹言、
「寛政三年」十二月四日　嶋津求馬　實名判
三司官

92
仝上
尊書致拜見候、
太守様御縁組被　仰出候爲御祝儀、以盛嶋親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀五十兩并目錄之通被差
上之、到江府遂披露候處
御滿悦之御事候、此旨可有洩達候、恐々謹言、
「寛政三年」十二月四日　嶋津求馬　實名判
三司官

93
仝上
尊書致拜見候、
太守様御結納御婚姻被爲整候爲御祝儀、以盛嶋親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀五十兩并目錄之通被差
上之、到江府遂披露候處
御滿悦之御事ハ、此旨可有洩達ハ、恐々謹言、
「寛政三年」十二月四日　嶋津求馬　實名判
三司官

94
仝上
尊書致拜見ハ、
時之丞様御四男之御屆被爲濟候爲御祝儀、以盛嶋親方
中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀五十兩并目錄之通被差
上之、到江府遂披露候處
御滿悦之御事候、此旨可有洩達候、恐々謹言、

(朱)「寛政三年」十二月四日　　嶋津求馬實名判

三司官

95

重豪公御譜中

今茲十二月十五日　徳川刑部卿治國(大樹家齊公之舎弟)整二婚儀於一橋邸一、是日重豪獻二煙盤一于　御臺所一、是仍二老中之命一也、

96

仝上

扣正文在右筆所

なを〳〵いかほともよろしく御さたたのミ入そんしまいらせけ、めて度かしく、

一筆申上まいらせけ、

上〻様ます〳〵御機けんよく御座なされ、恐悦にそんし奉りけ、然れは今日刑部卿殿(徳川治國)御婚姻首尾よく相濟、め出度き御儀にそんし奉りけ、右の御祝儀申上たく、御序の折から

御前よろしきやうに御取成たのミ入そんしまいらせけ、め出度かしく、

(朱)「寛政三年」

常盤井さま

萬里小路さま

梅の井さま

野むらさま

高はしさま

〻〻申給へ

(朱)「本文御婚姻二付、御祝儀御伺之上當日被差出、尤此節御婚姻二付而者、御先例と者相替、諸事御作略之御事二而、段〻御勤事も御先例とは相替ケ事」

97

仝上

正文在文庫

今朝鯣一箱被獻之ケ、遂披露ケ處一段之御仕合ケ、恐〻謹言、

(朱)「寛政三年」十二月十九日　　信明判

〆　松平上總介殿　　松平伊豆守信明

98

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可述ㄟ也、

(朱)「寛政三年」十二月廿七日　家斉公墨印

松平上總介殿

99

重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ㄟ、遂披露ㄟ處一段之御仕合ㄟ、恐々謹言、

(朱)「寛政四年」正月七日　乘完判

〆　松平上總介殿　松平和泉守乘完

100

重豪公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ㄟ、遂披露ㄟ處一段之御仕合ㄟ、恐々謹言、

(朱)「寛政四年」正月十一日　乘完判

〆　松平上總介殿　松平和泉守乘完

101

重豪公御譜中

去歳寛政三年辛亥夏五月、齊宣賜ㄟ告之ㄟ國、請二今年朝覲之期一、老中奉書命下嚮以ㄟ率二琉使一之特展二常期一宜三秋七月到二江都一、齊宣聘ㄟ人謝ㄟ恩焉、於ㄟ是今茲壬子春正月十八日、重豪亦遣二留守居于老中各第一、奉ㄟ謝二優命一矣、

102

仝上

寫正文在文庫

豐後守當年參勤之時節去ル十一日相伺候處、去々年琉球人召列致參府候付、被成御用捨、當七月中可致參府旨、奉書到來ニ付、右御禮國元より以使申上ㄟニ付、自分ハ留守居使者を以、老中方ハ御禮申達ㄟ、伊木喜兵衛相勤、

(朱)「寛政四年」

103

白木御文書六番箱中　四十一

吉書

一神社佛閣修造興行事、
一可專勸農事、
一可徵納國々年貢事、
右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、
寛政四年正月十一日　齊宣（花押　No.1）

外包ニ
寛政四年子正月十二日雅楽殿ゟ東郷浅之丞江被成御渡、御文書六番箱江相納置ヶ事トアリ　四十一番

104
近秘野艸　齊宣公
寛政四年壬子二月八日如入來温泉、三月九日還自入來、四月二十一日首途、五月二十八日發府城經歷木曽路、八月朔日至芝邸、十二日大家使松平和泉守就邸勞之、十五日行朝覲禮、

105
白木御文書六番箱中四十二
鎧一領
右ハ從往古稲荷社江奉納之鎧、爲古製珎器之處、別ゐ相損依漸失其製形、此節御兵具方格護被仰付、爲引替右鎧被納置之條、到後年無疎略可有格護者也、仍狀如件、
寛政四年壬子二月十五日
名越右膳　恒當判
山岡雅樂　久容判
伊勢播磨　貞矩判
菱刈大炊　隆邑判
嶋津求馬　久昶判

市來稲荷社別當
大明寺

包紙ニ　市來稲荷社江云々略
御書付被成御渡可納置旨、大炊殿ゟ東郷浅之丞致承知、寛政四年壬子二月十五日白木御文書六番箱江納置ヶ事

106
重豪公御譜中
正文在文庫
歳暮之
御内書可相渡ヶ間、明日五半時
御城江家來可被差出ヶ、以上、
（朱）「寛政四年」二月廿日　松平伊豆守
松平上總介殿

107

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲鳥居丹波守可述ル也、

（未）「寛政四年」五月二日　家斉公墨印

松平上總介殿

108

白木御文書六番箱中　四十三

家老

若年寄

大目附ヲ

領國中取締其外之儀等、去ゝ年發足前細ゝ申付置ル通、尚留守中之儀弥以可入念ル、　二之丸造立成就ル未中將樣御下向之儀兼ゐ相願置ル處、當秋中と被　仰出、難有致安心ル、無程　御下向、一統之風俗御見聞之上、萬一思召不相叶ルゐ未、我等未勿論、役ゝ可及迷惑之條、聊緩無之樣可令沙汰ル、且亦時到ゐ手迫之砌ルへ共、萬端繰合を以御不如意不被爲在樣取計、若不行届ルゐ未、存慮不相叶、掛ゐ心配之事ル間、隨分無油斷可遂吟味ル、近ゝ發足ニ付此旨申付置ル、

五月

右上包ニ

御筆仰出　四十三

外包ニ

寛政四年子六月朔日勘解由殿ゟ被成御渡、御記録所へ可致格護置旨、平山五郎右衛門致承知之ル事

109

齊宣公御譜中

寛政四年壬子夏五月二十七日午上刻發麗城、秋八月朔日着江府（謹按幕府賜上使伝銀命且公登城述参覲之礼等之事蓋皆如例、然今失月日等、不能記焉）

○六月修ニ麗南郡元村一條之宮一、獻扁額（宗高按、白尾國柱名勝考云、郡元村一条之宮所記之神与枚聞神社同、旧称一之宮而郡山郷、亦有一之宮、易相混淆、故加之条字以別之也）

110

白木御文書六番箱中　四十四号

覺

御額三十六面

但三十六歌仙御右筆調

右未鹿兒嶋郡元村一條之宮

齊宣公谷山御遠馬之節被遊　御覽、社頭等相古ル付、思

召を以御修覆、神前に右之通掛置ゝ樣被仰付、此節都ゐ致成就、寺社奉行に掛方被仰付ゝ、後年見合に成可相成ゝ間、可相達置旨、播磨殿(伊勢貞矩)依御差圖申達ゝ、以上、

寛政四子

六月　　鎌田愛太夫(政詮)

御記錄奉行

右外包ニ　鹿児嶋郡元村一条之宮云々略

四十四号

寛政四年子六月十三日納置之、東郷浅之丞存ストアリ

111

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鰹節一箱被獻之ゝ、遂披露ゝ處一段之御仕合ゝ、恐々謹言、

(朱)「寛政四年」六月四日　　忠意判

〆　松平上總介殿　　鳥居丹波守忠意

112

齊宣公御譜中

初天明七年命二家老二階堂主計行旦一爲二惣宰一、建二築二丸一、爲二是供一　父公在國之居館一也、十一月起レ工、至二翌年八月二十四日一廣間書院等粗成、會二京師大火大内及二條城炎上一、

幕府起二之建築一費用繁夥、齊宣因請二獻レ金以裨二其資一、幕府許レ之納二金貳拾萬(両脱カ)一、於レ是　父公慮二國用不レ贍而停二二丸工事一、方二是時一、齊宣弱冠　父公聽レ政、宜二躬歸國親察二其得失一也、故齊宣咨二家老一、請二　父公一以レ竣二二丸工一、　父公不レ聽レ之、家老具陳二事狀一再三、父公竟可レ之曰、營造之事務從二儉素一苟毋レ作二華奢一、惟適レ用以爲レ度、於是寛政二年庚戌正月二日再起レ工、至二三年六月十二日一便室内廳悉成、今茲四年壬子夏四月二十七日使二一門島津若狹忠救代行一移徙之儀一焉、

113

齊宣公御譜中　　白木六番箱四十三号

去歳辛亥五月齊宣賜レ告歸レ國也、請二間明年參覲之期一、老中奉書傳レ命曰、曩率二琉使一而來、今也宜寛假延二之期一也、及二來年秋七月一、至二江府一則可矣、既而今茲壬子夏五月參覲發レ途之期迫矣、且　父公復歸レ國視レ政之事、蓋在二今秋一歟、是素齊宣所レ請也、若　父公歸レ國之後、苟有下勞二其憂念於國政一之事上、則齊宣誠不レ勝二恐懼一焉、是以令二留守家老・若年寄・大目附一如レ左、

○齊宣既雖レ襲レ封、尚弱冠故　父公介二齊宣一聽レ政、先レ
是客年齊宣將賜レ告歸レ國也、　父公語曰、余介レ汝聽レ
政五二年于此一、汝年長而婚儀既成、可レ謂二成人之道具一
矣、況既下レ國親預二知國政一、雖二專委一レ政亦莫二復憂一
也、余之聽レ政爲二之於無窮一人以謂レ何、今當レ辭レ之也、
齊宣雖二固請一レ之　父公辭レ之再三、余不レ能レ已竟從二其
命一且請曰、兒今唯命之從、然伏冀介兒聽レ政之名尚存
焉、不レ然恐士民其或莫二安堵一也、　父公曰、姑聽レ之今
茲壬子之夏參覲抵二江府一、　父公復謂齊宣曰、余聽政之
事今無レ實而徒有レ名爾、因以謂若レ有二不慮之事一、老
拙聽レ政之名尚存、則不レ得レ不レ當二其責一、此所二大憂一
請從レ今其名併弭レ之、雖レ然
公朝之勤務國政之要樞殊所二咨謀一則老拙素不レ盡レ心
哉、於レ是乎余不レ得レ已又從　レ命焉、

重豪公御譜中

扣正文在家老座

中將樣御事、深キ　思召被爲在、其上御持病之御疝癪・
御脚痛等御勝不被遊レ付、去未年　御隱居被遊御願
太守樣ゟ御家督無御相違被　仰出候、然處其砌
太守樣未御若年被爲在、殊追々
御初入部ゟ被遊レ御事故、御政務之儀ゟ
中將樣御介助被成進レ御事レ處、昨年迄以上五ヶ年ニゟ
及、且
太守樣御事御年輩ニゟ被爲成レ間、以來ゟ御介助之儀、
御斷ニ　思召レ段去年
御發駕前被　仰進レ得共、未御勤向旁御年功ゟ不被爲在
レ間、何卒今暫ゟ諸事御介助御願　思召レ段被　仰進レ、
然共最早
御下國ゟ被遊、追々御大禮等之儀ゟ被爲濟レ御事ニレ得
ゟ、聊御掛念ゟ不被爲在、就中　御年輩ニゟ被爲成候迄
いつ迄ゟ御介助被遊レ ゟ、無御際限御事レ間、いつれ
ニゟ、此以後御介助之儀御斷ニ　思召レ段、又レ被　仰
達レ、右ニ付ゟ從
太守樣ゟ再往御願被　仰上レ儀、却ゟ恐多　思召レ間、
不被爲及是非、此上ゟ
中將樣尊慮ニ可被任レ、併此上御煩ニ　思召レ、前文
之通實ゟ是より御介助被成進間敷レ得共
御名目ゟ是迄之通御介助之筋ニ被成置度、左レ得ゟ御領
内一統之安氣ニレ間、此御儀分ゟ被遊御願レ趣被　仰進

ハ故、於其儀ハ先一往　御名目ハ御介助之筋ニ可被成置
旨　御領掌爲被遊御事ニハ、然處此度
太守様無程
御參府被遊ハニ付ヲハ、御幸之御時節ニ候間、右
御名目之所ヲ此節御斷被遊ハ、只今通ニヲハ餘り何とか
假令かましく、扨又有ましく事ニハハ得共、萬一非常之
儀ニヲヲ與風到來いたしハヲハ
御名目迄之御介助一入御迷惑之御事ハ間、此節右
御名目迄ヲ御斷被仰進ハ、左ハハ、諸事　御心配ヲ不被
爲在邂逅、被遊　御隱居ハ御詮ヲ相立、偏ニ　御安心之
御事ニハ、勿論已來
公邊御勤向并御國政之儀共御相談ニヲ被爲及ハ節ハ、是
迄ニ不相替、隨分　御心添可被遊段被　仰進ハ處
太守様ニヲ誠ニ無御餘儀御事　御賢慮之程得と被遊
御勘考ハ得ハ、至極御尤之御事ニ　思召、此上ハ弥
中將様思召通御承知被遊ハ之段、御請被　仰上候、
右之趣可奉承知置ハ、

求　馬
播　磨
勘解由

「寛政四年」六月廿日

此年　斉宣公弐拾歳ノ御時ニ当レリ

右　膳

115

全上

正文在文庫

端午之
御内書可相渡ハ間、明日五半時
御城ニ家來可被差出ハ、以上、

「寛政四年」六月廿四日

鳥居丹波守
松平上總介殿

116

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段
之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

「寛政四年」七月六日

乗完判

松平和泉守
乗完

松平上總介殿

117

重豪公御譜中

118

重豪公御譜中

正文在文庫

若君様爲御七夜御祝儀

公方様　若君様ゟ以使者如目錄被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

「寛政四年」（朱）七月十九日　　氏教判

〆　松平上總介殿　　戸田采女正氏教

119

重豪公御譜中

今茲八月五日齊宣上二願狀一曰、老父上總介（重豪）嚮浴二於藩内温泉一、宿痾聊雖レ痊、爾後再發時煩惱、請賜二一期之暇一、使下歸二敝邑一浴中温泉上、若許當下以二九月初旬一發二江戸一疾快則不レ待レ期而還上府也爲、越十七日奉書徵二齊宣一、各老聯坐於二白書院廂下一、月直老松平伊豆守信明宣二台命一曰、許二上總介歸一レ國及賜二道服三領一矣、則拜謝而退、二十三日請レ使下伴二庶子島津雄五郎（忠厚）一之上レ國亦報可、

120

齊宣公御譜中

二十五日　大家召二我年寄女于　城一、令二老女一重賜下　公所二親着一之道服一領上、於レ茲九月朔日與二雄五郎一發二芝邸一、側用人矢野男吏清香（本官寺社奉行知側用人）・本城源七郎輝承・愛甲藏記廉盛（今以側役供奉）其他諸有司從駕、經二東海伊勢路之驛一、八日宿二于遠州濱松一、明日風雨、一日淹滯、十日航二今切一、宿二參州赤坂驛一、十五日入二城州伏見之假館一留逗二日、十八日沿レ流而下、到二攝州大坂旅亭一、又留三日、二十二日發二大坂一、歴二山陽路一、十月六日到二長州吉田驛一、明日渉二豐前小倉一、經二筑肥數驛一、十四日自二日奈久（肥後）一航二我薩西出水郷米之津一、則入二假館一、十六日發二出水一止二宿阿久根・向田（川内）・苗代川（日置郡）一（阿久根二日向田一日淹留）、二十二日直入二府城二丸一、則使下番頭谷村孫右衛門純章（本職用人今仮以番頭行）爲二謝恩使一是日發上二丸一、取二路九州東海一、十一月二十四日到二江都芝邸一、十二月朔日登レ營、白書院而見二大樹家齊公一、獻二縮緬五卷・干鯛・昆布各一筐・樽一荷一奉レ謝二歸藩之恩一、水野壹岐守忠韶贊二唱之一、既純章亦自獻二太刀一腰・紗綾二卷・馬代銀一枚一、取二謁于　大家一、其他贈賜問盡如二天明丁未之例一矣、

八月五日齊宣上二書於
幕府一、請二　父公歸レ國浴二温泉一、十七日老中奉書召二齊宣
於　城一許レ之、於レ是　父公九月朔日發二江府一、十月二十
二日入二麗府二丸一、雄五郎隨行（謹按重豪公帰国齊宣公所請暫重豪公辭聴政、然所以憂念国政者豈有異乎、前日哉）

121

重豪公御譜中
扣正文在家老座
同氏上總介持病有之、去未年依願國元温泉ニ致入湯、快
相成致出府ハ處、其後折節差發難儀仕ハ付、國元温泉致
相應候間、壹ヶ年程ゟ御暇被下置度奉願ハ、左ハ去當九
月初旬御當地爲致發足、快ハ去御暇内ニゟ御屆之上參
府可仕ハ、此段相願ハ、以上、
（朱）「寛政四年」　八月五日　　松平豐後守
（朱）「右御願書御日附當日、御先手松平隱岐守殿を以、御用番松
平伊豆守樣江、御留守居二而被差出置候事」

122

重豪公御譜中
正文在文庫

同氏上總介儀、持病有之ニ付、國許ニ差越温泉ニ致入湯
度由、願之通御暇被下、壹ヶ年程も罷在ハゟ參府ハ樣可
被致ハ、快ハハ、御暇内ニゟも致參府度旨、勝手次第可
被致ハ、依之拜領物被仰付、
（朱）「寛政四年」
（朱）「八月十六日御奉書御到來、翌十七日
太守樣被遊　御登
城ハ處、御白書院御緣頰御杉戸涯にて、御老中樣方御列席
御願之通御暇被　仰出、御拜領物被仰付ハ旨、御用番松平
伊豆守樣より御演達、右仰渡之御書付、御直ニ被成御渡ハ
事」

123

重豪公御譜中
正文在文庫
一先年御屆申上置ハ私弟嶋津雄五郎（忠厚）儀、痛所有之ハニ付、
此度（朱）「御付札」同氏上總介國元温泉ニ入湯御暇被下置ハ間、致同
道入湯爲致度ハ、尤上總介參府之節又〻召列ハ樣（可為伺之通候）可仕
ハ、此段相伺ハ、以上、
（朱）「寛政四年」　八月廿三日　　松平豐後守（齊宣）

(朱)「右御窺書御日付当日、御用番松平伊豆守様江御留守居持参、
御用人江取会差出置候処、同廿五日御留守居被召呼、御付札
之通被仰渡ゟ事」

124

重豪公御譜中

扣正文在家老座

125

先月廿五日

(朱)本文致承知　御内證様より御祝儀之儀者、兼而被成来候通、今日便被仰上候様ニ申上、御一門方其外月次御礼罷出候面々

御本丸御老女方より御年寄御呼出こゐ

中将様今度御湯治御暇被　御両殿様江御祝儀、先月廿八日席々渇ニ而被申上、其許并　御中途江戻有来

仰出、御國許ハ　御發駕こ付從　通今日便御祝儀可被申上旨致通達、大目付以上より戻書状を以申上候、尤

公方様御召之御羽織被遊御拜領ゟこ付　隣国為御知之儀、先例を以取計候、先以不相替御拜領被遊、恐悦御同意

御頂戴之上、女御使被差上、御禮御勤相濟、御一門様其

外様ハ爲御知等、御先例之通御使番取扱いたしゟ間、隣

國爲御知之儀ゑ其通可被取計ゟ、右こ付

御両殿様ハ御役人限席々謁こゐ御祝儀申上、兼ゐ大奥ハ

參上之面々、是又御祝儀申上ゟ、

御内證様ハゑ今日便拙者共御祝儀申上ゟ、其元御祝詞等

之儀共、先例を以被致取扱こゐ可有之ゟ、

右申越ゟ條

御内證様被達　御聽ゟ儀ゑ可被申上ゟ、右通御拜領之段

恐悦之御儀奉存ゟ、以上、

(朱)「寛政四年」九月朔日　(朱)「十月十日」

(朱)「上」山岡市正(久容)　菱刈大炊(隆邑)

(朱)「下」嶋津求馬(久昶)殿

伊勢播磨(貞矩)殿

市田勘解由(教國)殿

名越右膳(恒當)殿

126

仝上

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平越中守可
述ゟ也、

(朱)「寛政四年」九月二日　家斉公墨印

松平上總介殿

127

(朱)「近秘野卿中」

寛政四年壬子九月朔日、以雄五郎君發芝邸、十月廿二日
至府城二丸第、

128

重豪公御譜中

同年九月八日　大家修二浚明廟(徳川家治)七回忌法事於寛永寺一、至九日、越翼日重豪使下物頭北條加之助守道獻二白銀二枚一拜上焉、

129

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様　若君様御機嫌被相伺之ハ、益御勇健御儀ハ間、可御心易ハ、隨テ干鯛一箱被獻之ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政四年」九月十八日　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

130

仝御譜中　斉宣公御譜中ニモアリ

同年自二九月十八日一至二二十日一、修二有邦(島津継豊)公三十三回忌法事於福昌寺一者三日、　重豪使下家老伊勢播磨貞矩獻二香奠銀三枚一拜上焉、

131

重豪公御譜中　斉宣公御譜中ニモアリ

同年自二閏九月七日一至二八日一、修二一唯君(島津久保)二百年忌法事於谷山郷皇徳寺一、重豪使下家老伊勢播磨貞矩獻二香奠金二百四一拜上焉、

132

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山浚明院様七回御忌御法事御執行相濟、去月八日御霊前　御参詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政四年」十月七日　松平和泉守乗完判

松平上總介殿

133

今度

浚明院様七回御忌御法事御執行付テ、以使者御香奠被獻之ハ、於東叡山奉納之事ハ、右之趣及言上ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政四年」十月八日　本多彈正大弼忠籌判

松平上總介殿

134

重豪公御譜中

正文在琉球國司

尊書致拜見候、

中將樣ハ爲年首御祝儀、目錄之通被差上之段、遂披露ハ處

御滿足　思召ハ、此旨可有洩達ハ、恐々謹言、

十一月三日　　嶋津求馬　實名判

三司官

135

仝上

尊書致拜見候、

爲次郎樣御五男之御屆被爲濟ハ爲御祝儀、喜屋武親方被

差上ハ付

中將樣ハ御太刀一腰・御馬代白銀五十兩并目錄之通御進

上之段、遂披露ハ處

御滿悅之御事ハ、此旨可有洩達ハ、恐々謹言、

「寛政四年」十一月十三日　　嶋津求馬　實名判

三司官

136

仝上

尊書致拜見候、

公方樣御代替爲御祝儀、宜野灣王子被差上

太守樣江府ハ被召連ハ處、及兩度登　城　御目見蒙

上意御暇被下ハ節、御奉書并御目錄之表御拜領、且又宜

野灣從者共迄拜領物被　仰付、從

御臺樣ゟ御目錄之通御拜領被　仰付ハ、爲御禮以喜屋武

親方

中將樣ハ目錄之通被差上之段、遂披露ハ處

御滿悅之御事ハ、此旨可有洩達ハ、恐々謹言、

「寛政四年」十一月十三日　　嶋津求馬　實名判

三司官

137

仝上

尊書致拜見候、

太守樣當七月中　御參府被

仰出ハ爲御祝儀、以喜屋武親方

中將樣ハ御太刀一腰・御馬代白銀五十兩并目錄之通被差

上之段、遂披露ハ處

御滿悅之御事ハ、此旨可有洩達ハ、恐々謹言、

「寛政四年」十一月十三日　　嶋津求馬　實名判

138 重豪公御譜中

同年冬十一月十五日使二物頭登一城、獻二于家齊公　竹千代君　御臺所各一種千匹一、賀二　竹千代君色直一也、

139

仝上

正文在文庫

若君様爲御色直御祝儀、公方様　若君様ゟ以使者如目錄被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

（朱）「寛政四年」十一月十五日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

140 齊宣公御譜中

十一月十一日齊宣應レ召登レ城

大樹家齊公賜二刀（青江貞次長弐尺三寸五部半代金弐拾枚）一腰・時服五十一、以賞下獻二金貳拾萬兩一以助中皇城新營之資上也、

○十九日

竹千代君遣二奏者番青山下野守忠裕一、賜二色直之賀儀於齊宣及　父公一、齊宣併拜二戴之一、

141 近秘野艸　齊宣公

寛政四年十一月前此新作　皇城、　公上請輸金二十萬兩（年輸五万両凡四年終）以助工料、至是十一日大家賜　公御刀一腰（青江恒次）・御時服五十、賞其功也、又賜預事家老島津伊賀久金・菱刈大炊隆邑銀各五十枚・時服各六、側用人矢野男吏清香・岩下佐次右衛門方恭銀各三十枚・時服各三、側用人面高善右衛門（俊直）俊〻・北郷八右衛門（資甫）〻・本城源七郎輝承・伊集院彌平右衛門俊村・橋口與三次銀各二十枚・時服各三亦嘉其勞也、

142 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又今度被下御暇、其上御羽織拜領之、重疊難有由得其意ゟ、國許到着付而、爲御禮以谷村孫右衛門目錄之通被獻之ゟ、

紙面之趣令承知ハ、恐ゝ謹言、

「寛政四年」十二月五日　本多彈正大弼
松平上總介殿　忠籌判

143

仝上

正文在文庫

谷村孫右衛門

右明六日四時

御城ハ可被差出ハ、以上、

「寛政四年」十二月五日　戸　采女

松平豐後守殿
留守居

144

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又今度被下御暇其上御羽織拜領之、重疊難有由得其意ハ、國許到着付ゐ爲御禮、以谷村孫右衛門縮緬五巻并御樽肴被獻之ハ、遂披露ハ處

御前ハ被召出之、入念ハ段御喜色之御事ハ、恐ゝ謹言、

「寛政四年」十二月六日　戸田采女正
氏教判

松平和泉守
乘完判

鳥居丹波守
忠意判

松平越中守
定信判

松平上總介殿

145

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

なを〳〵いかほともよろしく御さたたのミそんしまいらせハ、めてかしく、

御意のよしにて御ふミ拜見いたしハ、

上ゝ様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、恐悦にそんし奉りハ、しかれハ

御臺様より、私道中　御尋として、御杉重一組・初鰤一はこ御内ゝにてはい領仕り、有難き仕合にそんし奉りハ、

此よし何分にもよろしく御とりなしたのミ入そんしまいらせハ、めてたくかしく、

「寛政四年」(朱)　はな町さま
御つほねさま
とみたさま　御返事

146

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ゟ、就寒中
公方様　若君様御機嫌被相伺之ゟ、益御安全御儀ゟ間可
御心易ゟ、隨ゟ鰯一箱被獻之ゟ、各申談遂披露ゟ處一段
之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

「寛政四年」(朱)十二月十五日　戸田采女正
氏教判
松平上總介殿

147

仝上

御札令披見ゟ、
公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺
御靈屋　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申
談及　上聞ゟ、恐ゝ謹言、

「寛政四年」(朱)十二月十五日　戸田采女正
氏教判
松平上總介殿

148

重豪公御譜中
扣正文在右筆所

來年頭より
(朱)「御付札」
若君様ゟ獻上物可仕旨被　仰渡ゟ、依之同氏(島津重豪)上總介より
公方様江獻上物幷
年中獻上物并勤向、別紙之通爲仕度ゟ、不時之儀ゟ其節
勤品之通可被心得候
ゝ相伺ゟ様致度ゟ、何分被成御差圖可被下ゟ、以上、

「寛政四年」(朱)十二月十七日　松平豐後守

「本文御付紙之通、御留守居御呼出ゟ、御用番戸田様(朱)
より御渡被成、市正殿ゟ十二月廿三日御下被成ゟ付
中將様より御獻上品
公方様御同様ゟ　太守様より
若君様ゟ御獻上品と致相違ゟ付、其段申上、十二月廿
四日與三次又ゝ參上、戸田様御用人大屋勘兵衛ゟ申談
ゟ處、尤之事ゟ付、追ゟ何分御達被成ゟ様ゟ可有之旨
爲申由、與三次より承ゟ、然處　御兩殿様より
公方様ゟ年中御獻上品、又ゟ
若君様ゟ同斷御獻上品書認可差出旨、戸田様御用人を

以與三次承知仕、右之御獻上品手扣ニ相認持參仕ル處、
戸田樣得と御承知被成、別紙御例書之通、以來御獻上
有之ル樣相心得ル樣、御用人を以御口達ニ被仰渡ル、
御付紙ハ御取かへ無之段、是又承知仕ル旨、與三次首
尾書ニ申出ル事」
延享三年故大隅守(島津継豊)隱居以後
大納言樣ニ年中獻上物并勤向左之通、
一二種一荷
右國元到着之御禮以使札獻上、
一御太刀銀馬代
右使者　御目見被仰付ル節自分獻上、
一御太刀一腰
一御馬代黄金十兩
右年頭當地詰合之者を以獻、
一鯛　一折
右若菜之御祝儀
一干鯛一箱
一御樽一荷
右春之御機嫌伺以飛札獻上、
一御肴一種充
右暑寒ニ付同斷
一黄金十兩
右生見玉之御祝儀
一時服二充
右端午・重陽・歳暮
一干鯛一箱
右秋之御機嫌伺以飛札獻上、
一東叡山増上寺其外　御參詣之節、以飛札御機嫌相伺ル、
一惣出仕有之程之節ハ、任御廻狀之旨、以使札飛札相勤
ル、

十二月

(朱)「右御伺書十二月十五日大御目付御廻狀ニ而
御家督樣江年中獻上物并御勤向被仰渡、來年頭より
御獻上有之ニ付
中將樣より御獻上品　隅州樣御例を以御伺被遊、今十七日御
日付ニ而、御用番戸田樣江御留守居を以被差出ル事」

149

全御譜中

先是十一月十九日　竹千代君遣二奏者番青山下野守忠裕一
賜二色直之賀儀于齊宣及我一、齊宣併拜戴、越十二月十八
日達二于薩府一、於レ是呈二飛翰于老中一謝レ恩矣、

150

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

若君様ハ菖蒲御甲・御破魔弓獻上可仕旨被仰渡ル、依之

(朱)「御付札」

相成儀ル者、同氏上總介より爰拙者同様獻上爲仕度ル、

何之通獻上候様可被致候」

此段相伺ル、以上、

(朱)「寛政四年」十二月廿四日　松平豐後守

(朱)「右御付紙御用番戸田采女正様ゟ十二月廿五日、御留守居橋口與三次被召呼被成御渡ル事、

本文御伺之儀ニ付ゐ者、最前

太守様ハ御獻上有之ル様被　仰渡ル砌、御右筆頭より

右付　中將様より御獻上之御伺ニ者及申間敷ル譯申上ル處、段々被及御吟味　中將様より御獻上之御伺ニ者及間敷と御内定被爲在ルゐ、其筋ニ相決居ル處、御留守居橋口與三次御用番戸田様ハ參上ル折柄、御用人松平陸奥守様御父子御伺書被差出ル付、其元様より御伺ハ不被差出ル哉と、粗うつり申聞ル付、與三次より罷歸ル上、去方奥御右筆頭ハ掛合ル處、早々被差出ル様被申越ル付、本文之通被相伺ル處、御附紙を以御獻上被仰渡、子年より御獻上被遊ル事」

151

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲戸田采女正可述ル也、

(朱)「寛政四年」十二月廿七日　家斉公墨印

松平上總介殿

152

仝上

若君様ハ御破魔弓一飾、以使者被獻之ル、首尾好遂披露候、恐々謹言、

(朱)「寛政四年」十二月廿八日　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

（表紙）

重豪公
自寛政五年正月
至同　七年十月
齊宣公

追錄舊記雜錄　巻百四十三

153

近秘野艸　齊宣公

寛政五年癸丑正月五日

大家使松平伊豆守信明　命　公、若菜節亦宜　朝賀、乃偏訪閤老宅拜　恩、七日　朝賀如例、

154

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ㄟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ㄟ、將亦去十一月朔日

若君様初ゐ御表被遊　出御ㄟ段被承之、目出度被存由得其意ㄟ、紙面之趣各申談及　上聞ㄟ、恐ゝ謹言、

（朱）「寛政五年」正月五日　松平伊豆守信明判

（島津重豪）松平上總介殿

155

仝上

御札令披見ㄟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、目度出被存由得其意ㄟ、然ゑ去十一月四日夜　御曲輪内出火之處、早速鎮ㄟ段被承之、恐悦旨尤ㄟ、紙面之趣各申談及

上聞ㄟ、恐ゝ謹言、

（朱）「寛政五年」正月五日　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

156

仝上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ㄟ、遂披露ㄟ處一段之御仕合ㄟ、恐ゝ謹言、

（朱）「寛政五年」正月七日　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

157

仝上

爲若菜之御祝儀、

若君様江鯛一折被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」正月七日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

158

重豪公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」正月十一日　　戸田采女正氏教判

松平和泉守乗完判

松平伊豆守信明判

鳥居丹波守忠意判

松平越中守定信判

松平上總介殿

159

仝上

爲年頭之御祝儀、

若君様江以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」正月十一日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

160

白木御文書六番箱中　四十五

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

寛政五年正月十一日　　齊宣御判

右包紙吉書

右上包ニ

寛政五年丑正月

(朱)「四十五」御吉書壹通

右寛政五年丑二月廿二日、求馬殿ゟ児玉祝人江被成御渡、白木御文書六番箱江相納置ハ事

161

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ㄟ、
公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ㄟ、將又
舊冬同氏豐後守(斉直)儀被爲　召、先達ゐ上ケ金被致御用途ニ
ゑ相成ㄟ付、御刀・時服拜領、其上　御目見被　仰付、
御懇之蒙
上意、於其方難有由得其意ㄟ、紙面之趣各申談及
上聞ㄟ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」正月十五日　　松平伊豆守
信明判

松平上總介殿

162

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ㄟ、
公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ㄟ、將又
去十一月十五日　若君様御色直御祝儀相濟ㄟ段被承之、
目出度被存由得其意ㄟ、依之被差越使者ㄟ、紙面之趣各
申談及　上聞ㄟ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」正月廿一日　　松平伊豆守
信明判

松平上總介殿

163

全上

御札令披見ㄟ、
公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ㄟ、將又
去十一月十九日從　若君様御色直爲御祝儀、同氏豐後守
并其方ニ以　上使拜領物有之、重疊難有由得其意ㄟ、紙
面之趣各申談及　上聞ㄟ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」正月廿一日　　松平伊豆守
信明判

松平上總介殿

164

全上
寫正文在文庫

此節山田司、造士館ニ被掛置、山本傳藏御役替、兩人共
段々難有被　仰付ㄟ儀、何そ身分ニ懸御取分被　仰付ㄟ
筋ニゐ無之、先年厚　思召之一筋を以、造士館御造立有
之、其以後諸生無怠慢致出精由ニゑ候得とも、兎角大業
之事故差ゐ被　思召上ㄟ程ニも無之、今躰ニゐゑ往々

御本意之通詮立ゟ所無覺束被　思召ゟ付、分ゐ兩人江教育方精〻可相勤由ニゐ、右通被　仰付ゟ付、猶又此以後學問向一涯發興、往〻人材輩出　御國家之御用ニ相立ゟ様無之ゟゐ不叶事ゟ、尤御家老中是迄何そ造士館之儀ニ付、緩疎ゟ無之事ゟ得共、此以後猶又右之　思召を奉汲受、學問向之儀混すら深切ニ取扱ゟ様ニと之御事ゟ、左ゟゐ大身分以上之家柄ゟ、往〻大役をゟ相勤可申身分、無學ニゐゟ　御國家之御用ニ難相立儀ゟ間、大身分并諸士之子弟、何れゟ講堂講釋聽聞出席、且平日ゟ學問稽古出精ゟ様有之度儀と被　思召上ゟ、

右之通此節　御内沙汰被爲　在ゟ、先年厚　御旨趣を以造士館御造立、其後諸生を初、學業少〻ゟ相進ゟ得共、思召ゟ程ニ無之、就中大身分以上之面〻、學問致出精ゟ向キ有少キ様、薄〻被　聞召通、　御氣之毒被　思召上ゟ、右家柄之儀ゟ、往〻重御役をも相勤可申儀、學問無之候ゐゟ　御國家之御用ニ難相立事ニ被　思召上、此節右通分ゐ爲被爲及　御沙汰御事ゟ間、何れゟ難有被奉承知、此後一涯學問稽古心掛可有之ゟ、尤學問之次第義理之大筋を相辨ゟゐ、御政道筋之心得ニ相成ゟ様知識開發有之度被　思召上ゟ御事と奉恐察ゟ、其上ニゟ傳(ママ)學詩文等迄ゟ、諸生同様被心掛ゟ向ゟ有之ゟハ〻、夫ゟ格別之事ゟ得共、一統其通稽古有之ゟ様ニとの儀ニ付ゐゟ無之ゟ條、前件之心得を以折角可被致出精ゟ、御家老中是迄造士館之儀付、緩疎ゟ無之事ゟ得共、此以後猶又右之　思召を奉汲受候様、其外　御沙汰之趣共被爲　在、難有承知爲仕儀ニゟ、右ニ付大身分以上講堂出席等之次第迄ゟ追〻申渡ゟ、勿論諸士到迄一統可致出精、猶又人品學力等之次第を以自夫〻相應ニ可被召仕ゟ、

右可申渡ゟ、

(朱)「寛政五年」正月

(島津久金)伊賀
(島津久昶)求馬
(伊勢貞矩)播磨
(市田教国)勘解由
(名越恒篤)右膳

165

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、如承改年之慶賀珎重ゟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意ゟ、隨ゑ御樽肴被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

「寛政五年」二月六日　　松平和泉守乘完判

松平上總介殿

166

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

なを〳〵御表より御禮申上ゟへとも、いかほともよろしく御さたたのミそんしまいらせゟ、めてかしく、

一筆申上まいらせゟ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、恐悦にそんし奉りゟ、然れは同氏豊後守儀、若菜御しうき申上へきむね仰渡され、正月七日初ゑ登　城仕ゟ處、御黒書院にをひて　御目見　仰付られゟ段申越、私にいたり重疊有かたき仕合にそんし奉りゟ、右の御禮申上たくゟ、

若君様へも申上ゟ、御序の折から

御前よろしきやうニ御とりなしたのミ入そんしまいらせゟ、めてたくかしく、

「寛政五年」　常盤井さま

萬里小路さま

野むらさま

みねのさま

瀬川さま　なを申給へ

167

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、如承改年之慶賀珎重ゟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意ゟ、隨ゑ

若君様ゟ御樽肴被獻ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

「寛政五年」二月廿一日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

168

仝上

御札令披見ゟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又爲歳暮之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意ゟ、

紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」二月廿三日　松平和泉守乗完判

松平上總介殿

169

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又

爲歳暮之御祝儀、從

公方様時服并御肴拜領之、難有由得其意ハ、紙面之趣

若君様ニ及言上ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」二月廿三日　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

170

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又

爲歳暮之御祝儀、從

御臺様拜領物有之、難有由得其意ハ、紙面趣各申談及

上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」二月廿三日　松平和泉守乗完判

松平上總介殿

171

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又

爲歳暮之御祝儀、從

御臺様拜領物有之、難有由得其意ハ、紙面之趣

若君様ニ及言上ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」二月廿三日　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

172

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山

御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申

談及　上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」三月七日　戸田采女正氏教判

173

松平上總介殿

全上

御札令披見ゟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、然者

同氏豐後守儀、若菜之御祝儀可申上旨相達、初ゐ正月七

日登　城　御目見被　仰付、難有由得其意ゟ、紙面之趣

各一覽之事ゟ、恐ゝ謹言、

戸田采女正
氏教判

(朱)「寛政五年」三月七日

松平上總介殿

174

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、然者

同氏豐後守儀、若菜之御祝儀可申上旨相達、初ゐ正月七

日登　城

公方様ゟ　御目見被　仰付、難有由得其意ゟ、紙面之趣

令承知ゟ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政五年」三月七日

松平上總介殿

松平伊豆守
信明判

175

重豪公御譜中

今茲寛政五年癸丑三月十一日　大家爲二

竹千代君髪置之儀一、豫受二老中命一、是日使物頭登　レ營

獻二于　家齊公及

竹千代君各一種千匹于　御臺所一種五百匹一、奉レ賀レ之

焉、十三日　竹千代君賜二筐肴一于我一、越夏四月十一日

達二于薩府一、於是呈二飛翰于老中一奉レ謝レ之矣、

176

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申

談及　上聞ゟ、恐ゝ謹言、

戸田采女正
氏教判

(朱)「寛政五年」三月廿五日

松平上總介殿

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

同氏上總介於國元致入湯、痛所快方相成ル付、爲參府當秋致發足、且又去年申上置ル通弟嶋津雄五郎(忠厚)儀ニ其節召列ル樣可致旨申越ル、此段及御屆ル、以上、

(朱)「寛政五年」　四月十八日　　松平豐後守

(朱)「右御日附当日御用番松平伊豆守樣御用人三輪十郎兵衛を以御留守居橋口與三次ニ而被差出ル処、御落手被成候旨、右御用人を以被仰聞ル旨、御留守居首尾申出ル事」

仝上

扣正文在右筆所

同氏上總介參府之御禮申上ル節

御臺樣(御臺樣江)　(朱)「御付紙」若君樣(若君樣江)ニ獻上物爲致度ル、先例無御座ル付、此段相伺ル、被成御差圖可被下ル、以上、

(白かね五まい)

(御太刀一腰　白銀三十枚)

右之通獻上候樣可被致候」

(朱)「寛政五年」　四月十八日　　松平豐後守

(朱)「右御用番伊豆守樣ニ御用人ニ相付、御留守居橋口與三次を以被差出ル処、御請取被成ル旨、御用人を以被仰聞ル旨首尾書ニ相見得ル事」

天明七年未十一月同氏上總介參府之御禮申上ル節、伺之上左之通獻上物仕ル、

公方樣ニ

御太刀　一腰

縮緬　十卷

御馬白銀三十枚一疋

(家治妾、津田氏)蓮光院樣ニ

白銀　五枚

四月

近秘野艸　齊宣公

四月二十三日使本多彈正大弼來賜　公告、恩賚如例、儲君所賜亦如之、二十五日拜辭、賜馬恩諭如例、五月四日發邸、國老菱刈大炊隆邑從、六月二十五日至府城、乃遣川田伊織(國通)往謝恩、十月朔日如揖宿温泉、經過山川・潁娃・知覽・田布施至加世田、十一月謁日新寺、五日觀鄉士踊躍、又歷吉利・永吉、狩于日置郡山、二十二日反自郡山、

180 重豪公御譜中
正文在文庫
若君様ゟ菖蒲御兜一飾、以使者被獻之ゟ、首尾好遂披露ゟ、恐々謹言、
(朱)「寛政五年」四月廿八日　松平伊豆守信明判
松平上總介殿

181 重豪公御譜中
正文在文庫
爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲太田備中守可述ゟ也、
(朱)「寛政五年」五月二日　家斉公墨印
松平上總介殿

182 齊宣公御譜中
寛政五年癸丑齊宣賜レ告、夏五月四日發江府、六月二十五日着麗城、

183 重豪公御譜中
先レ是天明丁未重豪歸國之后、去歳再賜レ告、今秋之二江都一、則又當レ留レ府、於是乎各與二賀儀於藩内貴賤高齡者一、以欲レ使レ祝二其餘年一、豫命二有司一、使レ簡下拔自二大身分一至二無役近習通一七十歳已上、自二小番一至二郷士與力及僧侶社人一八十歳已上、自二足輕一至二農商賤民一九十歳已上之者上、凡男女一千八百五十一人（此内超百歳者六人）、故今茲夏五月十五日、召下奥表諸役人已上超二七十歳一者于二丸書院上、各從二其等一家老出席傳下賀レ壽各與二巻物若干一之旨上、畢於二各席一給二酒肴一焉、而自二小番一至二與力一者用人、自二郷士一至二農商賤民一各令二地頭奉行等一、與二金銀若青蚨一有レ差、婦人則使二人代聞一レ命矣、

184 扣正文在家老座
御吸物御酒
（大身分以上）
（諸御役人）
（朱）「丑五月十一日本文伺之通宜取計旨被仰出候事」
大身分以上之妻女等
紗綾二巻宛
但御吸物御酒之引合候ハ、
真綿三把
（小番）
（新番）
男ハ金子二百疋ツ、
女ハ同百疋ツ、

男女共
金子百疋ツヽ、

男女共
銀三兩宛

諸與
郷士
與力

御小姓組

社家
足輕
町人
百姓
浦濱人

御城下

男女共
青銅百疋宛

眞綿二把
金子二百疋

百歳以上
郷士
女一人

眞綿二端宛
青銅二百疋宛

右同
百姓浦人
男女五人

参上之節
紗綾二卷

甑嶋移地頭
三崎治部

金子百疋ツヽ、

平寺
出家

185

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ㄟ、
公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ㄟ、將又
三月十一日
若君様御髪置御祝儀相濟ㄟ段被承之、目出度被存由得其
意ㄟ、依之被差越使者ㄟ、紙面之趣各申談及　上聞ㄟ、
恐ゝ謹言、
（宋）「寛政五年」五月十六日　太田備中守資愛判
松平上總介殿

186

仝上
御札令披見ㄟ、
公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將亦
三月十一日
若君様御髪置御祝儀相濟ㄟ段被承、目出度被存由得其意
ㄟ、依之被差越使者ㄟ、紙面之趣
若君様ニ及言上ㄟ、恐ゝ謹言、
（宋）「寛政五年」五月十六日　戸田采女正氏教判

187

松平上總介殿

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將亦

三月十三日從

若君様御髪置爲御祝儀、同氏豐後守并其方ニ以

上使拜領物有之、重疊難有由得其意ハ、紙面之趣各申談

及　上聞ハ、恐々謹言、

太田備中守
資愛判

(朱)「寛政五年」五月十六日

松平上總介殿

188

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將亦

三月十三日從

若君様御髪置爲御祝儀、同氏豐後守并其方ニ以

上使拜領物有之、重疊難有由得其意ハ、紙面之趣

若君様ニ及言上ハ、恐々謹言、

戸田采女正
氏教判

(朱)「寛政五年」五月十六日

松平上總介殿

189

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又

三月十一日

若君様御髪置相濟ハ段被承之、目出度被存由、右爲御祝

儀使札被差越ハ旨被申越ハ、紙面之趣承屆ハ、恐々謹言、

松平伊豆守
信明判

(朱)「寛政五年」五月十八日

松平上總介殿

190

全上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又

三月十三日從

若君様御髪置之爲御祝儀、同氏豐後守并其方ニ以

上使拜領物有之、重疊難有由、右爲御禮飛札被差越ハ旨

被申越ハ、紙面之趣承屆ハ、恐々謹言、

「寛政五年」（朱）五月十八日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

191

重豪公御譜中

正文在文庫

若君様御髪置御祝儀ニ付、御拜領物之御禮

若君様御髪置相濟ハ段恐悦之儀

右兩様之儀、御老中方ハ御自分勤之御狀御差出被成ハ處、伊豆守殿より御返札御奉書之文段ニゐ出申ハ段、同役佐野郷藏并御右筆ゑ心付不申、取扱行届不申ハ、此段御内〻ニゐ御取計可被下ハ、以上、

五月廿一日　　前田左兵衛

192

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、德川刑部卿（治国）殿逝去之段被承之、被紹言語由得其意ハ、依之御機嫌被相伺之ハ、被爲替御儀無之ハ間可御心易ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

「寛政五年」（朱）六月朔日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

193

全上

御札令披見ハ、德川刑部卿殿逝去之段被承之、被紹言語由得其意ハ、依之御機嫌被相伺之ハ、被爲替御儀無之ハ間可御心易ハ、紙面之趣

若君様ハ及言上ハ、恐〻謹言、

「寛政五年」（朱）六月朔日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

194

重豪公御譜中

家齊公之女淑姫君、先レ是許二婚于尾張宰相治行卿之男德川五郎太主一、今茲六月三日遣二家臣成瀨隼人正正典一納二聘於　大城一、於レ是明日使三留守居登　レ營獻二一種千匹于家齊公及　儲君竹千代君、一種三百匹　御臺所及　淑姫君一、奉レ賀二結納之儀一焉、

195

全上

正文在文庫

淑姫君様御結納爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ハ、遂披

露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」六月四日　太田備中守資愛判

松平上總介殿

196 重豪公御譜中

同年六月十二日　大家修二惇信廟(徳川家重)三十三回忌法事於増上寺一、越翌日重豪使下高田猛太夫利公(使番今仮以物頭行)献二白銀二枚一拜上焉、

197 齊宣公御譜中

六月値

惇信廟三十三回忌、修法事於南泉院三日、自十日至十二日、

193 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、就酷暑之節

公方様　若君様御機嫌被相伺之ハ、益御安全御儀候之間可御心易ハ、隨而鰹節一箱被獻之ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」六月十五日　松平和泉守乗完判

松平上總介殿

199 仝上

御札令披見ハ、

公方様　若君様益御勇健被成御座、恐悦旨尤ハ、就酷暑之節猶以

若君様御機嫌被相伺之ハ、弥御安全御儀ハ間可御心易ハ、隨而

若君様ハ鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」六月十五日　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

200 白木御文書七番箱中　三十一番

寛政五年丑六月十五日

中根半平(正房)殿息女島津伊賀(久金)殿養女被仰付ハ付諸書付

御記録所

右蓋紙ニアリ

(の1)

武田河内守(信親)殿御支配小普請中根半平殿息女　大奥ニ被召仕置ル處、島津伊賀養女被仰付ル付、去年半平殿ニ及御廣鋪御用人より示談之上承知有之、當　御發駕前右御取結及相濟ル樣ニと之儀ニ付、橋口與三次ニ追々及御掛合、去ル十八日伊賀より茂此御方樣ニ願書差出ル趣之取計ニ付、當日半平殿より別紙通之屆書御支配頭ニ被差出、尤去ル廿一日伊賀ニ願之通被仰付ル筋ニ付、同廿三日半平殿娘被差遣ル段及猶又當日屆書被差出相濟ル旨申出、右付ル茂　大奥御取計之儀ル得茂、伊賀養女名目之事ル得共、以來音信贈答茂無之筋相達置、彼方ニ及最初より其通之心得之由ニ茂ル得共、此節茂表向相祝ル趣ニ付、半平殿ニ一種三百疋伊賀より相送ル筋、御物御取仕立を以往反之上差遣ル方ニ御使番ニ及致吟味、其通被仰付ル旨、谷村孫右衛門より承知仕、右之通致取扱筈御座ル、此段旁御内用を以申越ル條、

中將樣被達　御聽、伊賀ニ右之趣意を以被相達ル儀茂、何分被取計、御記錄奉行ニ及書留被申付置ニ付可有之ル、屆書案文與三次申出ル書付等四通相添差越ル、以上、

四月晦日　　菱刈大炊

島津求馬殿

伊勢播磨殿

市田勘解由殿

名越右膳殿

(の2)

武田河内守殿御支配
小普請　中根半平殿

右息女大奥ニ御奉公相勤被居ル處、島津伊賀殿養女ニ被成ル方御示談及御座ル由ニて、右樣之儀茂御支配頭ニ一通御屆御座ル振合ニ付、息女より及早く御屆等御座ル樣ニとの趣、半平殿ニ掛合及爲有之由、私方迄以手紙被申越ル趣有之、右茂前以右之譯合存不申事故其段申出ル處、大奥ニ付最初右之御取企及有之、伊賀殿ニも去年御在勤之砌、前件之趣茂御達爲被置由を及承知仕ル、乍然半平殿より文通而已ニ付茂以來之儀及有之、一先面談仕ル上返答仕ル方可宜と之吟味ニ付、彼方ニ掛合申ル處、半平殿去十七日此御方ニ御入來有之、私出會仕、右之始末得と承ル處、右茂去年中大奥ニ之御内沙汰ニ付、御廣鋪御用人小嶋甚兵衛を以伊賀殿養女ニ被成度趣示談も有之、半平殿ニ及御承知ニ付、當御發駕前右之御取結及御座ル樣ニとの趣、猶又息女方より内々半平殿ニ被申遣ル事故、此節御支配頭迄御屆ニ及ル段承屆、奉得御差圖ル上、弥

其通御取計御勝手次第被成ゟ様ニとの挨拶仕置ゟ、右ニ付此御方より茂何方ハ及御届等ニ茂不及儀と茂存申ゟ得共、外ニ右様之御振合此節之儀ニ付御聞合も爲有之儀ニ茂無御座ゟ哉と相尋申ゟ處、此御方より茂別段何方ハ及御届ニ茂不及事之由是亦承申ゟ、左ゟ去ル廿三日、御支配頭ハ及右之御届相濟ゟ段及半平殿より私迄文通を以被申聞ゟ付、相應ニ挨拶之返答仕ゟ儀御座ゟ、依之半平殿より御頭ハ之届之書面并別紙三通之文通相添此段申出ゟ、以上、

四月廿四日　　橋口與三次

谷村孫右衞門殿

(の3)

追而前件ニ付而茂、伊賀殿養女分之儀茂　大奥ニ而御取計之事故、名目迄之趣ニゟ得ハ、以來半平殿・伊賀殿御互ニ音信贈答之儀茂決而無之方ニ御心得被成ゟ様ニとの趣を及任御差圖之趣、面談之節都合能申達ゟ處、右養女御取結之趣意茂、半平殿ニ及最初御内談之砌より御承知之儀故、弥其通御同意之段及則答ニ承置申ゟ、乍然表向之儀ニ茂御座ゟ得共、伊賀殿より茂此節茂御祝被成ゟ趣ニ而、輕キ祝物御物御取仕立を以被相贈可然と之御吟味ニ而、右之趣を及不差障様申述、右ニ付而茂、半平殿より茂御挨拶之品物等被相贈ゟニ茂是又決而不被及段も直ニ申述ゟ處、委細承知之段被申聞ゟ、此段も申出ゟ、私娘儀、松平豐後守(島津斉宣)家來嶋津伊賀養女仕度段、豐後守方ハ伊賀方より昨幾日願書差出ゟ旨申聞ゟ、依之御届申上ゟ、以上、

月日　　中根半平

(の4)

先達而御届申上ゟ通、私娘儀松平豐後守家來島津伊賀養女仕度段、豐後守ハ伊賀方より相願ゟ處、當幾日願之通被申付ゟ付、今幾日伊賀方ハ差遣申ゟ、依之御届申上ゟ、以上、

月日　　中根半平

(の5)

以手紙致啓上ゟ、向暑御座ゟ得共、弥御安全被成御勤、珍重奉存ゟ、然茂兼而及御掛合ゟ嶋津伊賀殿ハ拙者娘養女之儀、

太守様御發駕以前願及差出ゟ様ニと御内慮之段、此間娘方より申越ゟ、右ニ付願書振合承合ゟ處、拙者方ゟ茂届ニ而相濟ゟ趣ニ御座ゟ、依之届書別紙兩通懸御目ゟ、此節伊賀殿御詰合も無御座ゟ得とも、御内慮之趣ニ而茂、

伊賀殿方ゟ最早相濟ゟ之事と存ゟ間、　御中陰明早〻拙者方ゟ届差出、引續追届も差出ゟ積御座ゟ間、兼ゐ左様御承知被置可被下ゟ、尤届差出ゟハ〻、猶御左右可申ゟ、右之趣以參可得御意ゟ得共、此節之儀故乍略儀如此御座ゟ、以上、

四月十一日

橋口與三次様　　中根半平

伊藤專太夫様

(の6)

御手紙致拜見ゟ、弥御堅剛被成御勤奉珎重ゟ、然ゟ此間中及御懸合ゟ之趣こゐ、明日拙宅ゟ御出御内談可被下旨、尤當時御壹人役こゐ其節御差支ゟ御座ゟハ〻、桑山甚助殿と申方御越可被成旨、委曲被仰聞候趣致承知ゟ、然處及御聞之通屋敷替被仰付ゟ以後、今以普請等出來不申、其上當時取繕等こ取掛、御對談之席も無之差支申ゟ付、明日拙者罷出御對談申度ゟ間、晝過より罷出例之御席ゟ罷通可申ゟ間、左様御心得可被下ゟ、何ゟ其節緩〻可得御意ゟ條、御報迄早〻如此御座ゟ、以上、

四月十六日

猶以全〻明日晝過ゟ罷出可申ゟ間、左様御心得可被下ゟ、以上、

中根半平

橋口與三次様

(の7)

以手紙致啓上ゟ、向暑御座ゟ得共弥御堅剛被成御勤珎重奉存ゟ、此間ゟ罷出緩〻得御意致大慶ゟ、其節及御掛合ゟ娘養女届之儀、當十八日伊賀殿ゟ願書被差出ゟ故、當日拙者方ゟ相届申ゟ、猶昨廿一日伊賀殿御願之通被仰付ゟ旨、明廿三日娘儀差遣ゟ段、猶又明廿三日届書差出申ゟ、左様御承知可被下ゟ、右之段爲可得御意如是御座ゟ、以上、

四月廿二日　　中根半平

橋口與三次様

(の8)

本文調被仰渡ゟ付、伊賀殿より中根半平殿ゟ一種三百疋御物御取仕立を以被相送方可然と吟味仕申上ゟ處、弥吟味之通被仰付ゟ間、往返之上仕出方取計可仕ゟ、此段申上ゟ、以上、

四月晦日　　御使番

以上一冊トス

201 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山

御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申

談及　上聞ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」六月十九日　松平和泉守乗完判

松平上總介殿

202 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺

御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申

談及　上聞ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」七月二日　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

203 重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段

之御仕合ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」七月六日　太田備中守資愛判

戸田采女正氏教判

松平和泉守乗完判

松平伊豆守信明判

松平越中守定信判

松平上總介殿

204 重豪公御譜中

始祖得佛公自レ受二封于右幕府一、迄レ今傳レ世二十六、歴レ

年六百有餘、祭祀連綿血二食於三州之地一、尚垂二統于無

窮一、蓋又無レ比焉、然治亂緩急異二其勢一、至二中古正統夫

人一者、間亦自有下神主廢或併二失薨日年紀及諡號一者上、豈

不二遺憾一哉、予襲統之後致二力於祭祀一、命二有司一往々使レ

糾二祀典缺漏一、先レ是寺社奉行請下再二興所レ壞之夫人神主一

失二其年月諡號一者從二浮屠法一、加二撰補一、以置二於墳寺一、

家老又下二議于記錄館一使レ言二其宜一、今既雖二退老一齊宣
學二衆議一諮二于我一、於レ茲更加二斟酌一、仍下享保丁未追二號
于淨光明寺五靈夫人一之例上、今茲秋七月置下追二諡于定山(島津師久)
公夫人得祥玄瑞明一房一、神主于隈之城稱名寺、追二諡義(島津久豊)
天公後夫人無染了心大姉一、神主于惠燈院、節山公先夫人
鏡堂妙圓大姉神主于市來龍雲寺、追二諡于同公第三之夫人
芳雲茲光大姉一、神主于同寺、圓室公夫人天眞妙幸大姉(島津忠昌)
(島津忠治)
大姉一、神主于鹿兒島郡吉田津友寺、追二諡于大翁公夫人(島津勝久)
天室眞光大姉一、神主于隆盛院上、而薨日則不レ待二鑿求一、
各使下以二其夫君忌日一從祀上、至レ是祖先之神儀無レ不二盡
備一云矣、

205

全上

正文在文庫

今度
(徳川家重)
惇信院様三十三回御忌御法事御執行付ゐ、以使者御香奠
被獻之ハ、於增上寺奉納之事ハ、右之趣及言上ハ、恐〻
謹言、

(未)
「寛政五年」七月十二日　　太田備中守
資愛判

松平上總介殿

206

重豪公御譜中

儲后竹千代君不豫醫藥無レ驗、遂以二六月二十四日一薨、諡二
孝順院殿一、越七月十四日訃音至二薩府一、於レ是呈二弔書于
老中一候二
大家之起居一、

207

全上

正文在文庫

端午之　御内書可相渡ハ間、明日五半時、
御城ハ可罷出ハ、以上、

(未)
「寛政五年」七月十七日　　太　備中
松平上總介殿
留守居

208

全上

正文在文庫

御札令披見ハ、
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又今度

御男子(敏次郎)様御誕生之段被承之、目出度被存由得其意ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」七月十八日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

209

(朱)「近秘野艸中」

寛政五年癸丑八月二日　公臨演武館觀犬追物、九月朔日發府城、雄五郎(島津忠厚)君從、十月十三日至芝邸、

210

齊宣公御譜中

秋八月十二日、講犬追物於演武館内之場、　父公及齊宣・雄五郎臨觀焉(觀犬追物手組)、

○九月朔日　父公伴弟雄五郎發麗城、冬十月十三日着二江府一、

211

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、五月廿八日德川右衛門督(齊匡)殿亭ニ被爲　成ハ段被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」八月五日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

212

仝上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又今度淑姫君様御結納御祝儀相濟ハ段被承之、目出度被存由得其意ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」八月七日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

213

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

惇信院様三十三回御忌　御法事於增上寺御執行相濟、六月十二日

御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申

談及　上聞ハ、恐〻謹言、

（朱）「寛政五年」八月十一日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

214

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、六月廿日東叡山

御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申

談及　上聞ハ、恐〻謹言、

（朱）「寛政五年」八月十八日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

215

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

若君様御不例御養生不被爲叶被遊　御逝去ハ段被承之、

被絶言語由得其意ハ、依之御機嫌以使者被相伺之ハ、被爲

替御儀無之ハ間可御心易ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、

恐〻謹言、

（朱）「寛政五年」八月廿三日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

216

重豪公御譜中

同年秋九月朔日昧爽伴二季子島津雄五郎一發レ國如二江戸一、

側用人矢野男吏清香（本官寺社奉行知側用人）・愛甲藏記廉盛、側役伊集

院嘉盛兼甫其他諸司從行、經二九州之驛一十三日乘二船於豐

州大里一、十九日上二陸於播州室一、歴二數驛一、二十三日到二

大坂一留二假館一一日、既遡レ流着二伏見一淹留二日、遂歴二美

濃路・東海道之諸驛一、十月十三日着二江府芝邸一、然途中

興レ疾不レ能三自詣二老中邸一、越十九日遣レ使（留守居）候二

大家之起居一、

217

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可

述ハ也、

（朱）「寛政五年」九月七日　　家齊公墨印

松平上總介殿

218 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様御機嫌被相伺之ゟ、益御勇健御儀ゟ間可御心易ゟ、

隨而干鯛一箱被獻之ゟ、各申談遂披露ゟ處一段之御仕合

ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」九月十五日　太田備中守資愛判

松平上總介殿

219 仝御譜中

先是夏五月十四日　家齊公男子誕生（母者押田藤次郎敏勝女、至今歳八月二十八日、御台所養為己子）、稱二敏次郎君一、加納遠江守久周勤二蟇目之役一、加納備中守久敬爲二矢取一、曽我伊賀守助籏奉二篦刀一、既而　儲后竹千代君薨焉、於レ是秋九月十五日　大家立二　敏次郎君一爲二儲后一、重豪朝覲之途在二城州伏見一聞レ之、卽呈二飛朝于老中一（本ノマヽ、（翰カ））奉レ賀レ之、

220 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、尾張宰相殿逝去之段被承之、被絶言語由

得其意ゟ、依之

公方様御機嫌被相伺之ゟ、御安全御儀候之間可御心易ゟ、

紙面之趣各申談及　上聞ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」十月三日　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

221 仝上

扣正文在右筆所

なを〳〵いかほとも御さたたのミそんしまいらせゟ、めてかしく、

一筆申上まいらせゟ、

上々様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、恐悦にそんし奉りゟ、しかれは

（徳川家慶）敏次郎様御事

若君様と稱し奉るへきむね　仰出されゟよし承知仕り、

誠に以てめて度御儀にそんし奉りゟ、御祝儀

御臺様へ申上たくゟ、

淑姫君様へも御序のおりからよろしきやうに御とりなし

たのミ入そんしまいらせゟ、めてたくかしく、

（朱）「寛政五年」

常盤井さま
野むらさま
ミね野さま
せかわさま
〻申給へ

222

齊宣公御譜中

凡祖先年忌祭之法、自二一周忌一至二三十三回忌一爲二近忌一、五十年忌以後爲二遠忌一、從前方レ修二吾　祖宗年忌祭一、其資之出不レ一、或自二官庫一、或由二寺費一（謂由平生所附其寺之資）、今茲寛政五年癸丑冬十月定二其法一如レ左、

（白木六番箱四十八号　御先祖様御遠忌一件）

223

白木御文書六番箱中　四十八号

口裏ニ　久馬殿ゟ被相渡ケ御書付写

御先祖様御遠忌御法事、是迄御物又ハ寺役執行被仰付、不相並御不都合ケ間、以來ハ五廟之内ニ被遊御當ケ御先祖様ハ爲御遠忌共、御物より御法事被仰付、其外御六代以前之　御先祖様ハ、御當地御寺ニ被成御座ケ御方様ニハ表寺役執行被仰付、御六代以前ニハ表格別御功德被爲在ケ御方様ハ、御物又ハ寺役等之儀、其節〻御吟味次第被仰付筈ケ條、此旨寺社奉行ニ申渡、可承向〻ニハ表可申渡ケ、

十月　　久馬（川上久敬）

包紙ニ

御先祖様御遠忌一巻ニ付久馬殿ゟ被仰渡御書付壱通

224

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ケ、
公方様益御機嫌能被成御座、去月八日東叡山
御靈前　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ケ、紙面之趣各申談及　上聞ケ、恐〻謹言、

（宋）「寛政五年」十月五日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

225

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見ケ、
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ケ、然ハ先月十五日若君様御弘之儀被承之、目出度被存由得其意ケ、紙面之

226

趣各申談及　上聞ハ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」十月九日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

仝上

今度

若君様御弘被　仰出ハ爲御祝儀、

公方様　若君様ニ以使者御太刀・御馬代被獻之ハ、遂披

露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」十月九日　　戸田采女正氏教判

松平上總介殿

227

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

なを〳〵いかほともよろしく御さたたのミそんしま

いらせハ、めてかしく、

御意のよしにて御ふミ拜見いたしハ、

上々様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、恐悦にそんし奉

りハ、然れハ私事參府仕りハ付

御臺様より御肴一おりはい領仕り、誠に以て有難き仕合

にそんし奉りハ、此よし何分にもよろしく御とりなした

のミ入そんしまいらせハ、めてたくかしく、

（朱）「寛政五年」　花まちさま

御つほねさま

とみ田さま

富をかさま　御返事

228

重豪公御譜中

冬十月二十八日

大家遣二老中太田備中守資愛於芝邸一勞二問參府一、則自奉二

恩旨一送迎禮畢、會微恙發、於レ是使下島津淡路守忠持之二

老中各邸一拜謝上焉、而以二疾之故一未レ能レ見二

大家一、十一月朔日使三面高善右衛門俊直登レ城、獻二太

刀一腰・縮緬十卷・白銀三十枚于　大樹家齊公、白銀五

枚于　御臺所一、奉レ謝二參府一也矣、

229

寫正文在文庫

松平上總介

参府之段達　上聞　上使被成下ゟ、追ゟ
御目見可被　仰付ゟ、
（朱）「寛政五年」

230
正文在文庫
明朔日五時登
城参府之御禮可被申上ゟ、以上、
（朱）「寛政五年」十月廿九日　安藤對馬守
太田備中守
戸田采女正
松平伊豆守
松平上總介殿

231
寫正文在右筆所
口上の覺
このほとは参勤之御禮御申被成
御臺様へ御もく錄のとをり御上ケ被成、ひろういたしま
いらせゟへハ、めて度御滿足ニ思召、何もよふ申せとの
御事ニおはしましゟ、めてたくかしく、
（朱）「寛政五年」
花町
つほね
とみ田
と（み脱か）岡　本ノマヽ
ゟ
松たいら
上總介さまへ
口上

232
重豪公御譜中
正文在琉球國司
尊書致拜見候、
中將様ゟ爲年首御祝儀、目錄之通被差上之、至御旅中遂
披露ゟ處　御滿足　思召ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、
（朱）「寛政五年」十一月十五日　名越右膳
實名判
市田勘解由
實名判
伊勢播磨
實名判
菱刈大炊
實名判
川上久馬
實名判
三司官

233

仝上

尊書致拜見候、

太守様若菜御禮被遊

御登　城ゟ様被　仰出、當正月七日初ゟ御禮被　仰上ゟ、

爲御祝儀以伊舎堂親方

中將様ゟ御太刀一腰・御馬代黄金十兩并目錄之通被差上

之、至御旅中遂披露ゟ處　御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩

達ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」十一月十五日

名越右膳　實名判

市田勘解由　實名判

伊勢播磨　實名判

菱刈大炊　實名判

川上久馬　實名判

三司官

234

仝上

尊書致拜見候、

中將様御國元温泉ゟ御入湯御暇御願之通被　仰出、被遊

御拜領物ゟ、爲御祝儀以伊舎堂親方御太刀一腰・御馬代

白銀五十兩并目錄之通被差上之、至御旅中遂披露ゟ處

御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政五年」十一月十五日

名越右膳　實名判

市田勘解由　實名判

伊勢播磨　實名判

菱刈大炊　實名判

川上久馬　實名判

三司官

235

仝上

尊書致拜見候、

中將様御國元ゟ之御暇被

仰出ゟ付、御羽織被遊御拜領ゟ、爲御祝儀以伊舎堂親方

目錄之通被差上之、至御旅中遂披露ゟ處

御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政五年」十一月十五日

名越右膳　實名判
市田勘解由　實名判
伊勢播磨　實名判
菱刈大炊　實名判
川上久馬　實名判

三司官

236 重豪公御譜中　斉宣公御譜中ニモアリ

同年自二十一月二十八日一至二十九日一修二寛陽公百年忌法事於福昌寺一、重豪使下家老川上久馬久致獻二香奠金二百匹一拜上焉、

237 近秘野艸　齊興公御伝

寛政五年癸丑十二月六日始畜髪、

238 重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鯣一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」十二月十九日　信成判

(朱)「在口裏」

〃　松平上總介殿　安藤對馬守　信成

239 重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲安藤對馬守可述ハ也、

(朱)「寛政五年」十二月廿七日　家斉公　墨印

松平上總介殿

240 仝上

若君様ニ御破魔弓一飾以使者被獻之ハ、首尾好遂披露候、恐〻謹言、

(朱)「寛政五年」十二月廿八日　戸田采女正　氏教判

松平上總介殿

241 重豪公御譜中
正文在文庫
爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、
(朱)「寛政六年」正月七日　氏教判
〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

242 仝上
爲若菜之御祝儀
若君様ゟ鯛一折被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、
(朱)「寛政六年」正月七日　氏教判
〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

243 近秘野艸　齊宣公
寛政六年甲寅正月二十一日首途府城、二月四日發行、三月二十七日至芝邸、四月領上野鎮火事、

244 重豪公御譜中
正文在文庫
爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、
(朱)「寛政六年」正月廿八日　氏教判
〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

245 仝上
爲年頭之御祝儀、
若君様ゟ以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、
(朱)「寛政六年」正月廿八日　氏教判
〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

246

白木御文書六番箱中　五十一

覺

御刀一腰　青江貞次代金弐拾枚折紙有
長弐尺三寸五部半

一御三所物赤銅七子批把色繪裏哺

一御鎺切羽鵐目金

一御鍔鋏石目耳稻妻彫

一御縁頭鋏檜垣彫御柄頭鵐目金

一御柄鮫白糸巻

一御鞘黒塗

一御下緒

一御小刀　伯耆守藤原信高

一御袋純子

以上

右者寛政四年子十一月十一日
齊宣公御登
城、先達ゐ御上ヶ金御用途ニ被相成候付、從
大樹家齊公被遊御拜領ゟ、右御道具御納戸御讓物之内致
格護、後年紛敷無之様可記置者也、仍如件、

寛政六年寅正月晦日

右膳恒中（名越）

（市田）勘解由盛常
（伊勢）播磨貞矩
（菱刈）大炊隆邑
（川上）久馬久致

御納戸奉行

右上包　書附写トアリ

247

白木御文書六番箱中　五十

覺

御刀一腰　備前国師景代金弐拾枚折紙有
長弐尺三寸

一御三所物赤銅七子根引之松色繪裏哺

一御鎺切羽鵐目金

一御鍔赤銅磨

一御縁赤銅七子

一御柄頭角黒塗

一御柄鮫白糸巻

一御鞘黒塗

一御下緒

一御小刀　寿命

一御袋緞子緒紫糸打

以上

右寛政元酉年

齊宣公御家督初ゟ御國許江之御暇御給、四月廿三日御登城御禮被　仰上候節、從

大樹家齊公被遊御拜領ハ、右御道具御納戸御讓物之内致格護、後年紛敷無之樣可記置者也、仍如件、

寛政六年寅正月晦日

右膳恒中

勘解由盛常

播磨貞矩

大炊隆邑

久馬久致

御納戸奉行

右上包ニ

太守樣御家督初而御国元江之御暇御給、御礼被仰上ハ節、御拜領之御腰物御拵書一通トアリ

248の1

白木御文書六番箱中　五十五

薩州田布施邑金峰山麓有二古城一焉、號曰二龜城一、城内有二小石室一、號二荒神祠一、天和二年壬戌歲邑人篠原佐左衞門政盈所レ建、仍書二其陰一、以爲ク大中公生二於此一、今茲寛政六年歲次二甲寅一正月公命二有司一重二修荒神祠一、繞(メクラスニ)以二石欄一、又以二銀六百四拾五錢(モンメヲ)一付二邑吏一、爲二長生錢一用資二祠事一、因命二臣山本正誼一、書二其事於石一而建二諸傍一、謹按二公室譜諜一

大中公(島津貴久)日新(島津忠良)公之子也、(薩摩守貴久女)母島津氏、以二永正十一年甲戌歲五月五日一生二　公於田布施之龜城一、後人於二其産舍遺址一建二荒神祠一、用禁二弼牧一、卽此地也祠在二子城(ホンマル)西隅一、自レ祠而東南十五六歩有二兩石一、號曰二龜石一、傳是日新公所レ置、自二龜石一而西二歩有二古松一、蓋大中公始生時祝レ壽所レ栽云、竊惟(ニフニ)大中公靖レ難定レ國鬱(トシテ)爲二本藩中興英主一、而此地乃其嶽降處也、不レ可二以弗一レ識也、乃敍二其事一、而繫(御タンシヤウ)ルニ以レ銘、銘曰、維南有レ嶽、寔曰二金峰一、爰降二哲后一、神秀所レ鍾(アツマル)、鎭護是嚴、用存二遺蹤一、不レ騫(カケ)不レ崩、如レ石如レ松、

248の2

(朱)「右ノ添書アリ」

口裏ニ　勘解由殿ゟ被相渡ハ御書付之寫

田布施　御城跡之内ハ
大中公御誕生所當分之小祠を致本、石圍垣取仕立、此節碑銘可相立ハ、
一右同所ハ龜石并
大中公御年競之松有之ハ付、麁抹無之樣致圍垣等可置ハ、　御誕生所荒神祭料年〻及不足之由ニ付、此節銀拾五枚所ハ渡置、郷士年寄支配ニゐ往〻祭料・石碑并圍垣等修覆料ニ可被取計ハ、
右之通被仰付ハ條、田布施地頭ハ申渡、可承向〻ハ及可申渡ハ、
正月　　勘解由

右包紙ニ左ノ如シ

一田布施亀城荒神祠碑銘書壱通
右壱通勘解由殿ゟ為見合被下置ハ旨、木場次右衞門致承知寅二月二日納置ハ事　（朱）「五十五」
一右同断ニ付、勘解由殿ゟ被仰渡ハ横切書付壱通
右壱通寅正月十日市來次郎左衞門ゟ木場次右衞門ニ被相渡ハ事

249

齊宣公御譜中

寛政六年甲寅春二月四日辰刻發ニ麑城一、三月二十七日着江府、四月十三日
幕府遣ニ　上使戸田采女正氏教於吾邸一傳ニ　懇命一、十五日齊宣登　城謁ニ
大樹家齊公一、述ニ參覲之禮一、
家齊公親降ニ　懇命一諸事悉踐ニ先蹤一、

（付札）
白木六番箱五十五号
全五十号
全五十一号
以上此ニ入

250

重豪公御譜中

正文在文庫
歳暮之
御内書可相渡ハ間、明日五半時
御城ハ家來可被差出ハ、以上、
（朱）「寛政六年」二月廿日
安藤（信成）對馬守
松平上總介殿

251

仝御譜中

寛政六年甲寅春二月二十二日
家齊公遣ニ朝比奈彌太郎（秦譜）於芝邸一、賜ニ貴鷹所レ搏之鶴一隻一

會微恙、九鬼長門守隆張代ヶ予奉ニ恩旨一、既詣ニ老中各第一
拜謝焉、

252
重豪公御譜中
正文在文庫
若君様ハ菖蒲御兜一飾以使者被獻之ハ、首尾好遂披露候、
恐々謹言、
(朱)「寛政六年」四月廿八日　信明判
(朱)「在口裏」
松平伊豆守
信明
松平上總介殿

253
重豪公御譜中
正文在文庫
爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲戸田采女正可
述ハ也、
(朱)「寛政六年」五月二日　家斉公墨印
松平上總介殿

254
仝上
爲端午之御祝儀
若君様ハ以使者御帷子單物被獻之ハ、遂披露ハ處一段之
御仕合ハ、恐々謹言、
(朱)「寛政六年」五月二日　戸田采女正
氏教判
松平上總介殿

255
重豪公御譜中
正文在文庫
端午之
御内書可相渡ハ間、明日五半時
御城ハ家來可被差出ハ、以上、
(朱)「寛政六年」六月廿四日　戸田采女正
松平上總介殿

256
仝上
今朝鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐
々謹言、
(朱)「寛政六年」六月廿七日　氏教判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

257

仝上

今朝

若君様ハ鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、

恐〻謹言、

(朱)「寛政六年」六月廿七日　氏教判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

258

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段

之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政六年」七月六日　信成判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」安藤對馬守信成

259

仝上

爲生見玉之御祝儀

若君様ハ黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、

恐〻謹言、

(朱)「寛政六年」七月六日　信成判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」安藤對馬守信成

260

重豪公御譜中

同年八月九日

家齊公遣二曾根内匠(次武)於芝邸一、賜二御鷹之雲雀一、會微恙、

織田筑前守秀綿代奉二恩旨一、又詣二老中第一拜謝焉、

261

齊宣公御譜中

秋九月

幕府若君(德川家慶、敏次郎)行二宮參之儀一、齊宣登レ城謁二

大樹家齊公於御座之間一、蒙二懇詞一賜二酒及吸物一、

○今也内外國用所費夥多、況曩日納貳拾萬金於

幕府、資二

皇城營築一也、財政益窘困、將レ至二乎不一レ能下上修二參覲之禮一、下致中國家之治上、於レ是乎不レ得レ已、今茲寛政六年請二貸財於幕府一、幕府善察二吾之狀況一、特遇許レ之以二金貳萬兩・米壹萬斛一、且緩二之償還期一乃以三十年間一年納二幾分一、

262

重豪公御譜中
正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲太田備中守可述ゟ也、

（宋）「寛政六年」九月七日　家斉公墨印

松平上總介殿

263

全上

爲重陽之御祝儀
若君様ゟ以使者御小袖一重被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

（宋）「寛政六年」九月七日　太田備中守資愛判

松平上總介殿

264

白木御文書六番箱中　四十九号

忠昌公御夫人様
（天友政親女）天眞妙幸大姉
久豐公後之御夫人様
無染了心大姉
立久公先之御夫人様
鏡堂妙圓大姉
立久公御三人目之御夫人様
芳雲慈光大姉
忠治公御夫人様
（伊東尹祐女）玉蓮元香大姉
勝久公御夫人様
（島津忠興女）天室眞光大姉
師久公御夫人様
得祥玄瑞明一房

右　御七靈様御逝去御年月并御法號御知不被遊ゟ付、此節右之通御追號被仰付、夫々　御正統様被遊御座ゟ御寺々ゟ御安置被爲濟ゟ、左ゟゐ御忌日之儀者、御追選ニ不被爲及、　御正統様御祭引次御附祭被遊ゟ旨被　仰出、御銘々御位牌・御厨子・御佛具等都ゐ御安置相濟ゟ間、帳

面可記置ゟ、且
忠隆公御事ゟ、元來
御夫人様不被遊御知ゟ付、此節御位牌御安置ニゟ不被爲
及ゟ、

九月　　（伊勢貞矩）播磨

右包紙ニ
忠昌公御夫人天真妙幸大姉ゟ　師久公御夫人得祥玄瑞明一房
迄御七霊様御法号御追号ニ而、御寺ゟ江御位牌御安置相済ゟ間、
帳面可記置旨被仰渡ゟ御書付壱通　四十九号

265

重豪公御譜中
正文在文庫
若君様
御宮參相濟ゟ付ゐ、爲御祝儀以使者如目錄被獻之ゟ、遂
披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、
（朱）「寛政六年」十月朔日　　資愛判

〆　松平上總介殿　　太田備中守資愛

266

仝上
若君様
御宮參相濟ゟ付ゐ、爲御祝儀
若君様ゟ以使者如目錄被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕
合ゟ、恐ゝ謹言、
（朱）「寛政六年」十月朔日　　氏教判

〆　松平上總介殿　　戸田采女正氏教

267

重豪公御譜中
正文在文庫
なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくか
しく、
御ふみ下されゟ、
上ゝ様益御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成ゟ
よし、扨ハ
若君様御宮參り濟せられゟにつき、　豐後守殿御登
城なされゟ處に、御座之間におゐて
御目見　仰付られ、御懇の
上意あらせれ、（本ママ）（ら脱）其うへ御吸物・御酒御いたゝき被成、御

手まゑ様こも有かたき御事に思召被成ゟよし、右之御禮
御申上被成ゟ、御文の趣よろしく申上ゟへくゟ、
若君様にもよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
(朱)「寛政六年」

常盤井
飛鳥井
野むら
峯　野
せかわ

松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

268

重豪公御譜中
正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
御ふミ下されゟ、
上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成ゟよし、扨は
若君様御宮參濟せられゟ付、　豐後守殿御登　城被成ゟ所、御座之間におゐて　御目見被仰付、御懇之
上意を御蒙り被成、其上御吸物・御酒御頂戴被成、御手

前様こ置、有かたき御事こ思召被成ゟよし、右之御禮
御臺様へ御申上被成ゟ、御文のやうよろしく申上まいらせゟへハ、御滿足こ思召ゟ、
淑姫君様へもよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
(朱)「寛政六年」

常盤井
飛鳥井
野むら
みねの
せかわ

松平
上總介様　御返事
人〻御中

269

重豪公御譜中
正文在文庫

重陽之
御内書可相渡ゟ間、明日五半時
御城にゟ家來可被差出ゟ、以上、
(朱)「寛政六年」十月廿日　太田備中守
松平上總介殿

270

重豪公御譜中

正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

御ふみ下されけ、

上〻様益御機嫌よく成らせられ、御めて度思召被成けよし、さては御同氏豐後守殿拜借之御事御願ひなされけ趣御座け處に、昨日は　召させられ、御米壹萬石・御金貳萬兩拜借被　仰付、御手前様にも有かたき御事に思召被成けよし、右之御禮御申上被成け、御文之趣よろしく申上まいらせけ、

若君様にもよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

（朱）「寛政六年」

常盤井　ゟ
飛鳥井
野　村
峯　野
せかわ

松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

271

（重豪譜ニ正文在文庫トアリ）

なを〳〵何もよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

御ふみくたされけ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成けよし、扨ハ御同うち豐後守殿御拜借の御事御願ひ被成け趣御座け處、昨日　召させられ、御米壹萬石・御金貳萬兩御拜借被仰付、有難御事に思召被成けよし、右之御禮

御臺様へ御申上被成け、御文のやうよろしく申上まいらせけへハ　御滿そくニ思召け、

淑姫君様へもよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

（朱）「寛政六年」

常盤井
飛鳥井
野むら
みねの
せかわ

上總介様　御返事
人〻御中

272

白木御文書六番箱中　五十六番

御記錄奉行に

（重豪男）

爲次郎様御實母、先年有川十右衞門養女被仰付置け付、十右衞門事御母方御祖父之御續ニ候處、此間致死去け、然處

爲次郎様御事、御部屋様御養被　仰出置ゟ付、右御祖父半減之御忌服被遊御受筈ゟ得共、御七歳未満之御事故、御忌服之不被爲及御沙汰ゟ旨申來ゟ、此段承置右之趣帳面可記置ゟ、

閏十一月　　求馬

右上包ニ
(朱)「五十六」

有川十右衛門死去ニ付、爲次郎様御忌服之儀被仰渡ゟ書付一通

右寛政六年寅閏十一月五日求馬殿ゟ得能正助江被成御渡、白木御文書六番箱へ相納置ゟ事

273

白木御文書七番箱中　三十六番

請取申拜借金之事

高貳萬兩之内

金壹萬兩

外

金壹萬兩

是ハ大坂御金藏ゟ請取ゟ積り

右ハ品〻多分之用費相重りゟ處、先頃上納金を及致ゟ以後之儀、其手當可爲難儀旨を以、拜借被　仰付ゟ間、書面之通請取申ゟ、返納之儀ハ、來ル巳年より拾ケ年賦上納可申處、仍如件、

寛政六寅年閏十一月　　松平豐後守　御印

(御金奉行)諏訪市郎左衛門殿
(御金奉行)齋田直四郎殿(光亮)
(御金奉行)谷田久太郎殿(則成)
(御金奉行)堀内小膳殿(貞尚)

右裏カキ
表書之金壹萬兩可被相渡ゟ、斷ハ本文有之ゟ、以上、

(安藤信成)(印)對馬●
就病気無加印(太田資愛)備中
(戸田氏教)采女●
(松平信明)伊豆●

右一通也

274

請取申拜借金之事

高貳萬兩之内

金壹萬兩

外金壹萬兩

是ハ江戸御金藏ゟ請取ゟ積り

右ハ品〻多分之用費相重りゟ處、先頃上納金を及致ゟ以後之儀、其手當可致難儀旨を以、拜借被　仰付ゟ間、書

面之通請取申ハ、返納之儀者、來ル巳年より拾ケ年賦上納可申處、仍如件、

寛政六寅年閏十一月　　松平豐後守　御印

（大坂町奉行）松平石見守（貴強）殿
（大坂町奉行）坂部能登守（広高）殿

右ノ裏カキ
表書之金壹萬兩可被相渡ハ、斷者本文有之ハ、以上、

病気付無加印
對馬（印）●　備中
采女●
伊豆●

275

白木御文書七番箱中　三十六番

請取申拜借米之事

高壹萬石之内

米三千五百石者

右者品々多分之用費相重ハ處、先頃上納金を及致ハ以後之儀、其手當可爲難儀旨を以、拜借被仰付ハ間、書面之通請取申ハ、返納之儀者、來ル巳年より拾ケ年賦上納可申所、仍如件、

寛政六寅年十二月　　松平豐後守　御印

（御蔵奉行）本山彌太郎（正峯）殿
（御蔵奉行）杉嶋彦五郎（清度）殿
（御蔵奉行）鎮目牧太（惟成）殿
（御蔵奉行）杉原四郎兵衛（正利）殿
（御蔵奉行）高橋八郎右衛門（美貫）殿
（御蔵奉行）齋藤定之丞（利常）殿
（御蔵奉行）天野藤内（景福）殿
（御蔵奉行）石渡彦太夫（正利）殿
（御蔵奉行）澤次郎右衛門（幸純）殿

裏カキ左ノ如ノ
表書之米三千五百石可被相渡ハ、斷者本文有之ハ、以上、

病気付無加印
對馬
備中●
采女●
伊豆●

276

重豪公御譜中
正文在文庫

今朝鯣一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々

謹言、

(朱)「寛政六年」十二月三日　　資愛判

〆　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

277

全上

今朝

若君様ゟ鯣一箱被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、

恐々謹言、

(朱)「寛政六年」十二月三日　　資愛判

〆　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

278

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可述ゟ也、

(朱)「寛政六年」十二月廿七日

松平上總介殿

279

全上

爲歳暮之御祝儀、

若君様ゟ以使者御小袖一重被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政六年」十二月廿七日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

280

全上

若君様ゟ御破魔弓一飾以使者被獻之ゟ、首尾好遂披露ゟ、

恐々謹言、

(朱)「寛政六年」十二月廿八日　　資愛判

〆　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

281

白木御文書六番箱　五十七

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、
一可徵納國々年貢事、
右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、
寛政七年正月十一日　齊宣御判
右外包
齊宣公
寛政七年卯二月廿八日久馬殿ゟ平山五郎右衛門江被
御吉書　成御渡、白木御文書六番箱へ相納置ゟ事
(朱)「五十七」

282
重豪公御譜中
正文在文庫
爲年頭之御祝儀、
若君樣ゟ以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之、遂
披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、
(朱)「寛政七年」正月十一日　信成判
(朱)「在口裏」
〆　松平上總介殿　安藤對馬守　信成

283
仝上
なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
御文下されゟ、
上々樣ます〳〵御機嫌よく被爲成、恐悦ニ思召被成由ゟ、
扨ハ　上使をもて御鷹の鶻御同氏豐後守殿ゟ御拜領被成
ゟ御事、有難御事ニ思召被成ゟ由ゟ、右之御禮御申上被
成ゟ御文の趣、よろしく申上まいらせゟ、
若君樣ゟもよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
(朱)「寛政七年」　常盤井
あすか井
松平　野むら
上總介樣　御返事　峯野
人々御中　せかわ

284
仝御譜中
今茲寛政七年乙卯春正月二十三日
家齊公遣二興津内記(忠明)於芝邸一、賜二貴鷹所レ搏之鶴一隻一、齊
宣代レ予奉二恩旨一、既詣二各老第一拜謝焉、

285
重豪公御譜中
寫正文在文庫

なを〳〵いまた餘寒強御さゝへ共、何の御障も御座被成すゝや、何もよふ申せとの御事に御座ゝ、めてたくかしく、

上〻様かた御機嫌よく被爲成御めてたさ、扨は此御石たひ・串海鼠一はこ御あら〳〵敷御事なから、御手前様へ御内〻にて被遣ゝ、何も心得ゝてよろしく申せとの御事に御座ゝ、めてたくかしく、

(朱)「寛政七年」

まつ平
上總介様
人〻御中

花まち
花　園
つほね
とみ田

286

重豪公御譜中
正文在文庫
歳暮之

御内書可相渡ゝ間、明日五半時御城ゝ家來可被差出ゝ、以上、

(朱)「寛政七年」二月廿六日　　松平伊豆守

松平上總介殿

287

仝上

なを〳〵ま事ニ〳〵幾久しく萬〻年もといわゐ〳〵まいらせゝ、めて度かしく、

上〻様かた御機嫌よく被爲成、御めてたさ、こん日ハ御臺様濱御庭へ成らせられ御めて度さ、右ニ付此御肴一桶御庭ニて御とらせあそハし給ゝて御手前様ゝ御内〳〵ニて被遣ゝ、何もよふ申せとの御事ニおはしましゝ、めて度かしく、

(朱)「寛政七年」

松たいら
上總介様
人〻御中

花　町
華　園
つほね
冨　田

288

御系圖中

齊興
女子

操姫　本多下總守康禎夫人

寛政七年乙卯二月二十八日生、母丹羽加賀守長祥妹

実母須山和太夫則勝女、

天保五年甲午四月八日卒、法名蓮臺院殿操譽西眞妙香大姉、

289

近秘野艸　齊宣公御子

女子

操姫　江州膳所城主六万石本多下総守康禎夫人

寛政七年乙卯二月二十八日生於芝邸、母丹羽加賀守長祥妹　実母須山和太夫則勝女、名喜代、文化二年乙丑九月六日夫人養爲己子、六年己巳二月十五日適南八町堀邸、九月二日婚姻年給金三百両為資、天保五年甲午四月八日卒、年四十歳、法名蓮臺院殿操譽西眞妙香大姉、

290

仝上

寫正文在文庫

なを〳〵いかほともよろしく御さたたのミそんしまいらせゟ、めてかしく、

御意のよしにて御ふミ拜見いたしゟ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく御座なされ、今日は

御臺様濱御庭へ成せられめて度そんし奉りゟ、右に付御庭にて御とらせ遊ハされゟ御肴一桶、御内〻にて拜領仕り、ありかたき仕合にそんし奉りゟ、此よし何分にもよろしく御とりなしたのミ入そんしまいらせゟ、めてたくかしく、

(朱)「寛政七年」

花まちさま

はなそのさま

御つほねさま

とみたさま　御返事

291

重豪公御譜中

正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御ふみ下されゟ、

上〻様益御機嫌よく成らせられ、昨日は

御臺様濱御庭に成らせられ御めてたく思召被成ゟよし、

右に付御肴一桶御拜領なされ、豐後守殿ならひに御おくさまへも御拜領被成、誠に以て有難御事に思し召被成ゟよし、右之御禮御申上被成ゟ御文のやう、よろしく申上

まいらせけへハ、御満足ニ思しめしけ、めてたくかしく、

（宋）寛政七年」

花　町
はな園
つほね
とみ田

（宋）「在口裏」
御返事
まつ平
上総介様
人々御中

292

白木御文書七番箱中　三十六番

高壹萬石之内
米六千五百石ゝ
外米三千五百石ゝ去寅年請取申け、
右ゝ品々多分之用費相重け處、先頃上納金を及致け以後之儀、其手當可爲難儀旨を以、拜借被　仰付け間、書面之通請取申け、返納之儀ゝ來ル巳年より拾ケ年賦上納可申所如件、

寛政七卯年三月　　松平豐後守（御印）

本山彌太郎殿
杉嶋彦五郎殿
鎭目牧太殿
杉原四郎兵衛殿

高橋八郎右衛門殿
齋藤定之丞殿
天野藤内殿
石渡彦太夫殿
澤次郎右衛門殿
蜂屋十郎右衛門（正）殿

右裏カキ
表書之米六千五百石可被相渡け、斷ゝ本文有之け、以上、

病気ニ付無加印
對馬
備中●
采女●
伊豆●

293

齊宣公御諭中

寛政七年乙卯鷲側室所レ生ニ於鹿児島一之男憲之助、年甫五歳體愈壯實、於レ是改ニ稱虎壽丸一、佐竹氏養爲レ子、以定ニ世子一、告ニ之於
幕府一、而告レ之以ニ年七歳一、且就用番老中請曰、虎壽丸當レ在ニ江府一而年尚幼不レ能レ堪ニ長途之行一、暫居ニ之

於鹿兒島一、夏四月

幕府許レ之、

○四月齊宣賜告二十七日發江府、六月十五日着二麑城一、

294

齊興公御譜中

寛政七年乙卯夏四月、今茲憲之助生實五歲、改稱二虎壽丸一、父公以定二嫡子一、使二嫡母君佐竹夫人養以爲一レ子、而告二之於幕府一（告於幕府以七歲）、於レ是虎壽丸宜レ居二於江府一、而以二幼年未一レ能レ就二長途一、故呈二書於用番老中一、以請下暫在二鹿兒島一於幕府上、至レ是幕府聽レ之、

295

白木御文書九番中　三十三番

虎壽丸

右包紙ニ御名トアリ

外包紙ニ

虎壽丸様と御名目録壱通トアリ

（朱）「右齊興公寛政七年乙卯四月改称虎寿丸トアリ、御年五歲ノ御時ニ当レリ」

296

重豪公御譜中

正文在文庫

若君様ハ菖蒲御兜一飾以使者被獻之ハ、首尾好遂披露候、恐〻謹言、

（朱）「寛政七年」四月廿八日　資愛判

（朱）「在日裏」

〆　松平上總介殿　太田備中守資愛

297

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲安藤對馬守可述ハ也、

（朱）「寛政七年」五月二日　家齊公墨印

松平上總介殿

298

仝上

爲端午之御祝儀、

若君様ハ以使者御帷子單物被獻之ハ、遂披露ハ處一段之

御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政七年」五月二日　　安藤對馬守信成判

松平上總介殿

299

白木御文書六番箱中　五十八

靈社神文前書之事

一去歳讀谷山王子跡役私ニ被　仰付、誠以外聞實儀難有仕合奉存候事、

一不新儀御座候得共、奉對齊宣様　重豪様、毛頭不挾逆意、專勵忠義可申事、

一對國王、疎略之志有御座間敷候、并國中附嶋々至迄政道正様可申附候、以邪慾國法猥成仕置曽以仕間敷事、

一自然惡逆之者有之、國中一味仕候共至私ニ同意不仕、則可致披露事、

一於私身上被　聞召上儀御座候ハヽ、速被遂御穿鑿明鏡被仰付可被下儀、偏奉願存候、少ゟ相掠申儀殘念奉存候故申上置候事、

右條々偽於申上ハヽ、

神文略ス　　浦添王子

寛政七年乙卯五月四日　　朝央判

上包ニ

寛政七年卯六月廿六日播磨殿ゟ御渡被成、御文書白木六番箱納置ハ也、東郷次郎太郎存ス

300

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政七年」六月六日　　信成判

(朱)「在口裏」

松平上總介殿　　安藤對馬守信成

301

仝上

今朝

若君様ニ鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(朱)「寛政七年」六月六日　　信成判

〆　松平上總介殿　（朱）「在口裏」　安藤對馬守信成

302

重豪公御譜中

正文在文庫

端午之

御内書可相渡ハ間、明日五半時

御城ニ家來可被差出ハ、以上、

（朱）「寛政七年」六月廿四日　安藤對馬守

松平上總介殿

303

大信公御子御八男

乘之助

寛政七年乙卯六月二十九日生於江府、母浪人杉浦作左衞

門政信女、

九年丁巳三月七日夭亡（以五日為忌日）、法號天苗院殿玉質潤光大禪

童子、墓建惠燈院及江府大圓寺、

304

近秘野艸　重豪公御子

乘之助

寛政七年乙卯六月二十九日生于芝邸、母杉浦作兵衞政

信女（名於曾美爲年寄上席、文化十一年申戌五月廿日卒、法名柏寿院殿貞節如純大姉、令用殿字）九年丁巳三月七

日（文政四年有命以五日為諱辰）夭亡、法名天苗院殿玉質潤光大禪童子（安主于惠燈院）、

305

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露ハ處一段

之御仕合ハ、恐〻謹言、

（朱）「寛政七年」七月六日　信明判

〆　松平上總介殿　（朱）「在口裏」　松平伊豆守信明

306

仝上

爲生見玉之御祝儀、

若君樣ニ黄金十兩被獻ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、

恐〻謹言、

（朱）「寛政七年」七月六日　信明判

307

重豪公御譜中

同年七月十三日官傳二令于侯伯一曰、今歳不レ賜二御鷹之雲雀一以三大家居二徳川重好卿水清之喪一也、

（朱）「在口裏」

松平伊豆守信明

〆松平上總介殿

308

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲戸田采女正可述ゟ也、

（朱）「寛政七年」九月七日

家斉公墨印

松平上總介殿

309

仝上

爲重陽之御祝儀、

若君様ゟ以使者御小袖一重被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

（朱）「寛政七年」九月七日

戸田采女正氏教判

松平上總介殿

310

重豪公御譜中

正文在文庫

なを〳〵なにもよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御ふミ下されゟ、

上ゝ様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召なされゟよし、扨は今度御同氏豐後守殿御歸國御禮御けん上物之内、よろしからぬ品是あり、豐後守殿御國もとゟ御差扣御伺ひ被成ゟ所、その儀ニ及さるむね仰渡されゟ御事、有かたき御事ニ思召なされゟよし、右之御禮御申あけなされゟ、御ふミのおもむきよろしく申上ゟへくゟ、

若君様へも御申あけ被成ゟ通、よろしく申あけまいらせゟ、めてたくかしく、

（朱）「寛政七年」

ときわゐゟ

311

松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

あすか井
野むら
峯の
瀬かわ

全上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゞ、めてたくかしく、

御文下されゞ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成ゞよし、扨ハ今度御同氏豐後守殿御歸國御禮御けん上物の内、宜しからぬ御品是あり、豐後守殿御國元より御差扣御伺ひ被成ゞ處、其儀ニ及せられすゞ御事仰出されゞ御事、御手前様ニ置、有かたき御事に思召被成ゞよし、右之御禮

御臺様へ御申上被成ゞ御文の様、よろしくひろう致まいらせゞへハ、御滿足ニ思召ゞ、

淑姫君様へもよろしく申上まいらせゞ、めてたくかしく、

(朱)「寛政七年」

右

312

重豪公御譜中
正文在文庫

重陽之

御内書可相渡ゞ間、明日五半時

御城ニ家來可被差出ゞ、以上、

(朱)「寛政七年」十月廿日　戸田采女正

松平上總介殿

松平
上總介様　御返事
人〻御中

常盤井
飛鳥井
野むら
みねの
せかわ

313

重豪公御譜中
寫正文在琉球國司

尊書致拜見候、

中將様ニ爲年首御祝儀、目錄之通被差上之、至江府遂披露ゞ處、御滿足思召ゞ、此旨可有洩達ゞ、恐〻謹言、

「寛政七年」(朱)十月廿七日

山田伯耆　實名判(有儀)

名越右膳　實名判(恒中)

二階堂河内　實名判(行習)

市田勘解由　實名判(盛常)

伊勢播磨　實名判(貞旭)

嶋津求馬　實名判(久昶)

川上久馬　實名判(久敬)

浦添王子

三司官

（表紙）

重豪公　自寛政七年十一月
齊宣公　至同九年十二月

追錄　舊記雜錄　卷百四十四

314

重豪公御譜中

同年冬十一月二日使二物頭登一レ營、獻二于家齊公及敏次郎君（家慶）各一種千匹、于御臺所一種五百匹一、奉レ賀二儲后敏次郎君髮置一、越翌日敏次郎君遣二奏者番有馬左兵衛佐譽純於芝邸一、賜二于肴一筐于我一、會微恙、久留島出雲守通同代奉二恩旨一、又詣二各老第一拜謝、

315

仝上

正文在文庫

若君様御髮置爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

（朱）「寛政七年」十一月二日　信明判

〃　松平上總介殿　（朱）「在口裏」松平伊豆守信明

316

仝上

御髮置爲御祝儀、

若君様ハ以使者如目錄被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

（朱）「寛政七年」十一月二日　信明判

〃　松平上總介殿　（朱）「在口裏」松平伊豆守信明

317

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせハ、めて度かしく、

御ふミ下されハ、

上〻様益御機嫌よく被爲成、御めてたく思召し被成ゟよし、扨は昨日
若君様御髪置相濟ゟ御事御承知被成、御めて度御事ニおほしめし被成ゟよし、右之御祝義
御臺様へ御申上被成との御事、よろしく申上まいらせゟへハ御まんそくニ思しめしゟ、
淑姫君様(家斉女)へもよろしく申あけまいらせゟ、めて度かしく、

(朱)「寛政七年」

常盤井 ゟ
飛鳥井
野むら
みねの
瀬川

(朱)「右口裏」

松たいら
上總介様 御返事
人〻御中

318

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御ふミ下されゟ、
上〻様ます〳〵御機嫌よく被爲成、御めてたく思召被成ゟよし、さやうニ御座ゟ得ハ　御髪置御祝儀として
若君様より　上使を以御同氏豐後守殿へ拜領物　仰付られゟ御事、御手まゑ様ニおいて有かたく思しめし被成ゟよし、右之御禮御申あけ被成ゟ由、御文の趣よろしく申上ゟへくゟ、
若君様へも御禮御申上被成ゟとをり、よろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

(朱)「寛政七年」

常盤井 ゟ
飛鳥井
野むら
峯の
瀬川

まつ平
上總介様 御返事
人〻御中

319

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めて度かしく、

御ふミ下されゟ、
上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めて度思しめしなされゟよし、さては　御髪置御祝義として
若君様より　上使を以御同氏豐後守殿へ御拜領もの被

仰付ゟ御事、有かたき御事ニ思しめし被成ゟよし、右之御禮

御臺様へ御申上被成、

淑姫君様へも御申上被成ゟ、御文のやうよろしく申上まいらせゟ得者、御滿足ニおほしめしゟ、めて度かしく、

(朱)「寛政七年」

(朱)「在口裏」

松たいら
上總介様　御返事
人々御中

ときわ井
あすか井
野むら
みねの
せかわ

320

齊宣公御譜中

七年乙卯冬十一月六日、(島津齊興)虎壽丸初謁二福箇迫諏訪神社一、

○齊宣當家所傳犬追物藝之外、別學二小笠原流騎射打毬等法於小笠原平兵衛一、屢講二之於麗府城南中村別莊騎射場一、今茲寛政七年乙卯冬十二月一族島津出雲久良請下傳二受之法一於余上、々乃授焉、

有島津久明家騎射卷一冊

321

齊興公御譜中

七年十一月六日、虎壽丸初詣産神福箇迫諏訪神社、父公見レ賜二黒熊鎗一對・手鑓一本・長刀一本一、

322

重豪公御譜中

正文在文庫

御馬一疋被獻之ゟ、遂披露ゟ處御喜色之御事ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政七年」十二月十三日　信明判

(朱)「在口裏」

松平上總介殿　松平伊豆守
信明

323

仝上

扣正文在右筆所

御馬一疋獻上仕ゟ處、首尾能被遂御披露候之旨被仰下、忝次第奉存ゟ、恐惶、

(朱)「寛政七年」十二月十三日　松平上總介
重豪御判

松平伊豆守様
人々御中

（宋）「右者寛政二年五月四日、不時御献上有之ゟ節者、翌日御留守居御呼出ニ而相納ゟ段被仰達ゟ迄ニ而、御奉書沙汰ニ不及ゟ処、此節者十二月十三日御献上有之、御奉書相渡ゟ付、即日御奉書御受被差出ゟ」

324

重豪公御譜中

同年十二月十五日

大家爲二御臺所茂姫君一着帶賀儀一、則遣二物頭于老中第一奉レ賀レ之、越翌日獻二一種五百匹于

家齊公、一種三百匹于

儲后敏次郎君、一種五百匹于

御臺所一、又以二女使一獻二縮緬十卷・鯛一折于

御臺所一、

御臺所亦賜二縮緬十卷・鯛一折于我一、

325

仝上

正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めて度かしく、

御ふミ下されゟ、

上〻様かた御機嫌よく被爲成、御めて度思しめし被成ゟよし、扨ハきのふハ

御臺様御着帶御祝儀ニ付て、御もくろくの通り御拜領被成、御同氏豐後守殿并ニ奥方さまへも御はい領物　仰付られゟ、ま事ニもて有かたき御事ニ思しめし被成ゟよし、

右之御禮御申上被成ゟ、御文のやうよろしく申上まいらせゟ得者、御滿足ニおほしめしゟ、めて度かしく、

（宋）「寛政七年」

花町　ゟ

松たいら　御返事　華その

上總介様　つほね

人〻御中　富田

326

仝上

なを〳〵何もよろしく申あけまいらせゟ、めて度かしく、

御ふミ下されゟ、

御臺様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めて度思しめし被成ゟよし、扨は此たひ御着帶御祝義ニ付て、縮めん十卷・たい一折御上ケ被成、御同氏豐後守殿ゟも御上ケ被成、よろしくひろう致まいらせゟへハ、御滿足ニ思し

めしけ、めて度かしく、

（宋）「寛政七年」

松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

花町
華園
つほね
富田

327

全上

御臺様御着帶爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之け、遂披露け處一段之御仕合け、恐〻謹言、

（宋）「寛政七年」十二月十六日　信成判

〆　松平上總介殿　（宋）「在口裏」　安藤對馬守信成

328

全上

御臺様御着帶爲御祝儀、

若君様ゟ以使者目錄之通被獻之け、遂披露け處一段之御仕合け、恐〻謹言、

（宋）「寛政七年」十二月十六日　信成判

〆　松平上總介殿　（宋）「在口裏」　安藤對馬守信成

329

全上

なを〳〵何もよろしく申上けへくけ、めてたくかしく、

御文下されけ、

上〻様益御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成由、

さやうニ御座けへハ、昨日は

御臺様御着帶御祝儀御申上被成けニ付、小野嶋御差上被成け處、

公方様　若君様より紗綾二巻宛小野嶋へ拜領被仰付け御事、誠ニ以て有かたうめうかの至りニ思召被成けよし、

右之御禮御申上被成け、御文の趣よろしく申上けへくけ、

若君様へも同し御事ニ御申上被成けとをり、よろ敷申上まいらせけ、めてたくかしく、

（宋）「寛政七年」

松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

常盤井
あすか井
野むら

330

ミね野　せかわ
せ　川

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

御ふミくたされけ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成けよし、さてはさく日ハ

御着帯御祝義御申上被成けニ付、小の嶋御さし上なされけ所、

御臺様よりさあや二まき、をの嶋へ拜領　仰付られ、誠ニ以てあり難御事に思召被成けよし、右之御禮

御臺様へ御申上被成け、御文の様よろしく申上まいらせけへハ、御滿足ニ思しめしけ、めて度かしく、

（朱）「寛政七年」

松平
上總介様　御返事
人〻御中

常盤井
飛鳥井
野むら
みねの

331

重豪公御譜中

寫正文在家老座

中將様御事、來二月朔日高輪御下屋鋪ニ

（朱）「本文被申越趣致承知、達　書聞候、被遊御引移候ニ付而者、先以恐悦奉存候、御祝詞等之儀者表向及御問合候節申上候様可仕候、且御用向之御一件を別段御請申上候、此旨及御返答候、以上」

時之丞様　爲次郎様　乘之助様御同道御引移被遊け段被　仰出け、右ニ付御屆書之儀ハ、爰元調ニ被差出其上ニハ其元ニ申上け様被仰付け、

（斉宣男）

雄五郎様御事、當分之通被成御座、東御殿之儀ハ、都ゐ御引取、御膳所向ハ大奥御膳所ニゐ被爲濟け御内定ニ御座け、

一御部屋様御事ハ先當分之通被成御座、大奥向御造次等被爲在け上、追ゐ御引移ハ御内定御座け、

一御引移ニ付ゐハ、表御用輕キ儀ハ勿論、　公邊御勤向迄ハ當月限被　聞召上、其後ハ何篇不及奉伺、　御留守年之通拙者共取計仕け様、　御隱居御方之儀ハ公邊御勤向其外重立け御用迄奉伺け様被　仰付け、

右之通愛甲藏記を以承知仕け、御例ハ無之儀ニゐ、何篇折角御吟味之事御座け、尤表ニ相掛け儀ハ、取しらへ申付置け間、追〻御治定被爲在け上、委曲可

332

申越ハ、先此段頭迄御内用を以申越ハ條、被達　貴聞
若殿様　御内證様ハ及被申上ハ儀者可被申上ハ、左
ハ而、御用筋當月限被　聞召上ハ儀者、可承御役〻
ハ申聞置ハ間、於其元及其通被取計ニ而可有之ハ、
以上、

但藏記より及右之趣申越ハ段申出ハ、

(朱)「寛政七年」十二月廿日　(朱)「上」菱刈大炊(隆邑)

(朱)「正月十七日」
川上久馬(久致)殿
嶋津求馬(久昶)殿
伊勢播磨(貞矩)殿
(朱)「下」市田勘解由(盛常)殿
二階堂河内(行智)殿
名越右膳(恒中)殿
山田伯耆(有儀)殿

333

重豪公御譜中
正文在文庫

今朝鯣一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻
謹言、

(朱)「寛政七年」十二月廿五日　氏教判

(朱)「在口裏」戸田采女正氏教
松平上總介殿

334

仝上
今朝
若君様ハ鯣一箱被獻ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐
〻謹言、

(朱)「寛政七年」十二月廿五日　氏教判

(朱)「在口裏」戸田采女正氏教
松平上總介殿

335

重豪公御譜中
正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可
述ハ也、

(朱)「寛政七年」十二月廿七日　家斉公墨印

松平上總介殿

336

仝上

爲歳暮之御祝儀、

若君様ゟ以使者御小袖一重被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政七年」十二月廿七日　　松平伊豆守信明判

松平上總介殿

337

仝上

若君様ゟ御破魔弓一飾以使者被獻之ゟ、首尾好遂披露候、恐々謹言、

(朱)「寛政七年」十二月廿八日　　氏教判

〃　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」戸田采女正氏教

338

重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政八年」正月七日　　資愛判

〃　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

339

(重豪譜ニ正文在文庫トアリ)

爲若菜之御祝儀、

若君様ゟ鯛一折被獻ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政八年」正月七日　　資愛判

〃　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

340

白木御文書六番箱中　六十一

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

寛政八年正月十一日　　齊宣御判

右上包吉書トアリ

外包ニ

寛政八年辰正月十一日御吉書壱通

(朱)「六十二」 右寛政八年辰正月十二日伯耆殿より木場次右衛門へ被成御渡、白木御文書六番箱へ相納置ル事

341 重豪公御譜中
正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ル、遂披露ル處一段之御仕合ル、恐々謹言、

(朱)「寛政八年」正月十一日　資愛判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

342 仝上

爲年頭之御祝儀、
若君様ニ以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ル、
遂披露ル處一段之御仕合ル、恐々謹言、

(朱)「寛政八年」正月十一日　資愛判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

343 重豪公御譜中
正文在文庫

御臺所着帶、依之被伸賀辭之芳牒丁寧之至令滿足ル、愈平安珎重、此邊無吳ル、尚期後喜ル也、

(朱)「寛政八年」正月十八日　(近衛經熙)(花押)No.2

松平上總介とのへ

344 齊宣公御譜中

寛政八年丙辰春正月、初虎壽丸母八百(ヤホ)以三佐野氐一仕二於吾一、而頃日有下以二鈴木氐一訴之者上、因處レ之如レ左、

白木六番箱六十三号
於八百事件四通

345 白木御文書六番箱中　六十三

(の1)

口裏ニ寫

御家老中ニ

浪人
鈴木清七
同人　妻
同人娘りん

右者お八百事、御書院與同心佐野善次郎實子之筋ニ

御奉公相願ハニ付、被召抱置ハ處、以後養實之處入與之儀有之、及糺方ハ上甚五郎と申者之娘之儀相知ハ、五歳之折父甚五郎相果、母ゟ其後甚五郎弟鈴木清七ハ致再縁、お八百事孤ニ相成ハ、清七儀ゟ叔父ニゐハ處、お八百實母前文通相嫁、娘壹人出生、則右當りんニゐハ、お八百爲ニゟ吳父兄弟之續ニハ、

一清七妻ゟお八百實母ニゟハ得共、右通甚五郎相果ハ以後清七ハ再縁之儀ハ間、家本ニゐゟ無之ハ、以來お八百家本抔と無取違樣堅可相心得ハ、

一前件之通最初不束之筋を以御奉公罷出ハ得共、實ニ由緒有之、段々相歎奉願趣有之、御憐愍を以實母并清七ハ一世之御宛行被下置ハ、然共清七身分格式等ゟ不被仰付、尤此後何程無據趣共有之候迚ゟ不被召出、只今之形ニゐ夫婦共一世御養計被下置ハ、娘りん儀ゟ此涯誰そ養女ニ取計、相應之縁與可爲致、左ハゐ清七儀已後子共有之ハ共、不依男女都ゐ養子ニ取計可申ハ、

右次第之儀、往年ニ至等閑ニ不相成樣、子共等養子ニ遣ハ儀ゟ尚以屹可申談置旨被　仰出候、

御取次　佐次右衛門（岩下方恭）

十二月

（の2）

口裏ニ寫

お八百由緒之一件付、御別紙之通被　仰出ハ、清七身分、已來お八百家本ニ御取立可被仰付筋之者ニ無之儀ゟ明白ニハ、依之何方より何樣無餘儀趣共申立候共、取揚ハ儀ゟ勿論、縱令若殿（斉興）樣御成長之後、萬一被爲及　御沙汰等ハ御事ハとも、是又右之趣を以申上、此節被　仰出ハ御趣意相違無之樣可仕ハ、右通之儀故

其外樣方より御沙汰被爲在候共、尚以其通相心得可申儀ニハ、

一御記錄奉行ハゟ　仰出之趣ニ添書を以申渡置ハ、

一由緒等別册詳ハ、

右之通同席中後年無間違樣可次送置旨、尚又　御沙汰之趣承知仕、如是ハ條可被奉得其意ハ、以上、

寛政八辰

正月

久馬
求馬
播磨
勘解由
河内

右膳
伯耆

(の3)

口裏ニアリ　お八百續書

一父　浪人　亡　甚五郎
右家跡無之、
一母　鈴木清七妻
但甚五郎死後再縁、
一叔父　浪人
一妹　異父之　同人　鈴木清七　娘りん
右之通候事、

(の4)

外ニ又添書左之通

御記錄奉行ゟ
お八百由緒之一件ニ付、後年取違無之樣御別紙之通被仰出、御家老中添書等別紙并別册之通ゟ條、右之　御趣意承知仕帳面可記置ゟ、
寛政八年辰　二月　勘解由

(の5)

右四通ニ相添候一册アリ

蓋紙ニ
鈴木清七一件書抜
寛政四年子十一月

麻布山谷町家主吉兵衛店ニ罷在ゟ
浪人　鈴木清七妻
ぎん

右之者、去月廿日私方へ罷越、願之筋有之ゟ間面會仕度旨申込ゟニ付、呼入出會仕ゟ處、右きん申立ゟ者、此御方樣御奥へ當分被召仕ゟ嘉代儀者、きん實娘ニゐ御座ゟ處、去ル年七月中嘉代御屋敷へ被召出ゟ節、御書院組同心佐野善次郎方を當宿ニ相頼、御奉公差出置ゟ處、其後嘉代方ゟ一向便ゑ無之ゟ間、度々善次郎掛合仕ゟ得共、彼是と表裏成儀計申聞、嘉代安否之程ゑ相知不申甚心勞仕ゟ、脇方ゟ薄々承申ゟ得者、嘉代儀ハ、當分結構被召仕　御出生樣ニゐゑ被爲　在ゟ樣承知仕ゟ、弥右樣之御事ニゑ御座ゟ哉、旁奉伺度不得止事御屋鋪ゟ御願申上ゟ、何卒嘉代へ面談被仰付被下度旨申述、別紙願書并善次郎方より取置ゟ書付寫相添差出申ゟ間、左樣成儀一方迄承ゟゐ者何共難相分ゟ間、善次郎方へ承糺、其上嘉代儀も得と承ゟゐ、追ゐ可及

挨拶旨卽答申聞、願書ゟ請取置爲申儀ニ御座ハ、右嘉代儀ニ付ゐゟ、去ゝ年御屋敷へ被召抱ハ初發、身姓等之儀承合ハ様被仰渡、同役上田作右衞門承知仕、手寄を以段ゝ承合ハ得共、素姓相知不申、近邊ニゐ承ハ得ゟ、善次郎實娘ニゐゟ有之間敷、多分貰娘ニゐ可有之哉と申聞ハ者も有之ハ間、實父母之儀、其砌種ゝ手を盡相糺ハ得共一向相知不申ハ、尤彼方より差出ハ親類書ニゟ、善次郎實娘之筋相見得ハ付、無據善次郎方へ直ニ御留守居組小頭差遣承糺ハ處、善次郎申聞ハゟ、親類書ニゟ實娘ニ書上ハ得共、内實ゟ善次郎弟養伯と申者之娘ニゐ、善次郎實姪ニ御座ハ處、養伯儀ゟ嘉代幼年之時分相果ハニ付、其節ゐ善次郎方へ引取致介抱、養女ニ仕ハ旨申聞ハ、乍然善次郎一己之口振迄ニゐゟ、實否之所疑敷御座ハ得共、外ニ存ハ者一切無之ハ付、其趣を以作右衞門より申上置ハ處、猶又去夏中嘉代實父母等之儀、得と承合申上ハ様私へ被仰渡、手寄相求精ゝ承ハ得共、兎角手寄ニゐゟ存ハ者無之、無餘儀又ゝ善次郎へ掛合、屹度有躰之所申聞ハ様相達ハ處、何れニゐ善次郎姪ニゐ養女仕ハ儀相違無之旨申立ハニ付、其旨爲申上置儀御座ハ、然處此節清七妻より別紙之通願申出ハ付、善次郎則召呼先達ゐより追ゝ承屆ハ處、實姪ニ相違無之旨承ハ付、其段申上置ハ所、右通願書等差出ハ者有之ハゟ、如何之儀ニハ哉之旨相尋ハ處、最初申聞ハゟ、嘉代幼年之節、右清七方へ二三ケ年程ゐ乳付子ニ遣置ハニ付、右所縁を以、自分娘之筋ニ取拵願出ハニゐ可有御座、右ぎん甚不埒之致方ニハ段、善次郎申分ケハ付、左ハハ、右躰之儀、此方ゟ不申出ハ様取計可申旨相達置申ハ處、其後取扱方片付不申、ぎん事ゟ度ゝ私方へ罷越、願之催促仕、雙方申口揃不申ハ間、善次郎再往召呼、右一件不束之取計置ハゐゟ御名ゐ出ハ事ハ間、此儀ゟ何れニも明白之所不承ハゐゟ不相濟ハ段嚴敷申達ハ處、善次郎必至と致迷惑、今更申替ハ儀、何共恐入奉存ハ得共、嘉代儀、内實ゟ清七娘相違無之ハ、尤嘉代實父之儀ゟ、善次郎ニゐ存不申、當清七儀ゟ、入夫ニ參ハ者ニゐ、嘉代ニゟ繼父ニ御座ハ處、極ゝ不勝手者ニゐ嘉代致介抱居、奉公先キ有之ハゐも差出ハ取仕立相成不申、難儀仕居ハ處、三四年已前善次郎方家内ゟ罷居ハ娘、諸御屋鋪方へ目見ニ罷出ハ節、嘉代へ與風知人ニ相成、夫より善次郎方へ、嘉代折ゝ罷越心易相成、家内難澁之様子等をも致

咄合ゟ由、其砌清七より善次郎へ相頼ゟハ、、嘉代奉公先等有之ゟ未、宜致世話呉ゟ様申ゟ付、其後何角致心添、嘉代

御屋鋪へ被召出ゟ付ゐ及、着類其外都ゐ善次郎引受世話仕置ゟ、右譯合故親分ニ相成、親類書ニ及善次郎娘之筋書上仕ゟ處、唯今ニ至り、實母ゟ表向申上ゟ儀、甚當惑仕恐至極奉存ゟ段善次郎申出ゟ、右次第ニ御座ゟへハ、清七妻願之筋御取揚無御座ゟゐ未承引も仕間敷、今通ニゐ未自然

公訴等仕ゟ時宜ニも相成可申哉、何分御吟味次第御取計方被仰付度儀ニ奉存ゟ、別紙願書共二通相添此段申上ゟ、已上、

十一月廿六日　　桑山甚助

橋口與三次殿

(の6)

乍恐以書附奉願上ゟ

一麻布山谷町吉兵衛店當時浪人鈴木清七願ニ付、同人妻ぎん奉申上ゟ、私實之娘かよと申當子二十二才ニ罷成ゟ女子御座ゟ付、御書院御番頭長谷川丹後守(勝寛)様御組中佐野善次郎殿を當宿ニ相頼、尤同人方ゟ書付申請右かよ儀、去戌七月中當

御屋鋪様御奥ゟ御奉公ニ差上申ゟ處、其後右嘉代方ゟ何之便及無御座ゟ付、右善次郎殿へ數度參上仕、娘かよ儀未如何様成御奉公相勤罷在ゟ哉承知仕度相尋ゟ得共、表裏成挨拶計仕ゟゐ、譯合一切相分り不申ゟ付、右善次郎殿へ改ゐ私相頼ゟ未、かよ方より久敷便等も無之ゟ得未、何共難心得存ゟ間、貴殿御取次を以かよ御支配之御役人中様迄召連呉ゟ未右御役人中様へ御頼申上、かよ安否之程承知仕度と又ゟ相頼ゟへ共、彼是申取次呉不申、依之奉恐入ゟ得共、無是非當

御屋鋪様ゟ直御訴詔奉申上ゟ、娘かよゟ面會仕度存ゟ間、面談被仰付被下置ゟ様奉願ゟ、何卒御慈悲を以願之通被爲仰付被下置ゟ未、難有仕合奉存ゟ、已上、

麻布山谷町吉兵衛店当時浪人
鈴木清七願付代
同人妻
願人　ぎん

寛政四壬子年十月廿日　家主吉兵衛印

松平豐後守様
御役人御衆中様

(の7)

張紙(朱)

「本文岩下佐次右衛門御取次ニ而差出ル」

右ハ大奥女中嘉代儀ニ付、麻布山谷町ニ罷居ル浪人鈴木清七妻より願書差出ル付、御留守居付役桑山甚助ヵ右之通申出ル趣承届申ル、右ニ付ゐハ御取計方之儀得と吟味仕可申上ル得共、先右願書差上此段申上ル、以上、

十一月廿六日　　橋口與三次

右張紙也

(の8)

又左ノ通張紙

一札之事

一貴殿娘かよ儀、拙者姪分ニいたし、去戌七月松平豐後守殿ニ奉公差出申所實正也、然上ハ御縁有之結構被召遣御手當等被下ル歟、又ハ御合力等有之ル ハ、、其時ハ不依何事貴殿ニ申談、拙者一存ニゐ取計申間敷ル、萬一麁略ケ間敷儀も有之ル ハ、、其時如何様ニ茂可被申立ル、爲後日仍如件、

寛政三年亥十一月　　佐野善次郎印

清七殿

右張紙也

(の9)

寛政五年丑正月廿三日

御書院組同心佐野善次郎養女嘉代儀ニ付、去年十月中麻布山谷町吉兵衛店へ罷在ル浪人鈴木清七妻ぎんヵ願書差出ル儀ニ付、別紙數通相添去冬委細申上置ル處、其後ぎん事度〻私方へ罷越、嘉代へ對面之儀頻ニ相頼、右付ゐハ善次郎不埒之致方仕ル所、甚殘念ニ御座ル段申述、兎角於　御屋敷願筋御取揚も不被成下ル ハ、無是非　公訴ニ茂可仕旨申出ル付、私より彼是申宥メ置、其段申上ル處、右通申立ル上ハ、何れ御取揚之方不被仰付ルゐハ承引も仕間敷、自然出訴等仕ル時宜ニも相成ルゐハ、御外聞ニも相掛可申、尤清七夫婦之者共嘉代内〻之様子も大底承傳ル上、右通願出ル儀ハ相見得ル間、此上御隠蜜ニ被成置ルゐハ、却ゐ御取計も難被成ルニ付、嘉代身分柄之儀内〻申聞、當分嘉代ニ對面之儀ハ容易ニ難相調ル間、外ニ何そ内願之筋も有之ル ハ、申出ル方ニ私ヵ相達、程能取計仕ル様被仰付ルニ付、去ル十八日清七夫婦之者共私方へ相招、嘉代事當時於御國元結構被召仕、　御出生様も被遊御座ルニ付ゐハ、嘉代事御當地ニ御呼寄被成ル茂、早急ニハ相調申間敷ル間、何そ外ニ内願之筋も有之ル ハ、、其旨申

出ル様相達申ル處、夫婦共申ル者、嘉代事段〻結構ニ
被召仕ルと之儀奉承知、冥加至極難有仕合ニ奉存ル、
右次第ニも御座ルハヽ、對面之儀急ニ御願申上ル筋ニ
も無御座ル間、追〻御序を以對面被仰付被下ル様奉願
ル、左ルゐ彼是御願事等申上ル儀、恐至極奉存ル得共、
當分私共浪人ニゐ罷在、内外別ゐ困窮仕居申ル間、右
通難有御内意承知仕ル付、内願之趣兩日中書付ニ相認
差上可申旨申置罷歸申ル處、同廿日別紙願書清七持參
仕差出申ル、何分御吟味次第御取計方被仰付度儀ニ奉
存ル、別紙願書相添此段申上ル、以上、

正月廿三日　　桑山甚助

橋口與三次殿

(の10)

(朱)「本文岩下佐次右衛門御取次を以差出ル」

右者鈴木清七妻願之趣ニ付、御都合能取計ル様被仰渡
ル趣承知仕、御留守居付役桑山甚助を以本文之通右夫
婦ニ申聞ル處、難有仕合奉存ル段別紙願書差出申ル、
右一件者何れニ茂御取扱不被仰付ルゐ者難相濟儀ニ御
座ル間、往〻者猶又御吟味之上被仰付方も可有御座ル
得共、先此涯者願之通八官町御屋鋪裏地、又者高輪町
并御屋敷裏地面之内被召置、御扶持方御見合を以被下
置ル様被仰付ル方可然哉と吟味仕ル、依之右願書相添
此段申上ル、已上、

正月廿三日　　橋口與三次

(の11)

乍恐書附を以奉願上ル

一私共實之娘嘉代事、去ル戌七月中
御屋敷様ニ被召出ル節、御書院組同心佐野善次郎方を
當宿ニ相願御奉公差上置申ル處、其後嘉代方ゟ一向便
も無之ル間、及數度善次郎方ニ罷越、嘉代儀者
御屋敷様ニゐ何様之御奉公相勤罷在ル哉承知仕度旨相
尋ル得共、彼是と表裏成挨拶仕ルゐ譯合相分不申ル、
最早及三四ヶ年嘉代方ゟ之便も無御座、私共心勞仕ル
ニ付、無是非　御屋敷様ニ御願申上、嘉代ニ對面被仰
付被下ル様再往奉願上ル處、嘉代事當時結構被召仕、
御國元へ罷在ル付ゐ者、急ニ對面被仰付ル儀難被爲成
ル、其内何そ外ニ内願之筋も有之ルハヽ、其趣申出ル
様御内〻奉承知、冥加至極難有仕合奉存ル、依之右御
内意ニ縋り乍恐御願申上ル、私共事當時浪人ニゐ罷在、
住所にも心ニ任せ不申、内外困窮仕罷居申ル間、何卒

嘉代御奉公向相勤居ゟ御縁之御取分を以、御町屋敷内抔へ被召置、浪人分ニゟ御見合を以御扶持方等ニゟも被成下ゟ様ニも被仰付被下置ゟ得共、重畳難有仕合奉存ゟ、爲御見合家内人數書別紙ニ申上ゟ、右之趣宜様被仰上被下ゟ様奉願上ゟ、以上、

寛政五年丑正月

麻布山谷町吉兵衛店当時浪人
鈴木清七印

右同人妻
きん印

薩州様御屋鋪
御役人中様

張紙ニ

麻布山谷町吉兵衛店
浪人 鈴木清七印
右同妻 きん
右同娘 嘉代
右同 りん

右之通御座ゟ、以上、

丑正月廿一日

以上張紙也

覺

麻布山谷町吉兵衛店ニ罷在ゟ
浪人 鈴木清七

右之者身分之儀承合ゟ様承知仕ゟニ付、彼方へ差越、清七妻ぎんハ致問合承合申ゟ處、全躰關播磨守様御家來ニゟ、亡父代子細有之御暇被下致浪人、其後清七兄甚五郎と申者、糀町五町目仁兵衛店ニ致居住、劍術指南仕罷在、其砌嘉代致出生、清七儀ハ土井兵庫頭様御家來ニ伯父有之實子無之、清七事伯父之方へ養子ニ相成、兵庫頭様御在所三州苅屋へ罷越居ゟ處、其後伯父之方ニ實子致出生ゟ、左ゟゟ嘉代五歳之節兄甚五郎大病相煩ゟニ付、三州表へ申遣、清七儀御當地へ罷下り、甚五郎病中看病等仕ゟ得共、不得快氣を相果申ゟ、然處伯父之方ニ茂先達ゟ出生茂有之ゟ付、清七事彼方養子致違變、甚五郎妻きんへ入夫仕、其後女子致出生當年拾四歳罷成ゟ、嘉よ事茂、兄甚五郎娘ニ相違無御座ゟ由、清七妻事茂、川崎宿いさこ町百姓六右衛門娘ニゟ御座ゟ、最初茂右通糀町ニ致住居ゟ得共、貳三ケ年已前赤坂裏傳馬町貳丁目善八店へ引移申ゟ處、當夏中致類燒ゟニ付、當分之所ハ罷越申ゟ由ニ御座ゟ、

右之通承合申ゟ間、此段申上ゟ、已上、

正月　　御留守居組小頭　小野半次

桑山甚助殿

(の14)

右之通鈴木清七身分之儀、爲御見合内々承合申ゟ間、此段申上ゟ、已上、

正月廿一日　　桑山甚助

橋口與三次殿

(朱)「本文岩下佐次右衛門江與三次ゟ差出置ゟ」

(の15)

丑正月廿七日

御書院組佐野善次郎養女嘉代儀、去ル戌七月中ゟ御屋鋪ニ被召抱置ゟ儀ニ御座ゟ處、去年十月中麻布山谷町吉兵衛店ニ罷居ゟ浪人鈴木清七妻ぎんより願書差出ゟ儀ニ付、別紙數通相添去冬委細申上、猶又此節清七より差出ゟ願書も差上置ゟ處、右一件御取扱方取調申上ゟ様被仰渡ゟ趣承知仕ゟ、依之吟味仕ゟ處、右願之趣何れニも御取揚無之ゟハ、、及出訴ゟ時宜ニも相成可申、左ゟゐ者御外聞ニも相掛可申儀ニ御座ゟ、右者外ゝ様ニゐ者御召仕女中へ御出生ゑ御座ゟ得者、宿元へ御扶持方等御見合を以被下置、右女中之儀ハ、一生被召置ゟゑ有之、又者金子等被下置、永ゝ御暇被遣ゟ御仕向も有之儀ニ御座ゟへ共、此御方様ニゐ者、已前より外ゝ様御取扱とハ相替、右躰之儀ハ、格別御手厚御取計被仰付ゟ御事ニ御座ゟ得者、外ゝ様御振合ニ者難申上御座ゟ、右ニ付ゐ者、清七夫婦之儀ハ内願之通一先町御屋敷内へ被召置、浪人分ニゐ御扶持方等被下置、往ゝ之儀ハ猶又御吟味之上御取計方も可有御座と奉存ゟ、且又善次郎儀ハ、追ゝ申上ゟ通内ゝ之懇意筋迄を以嘉代事養女ニ申立、清七方ニ者疑と取究をも不致差置ゟ所ゟ右通御面働筋も到來仕、不束之至ニ御座ゟ、乍然悴佐野中藏儀者、最早御屋敷へ被召出、中小姓ニも被仰付置ゟ儀ニ御座ゟへハ、今更父子共御引離被成ゟ儀者、御外聞ニも相掛可申哉ニ奉存ゟ間、中藏儀ハ今通ニゐ被召置ゟ方ニも可有御座哉、左ゟゐ善次郎儀ハ追ゝ隱居仕ゟ上者、　御家中ニ可被召入と之御内定も爲有御座儀御座ゟへ共、右申上ゟ通未熟之取計方仕ゟ付ゐ者、御屋鋪ニ被召入ゟ儀者被相止ゟ筋ニゑ可被仰付哉、右兩條之通ニゑ被仰付ゟハ、、雙方無難ニ相片付可申儀と奉存ゟ、乍然何分ニも御吟味次第被仰付度御事ニ奉存ゟ、右御内用方掛り被仰付置ゟ付、外同役

中へも内蜜申談、右之通吟味仕此段申上ゟ、已上、

正月廿九日　　桑山甚助

橋口與三次殿

(の16)

右之通御留守居付役桑山甚助致吟味申出ゟ、尤清七并妻願之趣、嘉代事實娘ニ相違無之ゟ付ゐ者、何れニも御取扱不被仰付ゟゐ者難相濟、右ニ付ゐ者外方へ被差置、御手當等被仰付ゟゐ者、萬端御面働筋も相掛り可申儀ニ御座ゟ間、清七夫婦之儀者内願之趣被應、一先八官町又者高輪町并御屋敷裏地面之内ハ被召置、浪人分ニゐ御扶持方等御見合を以被下置、猶又往々之所者追々御吟味之上御取計被仰付方ニ成可有御座哉と奉存ゟ、左ゟゐ善次郎儀者、其身ゟ差出ゟ別紙書付之趣ニゐ得と相調ゟへハ、元ト不束之取計仕ゟ所ゟ事起りゟ儀ニ者御座ゟ得共、初發筋惡敷取扱養女ニ申立ゟ儀とも相見得不申、早竟清七不勝手者故、嘉代取仕立方等も相調不申、難澁仕ゟ付、相救遣ゟ實情ゟ親分ニも相成ゟ趣ニ御座ゟ處、取究方未熟ニ致置ゟ故、右通之儀も到來仕ゟ筋ニ相聞得申ゟ、乍然善次郎相違之儀申出ゟ付ゐ者、御内意通　御屋敷ハ被召入ゟ儀者被相止、善次郎引替ニ清七事前文之通可被仰付哉ニ奉存ゟ、且又善次郎悴佐野中藏儀ハ、最早御屋敷へ被召出、中小姓ニも被仰付置ゟ儀ニ御座ゟ間、中藏儀者是迄之通被召仕ゟ筋ニも可被仰付哉、右樣ニも被仰付ゟ者、外方ハ之御響合も不事立、雙方無難ニ相片付可申儀と吟味仕ゟ、右御取計之外ニ者、於私共方も別ニ手段も相付兼申ゟ、乍然此上何分御沙汰次第被仰付度儀ニ奉存ゟ、此段申上ゟ、以上、

丑正月廿七日　　橋口與三次

(の17)

丑五月十四日

一鈴木清七夫婦并悴佐野縫右衛門・同人親佐野善次郎事

(三隣堂行習)今日主計殿より谷村孫右衛門御取次を以左之通被仰付ゟ間、橋口與三次宅ハ右面々召呼、清七夫婦ハ者御書付之趣、桑山甚助より申渡、善次郎父子ハ者與三次より申渡ゟ處、何れも難有仕合奉存ゟ段御請御禮申出ゟ、

主計殿より被相渡ゟ御書付寫

浪人

鈴木清七
右之妻

右ハ當分之容ニゐ、高輪御下屋敷御借店裏明地ニ家作造立被仰付、自分調之筋ニゐ被差置ゟ、

一金貳拾七兩
但拾五人扶持、米貳拾七石之賦

一金三拾兩

右同人

右年〻被下置ゟ、

右之通被仰付ゟ條、申聞ゟ儀共御留守居取計、家作造立等致吟味申出ゟ様可承向へ可申渡ゟ、

五月　主計

(の18)

佐野縫右衛門

右ハ新規被召出、中小姓被仰付置ゟ、當分　大奥ニ致御奉公ゟかよ最初被召抱ゟ節、縫右衛門親善次郎不續之取究之儀、跡達ゐ相知ゟ付ゐハ、被仰渡趣ゑ可有之儀ゟ得共、善次郎世話を以かよ御奉公ニ差上ゟ譯合ゑ有之、右様之御取譯を以縫右衛門儀ハ當分之通被召置筈ゟ間、難有承知仕ゟ様可申渡事、

一縫右衛門親善次郎儀ハ、隱居仕ゟ上被召抱筈御内定も爲有之事ゟ得共、かよ身分之儀ニ付、不續之儀共跡達ゐ段〻相知、承糺之上其身ゟも誤申出、鈴木清七夫婦・かよ實方ニゐ、以來御扶持方等被成下ゟ様被仰付ゟニ付ゐハ、善次郎儀ハ此已後無御構方被仰付ゟ間、其趣を以程能御留主居ゟ申聞ゟ様可致ゟ事、

五月

(の19)

丑七月廿三日

浪人
鈴木清七
右同人妻

右ハ當分之容ニゐ、年中御給金三拾兩并御扶持米代金廿七兩被下置、高輪御下屋敷御借店裏明地ニ被召置ゟ様先達ゐ被仰渡置ゟ、右家作御出來相濟ゟ付、勝手次第引移被仰渡、其旨清七ハ申達ゟ處、今日家内都ゐ引越相濟申ゟ、左ゟゐ右住居所之儀ハ、御借店同様已來高輪詰御留守居付役より差引仕ゟ様被仰渡ゟ付、是又清七ハゑ申聞置ゟ儀ニ御座ゟ、此旨申出ゟ、以上、

七月廿三日　桑山甚助

橋口與三次殿

右之通御留守居付役桑山甚助申出ゟ間此段申上ゟ、
以上、

七月廿三日　　橋口與三次

（朱）「本文谷村孫右衛門御取次を以差出ゟ」

346

重豪公御譜中

寫正文在家老座

347

中將様此節高輪御下屋鋪ニ被遊　御引移ゟ付、御入料之儀者、（朱）「本文被　仰出候趣承知仕、達　御聽候処、此節御入料之儀者やはり　御
都ゐ御表より御取計可被進旨被　仰出ゟ間、其段　隱居御方より被差出、此已後何そ付御入料費被為　在候節者、おのつから
被達　御聽、向ゝニ表可被申渡ゟ、尤右ニ付ゐ者、諸事　可被仰　進旨仰　仰出候段、愛申藏記を以承知仕候、此段及御返答候条、
御隱居御方より被差遣ゟ段被仰付越ゟ趣被　聞召上ゟ得　可被達　貴聞候、以上」
共、餘事ニ者相替　御引移ニ付ゐ者格別之御事ゟ故、右
之通可被成進旨、分ゐ被　仰出ゟ間、其趣を表被申上被
致取扱ニゐ可有之ゟ、以上、

（朱）「寛政八年」正月廿七日　（朱）「上」市田勘解由

（朱）「二月九日」
（朱）「下」菱刈大炊殿

嶋津將監殿

348

齊宣公御譜中

349

重豪公御譜中

今茲寛政八年丙辰春二月四日
家齊公遣二渡邊喜右衛門一、賜二貴鷹所レ搏之鶴一隻一、會微
恙、久留島出雲守通同代奉二恩旨一、既詣二各老第一拜謝焉、

350

仝上

正文在文庫

なを〳〵御表よりも御禮御申上被成ゟよし、何もよ
ろしく申上ゟへくゟ、めてたくかしく、
御ふみ下されゟ、
上ゝ様益御機嫌よく成らせられ、御めて度思召被成ゟよ
し、さては
上使を以御鷹の鶴御拜領被成、有かたき御事に思召被成
ゟよし、右之御禮御申上被成ゟ、御文の趣よろしく申上

寛政八年丙辰齊宣當二厄年一、於レ是犬追物師家川上十郎左
衛門親香及其他犬追物人員請下行二鏑流馬於稻荷社前一、以
祈中除厄上、乃許レ之、春二月朔日行レ之、十七日命二親香其
他員一、復行二鏑流馬於城南中村別莊騎射場一、是日也齊宣
臨觀焉、騎馬服裝一如二朔日一、

ゟへくゟ、
若君様ゟもよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
（朱）「寛政八年」
常盤井
飛鳥井
野村
峯野
瀬川
松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

351
重豪公御譜中
正文在文庫
なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、
御ふみ下されゟ、
上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成ゟよし、さてハ
上使を以御鷹の鶻御同氏豐後守殿へ御拜領被成ゟ御事、
有難御事に思し召被成ゟよし、右之御禮
御臺様へ御申上被成ゟ、御文のやうよろしく申上まいらせゟへハ、御まん足ニ思しめしゟ、

淑姫君様へもよろしく申上ゟへくゟ、めてたくかしく、
（朱）「寛政八年」
常わ井
飛鳥井
野むら
みねの
せかわ
松平
上總介様　御返事
人〻御中

352
齊宣公御譜中
幻生君ゟ
十代之祖松齢公（島津義弘）長男也、以二永祿十二年一生、幼名鶴壽丸、
天正四年十一月二十二日夭、法號涼山幻生、其遺骨藏所
不詳、今茲寛政八年二月寺社奉行告以二加久藤（日向）郷不動寺佛
檀下納レ之無レ疑、於レ是命二其修理一如レ左、

353
白木御文書六番箱中　六十二
寺社奉行ゟ
幻生様御靈骨御納り所、是迄委敷不相知之處、加久藤不
動寺御佛檀之上
御位牌御厨子下箱之内ゟ御納り被成御座ゟ段被申出趣有

之、此節右御佛檀下地上ニ、別紙繪圖面之通石棺疊之上、右之内楠板箱相調、其内ハ御納、右之譯石棺ハ記置ル様被仰付ル、尤　御位牌之儀も當分之通被遊御安置ル、右ニ付調方又ハ寺家造替等之儀共、都テ別紙吟味通申付ル條、御費筋無之様可被取計ル、左ルテ被記置ル文言ハ、追テ可申渡ル、此旨申渡可承向へも可申渡ル、

二月　　伯耆

右ノ口裏ニ　伯耆殿ヘ被相渡ル御書付之寫
内ニ張紙アリ
幻生様トハ　義弘公御長男鶴壽丸様、天正四年十一月二十二日御天亡、法号涼山幻生ト申奉ル也、明治二十一年平田宗高記ト朱カアリ

右外包ニ
幻生様御霊骨御納り所委敷不相知ル処、加久藤不動寺御仏檀之上御位牌御厨子下箱之内ニ御納り被成御座ル段寺社奉行ヘ被申出ル付、伯耆殿ヘ被仰渡ル書付壱通六番白木御文書箱ニ納置ル事

外包裏ニ
寛政八年辰二月三日伯耆殿ヘ御渡被成、東郷次郎太郎致首尾ル事

354

重豪公御譜中
寫正文在家老座

高輪御屋鋪御作事等相濟兼ル付、去ル朔日　御引移之儀ハ　御延引之御模様ル段ハ先便申越置ル、弥　御延引相成、未御作事等相濟ル程合ハ不相知ル付、御日限之儀不被　仰出ル、此段各爲御心得申越ル、以上、

(朱)「寛政八年」二月九日　　菱刈大炊

川上久馬殿
島津求馬殿
伊勢播磨殿
市田勘解由殿
二階堂河内殿
名越右膳殿
山田伯耆殿

355

重豪公御譜中
正文在文庫

歳暮之

御内書可相渡ル間、明日五半時御城ハ家來可被差出ル、以上、

(朱)「寛政八年」二月廿日　　松平伊豆守(信明)

松平上總介殿

356 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

其御地芝居屋敷手狹有之ゟ付、同氏上總介儀高輪下屋鋪ゟ引移度段申越ゟ、尤其節ゟ家來より御屆可仕ゟ、此段御聞置可被下ゟ、以上、

(朱)「寛政八年」三月三日　松平豐後守

357 仝上

同氏上總介儀高輪下屋敷ゟ引移ゟ付ゟ、何そ付　上使被成下ゟ節ゟ、芝居屋敷ゟ御請仕ゟ心得御座ゟ、此段御聞置可被下ゟ、以上、

(朱)「寛政八年」三月三日　松平豐後守

(朱)「右弐通御日附当日御用番松平伊豆守様江御留守居ニ而被差出」

358 齊宣公御譜中

三月九日拜下　幕府以二驛遞一賜中鷹獵之鶴上、

359 重豪公御譜中

先是、天明丁未重豪告老營二隱室芝邸内一、雖レ謝二公務一尚不レ能レ無二世塵之煩一、且舍屋陜隘不レ堪二久居一、於レ茲去冬出二私藏之金一、使下刈二莽蕪一降二沙石一更興中葺隱館於江府城南高輪第上（高輪第者、曩昔寛陽公告老之後所隱栖、浄国公亦初年宅於斯、爾来礎壞久之）、至二今茲三月一落成、故十三日率二季子時之丞・爲次郎・乘之助一移二徙于高輪別墅一、則使下レ告二之于官一且述中已往有レ賜二　上使于重豪一尚於二芝邸一拜上レ之、而命二家老一出二令數條一戒二邸中勤番輩一、以下出入往來守二舊範一、不レ忘二非常一各勤二其職一貴二質樸一禁二放酒一等之事上、其他盡定二法約一、今不三枚擧二于茲一云、(朱)「按ルニ時之丞君此年八歳、左近様候て也爲次郎君此年七歳、是八翌年夭亡也乘之助君此年二歳、是モ三歳ニテ夭亡也」

360 仝上

扣正文在家老座

上總介儀、今日豐後守高輪下屋敷ゟ引移申ゟ間、此段申上ゟ、以上、

(朱)「寛政八年」三月十三日　松平豐後守内　西郷八郎次

361 仝上

上總介儀、豐後守高輪下屋鋪引移、且又右ニ付ゟ何そ付

上使被成下ハ節者、芝居屋鋪ニハ御請仕ハ趣、御用番様ハ御屆仕、今日引移申ハ、此段申上ハ様從國元申付越ハ、以上、

(朱)「寛政八年」三月十三日　　松平豐後守内　西郷八郎次

362

重豪公御譜中

同年三月十九日

家齊公男子誕生(御生母御台所)、稱二敦之助君一、岡野肥前守知曉勤二墓目之役一、岡野能登守知郭爲二矢取一、酒井因幡守忠敬奉二篦刀一、二十五日使二番頭及物頭一登上レ營、獻二于家齊公　儲后敏次郎君　御臺所各一種三百匹一奉レ賀二令子降誕一、又以二女使一獻二縮緬十巻・鯛一折于　御臺所一、奉レ賀二七夜一、　御臺所亦賜二同品于我一、

363

仝上

正文在文庫

御臺様御安産爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政八年」三月廿五日　　信明判

〃　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」　松平伊豆守　信明

364

仝上

御臺様御安産爲御祝儀、

若君様ハ以使者如目錄被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政八年」三月廿五日　　信明判

〃　松平上總介殿　　(朱)「在口裏」　松平伊豆守　信明

365

重豪公御譜中

寫正文在家老座

一當分高輪御殿之地面

右蓬山(ヨモキヤマ)

一右御本門より南方稻荷坂下迄

右鶴之渡(ツルノワタリ)

一右同向御屋敷

右環江(タマエ)

366

右之通相唱ゟ様被　仰出ゟ付、於爰元ゟ向〻ゟ致通達
(朱)「本文致承知、向〻江申渡候、以上」
ゟ間、其元申渡之儀何分可被取計ゟ、此段申越ゟ、以
上、

(朱)「寛政八年」三月廿八日　(朱)「上」市田勘解由

(朱)「五月十三日」川上久馬殿
菱刈大炊殿
(朱)「下」伊勢播磨殿
高橋縫殿殿
二階堂河内殿

367

重豪公御譜中
正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申あけまいらせゟ、めて度か
しく、

御ふみ下されゟ、
上〻様益御機嫌よく被爲成、御めて度思しめし被成ゟよ
し、扨はこの程高輪へ御移り被成ゟ二付、昨日ハ
御臺様より御拜領もの被成、ま事二以て有かたき御事二
思しめし被成ゟよし、右之御禮御申上被成ゟ、御文の様
よろしく申上まいらせゟへハ、御満足二思しめしゟ、め
て度かしく、

(朱)「寛政八年」

花町　ゟ
松たいら
上總介様　御返事　華園
人〻御中　つほね
富田

368

重豪公御譜中
正文在文庫

敬之助殿事、尾張殿御養子被　仰出ゟ爲御祝儀、以使者如
目錄被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

(朱)「寛政八年」四月朔日　資愛判

〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

369

仝上

敬之助殿事、尾張殿御養子被　仰出ゟ爲御祝儀、
若君様ゟ以使者如目錄被獻ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合

ハ、恐々謹言、

（朱）「寛政八年」四月朔日　　資愛判

〃　松平上總介殿　　（朱）「在口裏」太田備中守　資愛

370

重豪公御譜中

今茲夏四月重豪遣二側役於隅州加治木長年寺一、寄二附銀百枚一、以使レ供二（重年室）正覺院殿之齋食一矣、

371

仝上

扣正文在寺社奉行所

銀百枚

右ハ加治木長年寺

正覺院様御靈前ニ

中將様思召を以、此節御附御側役を以被遊御進納ハ條、可相備ハ、將又長年寺今通ニハハ難取續段ハ被　聞召上、御祠堂銀之　御趣意ニハ右之通被納置ハ間、往々右之餘勢を以取續、御佛餉勤行等都ハ無滞執行ハ様被仰付ハ、

右申渡長年寺ニハ寺社奉行より可被申渡旨可申渡ハ、

（朱）「寛政八年」四月　　久馬

372

仝上

扣正文在寺社奉行所

銀百枚

右此節從

中將様長年寺ニ御進納之段ハ別段申渡通ハ、依之御銀之儀ハ　御隱居御納戸金之内より被差出ハ條、此旨可承向ニ可申渡ハ、

（朱）「寛政八年」四月　　久馬

373

扣正文在寺社奉行所

銀百枚

右ハ加治木長年寺

正覺院様御靈前ニ

中將様思召を以、此節御附御側役を以被遊御進納候條、可相備ハ、將又長年寺今通ニハハ難取續段ハ被　聞召上、御祠堂銀之　御趣意にて右之通被納置ハ間、往々右之餘勢を以取續、御佛餉勤行等都ハ無滞執行ハ様被　仰付ハ、

右之通久馬殿より鎌田源左衛門取次を以被　仰渡ゟ條
堅固相守、後年住替之節ゟ、嚴重次渡可有之ゟ、以上、
寛政八年辰四月九日
寺社奉行所印
長年寺

374

重豪公御譜中

同年夏四月十一日侯伯朝
大家奉賀　御臺所三七夜、是日重豪遣留守居于各老
第、述慶詞、而以女使獻羽二重十匹・鯛一折于
御臺所、　御臺所亦賜羽二重十匹・緞子三巻・鯛一折
于我、即上書于宮中謝恩、

375

仝上

正文在文庫

返〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかし
く、
御ふみ下されゟ、
御臺様益御機嫌よく被爲成、御めてたく思召被成ゟよし、
さてはこん日
御枕直しの御祝儀ニ付、はふたへ十疋・鯛一をり御上ケ
被成、御同氏豐後守殿よりも御上被成、よろしくひろう
致まいらせゟへハ、御滿足に思しめしゟ、めてたくかし
く、

(朱)「寛政八年」

花　町　b

はなその
つ　ほ　ね
と　ミ　田

まつ平
上總介様　御返事
人〻御中

376

仝上

なを〳〵何もよろしく申あけまいらせゟ、めて度か
しく、
御ふみ下されゟ、
上〻様益御機嫌よく被爲成、御めて度おほしめし被成ゟ
よし、扨は昨日ハ
御臺様御枕直の御祝義として、御もくろくの通り、外ニ純
子三まき御拜領被成、御同氏豐後守殿并ニ奥方さまへも
御拜領物被成ゟ御事、ま事にもて有かたき御事ニ思しめ
し被成ゟ由、右之御禮御申上なされゟ、御文のやうよろ

しく申上まいらせゟへハ、御満足ニ思しめしゟ、めて度
かしく、
(朱)「寛政八年」

花町　ゟ
華園
つほね
富田

松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

377

全上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてかしく、
御文下されゟ、
上〻様かたます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく
思召被成ゟよし、扨は昨日は
御枕直し御祝儀御申上被成ゟニ付、小野嶋御さし上ケ被
成ゟ所
御臺様より小野嶋へさあや二まきはい領　仰付られ、誠
ニ有かたく思召被成ゟよし、右之御禮
御臺様へ御申上被成ゟ、御文の趣よろしく申上まいらせ
ゟ、めてたくかしく、
(朱)「寛政八年」

常盤井
あすか井
野むら
峯野
瀬かわ

松平
上總介様　御返事
人〻御中

378

重豪公御譜中
正文在文庫

若君様ハ菖蒲御兜一飾以使者被獻之ゟ、首尾好遂披露ゟ、
恐〻謹言、
(朱)「寛政八年」四月廿八日　氏教判

(朱)「在口裏」
戸田采女正
氏教

松平上總介殿

379

重豪公御譜中
正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲太田備中守可
述ゟ也、
(朱)「寛政八年」五月二日

家斉公墨印

380

松平上總介殿（島津重豪）

御奥方　亟姫（カン）様

御嫡子　松平銀之進様

御娘　お彌（イヨ）様

御二男　松平永之進様

御娘　お三津様

同　お傳（トモ）様

同　お庸（ツネ）様

御三男　松平雄五郎様

御娘　お住（スミ）様

御四男　松平覺之丞様

御妹　松平上總介（池田斉政）様之御縁女　お絲（イト）様

同　松平左兵衛督（鷹司信凞）様之御縁女　お本（モト）様

御弟　松平豐前守（池田仲雅）殿

御叔父　松平越中守（定信）様

同　松平隱岐守（定國）様

御叔母　松平肥前守（鍋島治茂）様之御母　圓諦院（エンタイ）様

松平大膳太夫（毛利斉房）様之御母

全上

爲端午之御祝儀、

若君様ゟ以使者御帷子單物被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之

御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

（宋）「寛政八年」五月二日　太田備中守資愛判

松平上總介殿

381

白木御文書六番箱中　六十四

寛政八年丙辰五月十八日

松平相摸守（池田治道）様御續書壹通并御嫡子銀之進様御續書壹通

相摸守様御精進日書壹通寫

（宋）「六十四」　御記錄所

右一冊ノ蓋紙

（の1）

相摸守様御續書

御祖母　紀伊故大納言（宗直）様之御女　桂香院様

紀伊中納言（治宝）様之御叔母

同　邦媛院様
同　酒井左衛門尉様之（忠徳）
同　奥様
同　松平伊豫守様之（治好）
同　奥様
御従弟　徳川右衛門督様（田安斉匡）
同　越中守様之御嫡
同　松平太郎丸様
同　御同人様之御二男
同　松平次郎様
同　御同人様之御息女
同　お百代様（モヨ）
同　お婉様（エン）
同　お福様（トミ）
同　お幸様（ユキ）
同　お忠様（タヽ）
同　隱岐守様之御嫡
同　松平立丸様
同　御同人様之御息女
同　お紋様
同　松平肥前守様
同　御同人様之御妹
同　お數様（カツ）

同　松平大膳大夫様
同　御同人様之御弟
同　毛利哲之進様
同　同斷
同　毛利儇之進様（ハヤ）
同　酒井左衛門尉様之御息女
同　お建様（タツ）
同　松平伊豫守様之御息女
同　お廣様
御縁家
近衛前右大臣様（経熙）
二條右大臣様（治孝）
一條内大臣様（忠良）
三條西大納言様（実起）
勸修寺前大納言様（経逸）
芝山宮内大輔様（持豊カ）
紀伊中納言様
尾州様ニゐ
聖聰院様
松平加賀守様（前田治脩）
松平越前守様（重富）
松平安藝守様（浅野重晟）

松平陸奥守様（伊達斉村）
松平阿波守様（蜂須賀治昭）
松平左兵衛督様（伊達重村）
細川越中守様（斉茲）
松平左京太夫様（頼謙）
丹羽加賀守様（長貴）
松平讃岐守様（頼儀）
松平出雲守様（前田利謙）
松平播磨守様（頼説）
酒井左衛門尉様（忠徳）
松平下總守様（忠和）
南部慶次郎様（利敬）
阿部播磨守様（正由）
松平飛彈守様（利考）
土井三郎様（利謙）
相良壹岐守様（正寛）
内藤山城守様（政鮮）
九鬼長門守様（隆張）
内藤主殿頭様（政鋼）
柳生但馬守様（俊則）

京極備前守様（高久）
堀田攝津守様（正敦）

御一統

松平上總介殿（池田斉政）
池田信濃守殿（政直）
松平縫殿頭殿（池田定常）
池田山城守殿（政恭）
松平但馬守殿（池田喜生）
池田筑後守殿（長惠）
池田雅次郎殿（政貞）
池田左門殿（清弥）
池田直次郎殿（政富）
池田百助殿（頼完）
池田源三郎殿（政能）

(の2)

銀之進様御續書

御父　松平相摸守様
御養母　相摸守様之　奥方様
御曽祖母　相摸守様之御祖母　桂香院様

御妹　お彌様
御弟　松平永之進様
御妹　お三津様
同　お傳様
同　お庸様
御弟　松平雄五郎様
御妹　お住様
御弟　松平覺之丞様
御伯母　お絲様
同　お本様
御伯父　松平豐前守殿
一繼(ママ)様
御叔母　政所様
同　紀伊中納言様之御叔母
備姫様
同　松平左京大夫様之御奥方
保姫様
御從弟　紀伊中納言様

公義之外相摸守様御精進日
四日　七日　十二日　廿日　廿一日

右毎月朝夕
四月九日　五月六日
右之月計朝夕

382
重豪公御譜中
正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申あけまいらせけ、めてたく
かしく、

御文下されけ、
上〻様益御機嫌克ならせられけ、御めて度思召被成けい由、
扨ハ御同氏豐後守殿おく方さま御病氣御尋として
公方様　御臺様より奉文を以　仰被遣けい、
御臺様ゟ御さかな・御塗重御拜領被成けい御事、いか程御手
前様ニおゐて有難御事ニ思召被成けい由、右之御禮御申あ
けなされけ、御文の趣よろしく申上まいらせけ、
若君様(敏次郎、家慶)へもよろしく申あけまいらせけ、めて度かしく、

(朱)
「寛政八年」

ゟ

常盤井
飛鳥井
野むら

松平
上總介様　御返事
人〻御中

383

みねの
瀬川

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御ふみ下されゟ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めて度思しめしなされゟよし、扨ハ御同氏豊後守殿おく方さま御病氣御尋として

公方様　御臺様より奉文を以仰之趣、

御臺様よりハ御塗重一組・御肴御拜領被成、いかほとか有かたき御事ニ思しめしなされゟよし、右之御禮

御臺様へ御申上被成

淑姫君様(家斉女)へも御申上被成ゟ通、よろしく申上まいらせゟへは、御満足ニ思しめしゟ、めて度かしく、

「寛政八年」(朱)

松たいら　御返事
上總介様
人〻御中

常盤井
飛鳥井
野むら

384

峯野
せ川

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御ふミ下されゟ、

上〻様益御機嫌克ならせられ、御めて度思召被成ゟよし、さては

御同氏豊後守殿御おくさま御病氣御尋として

御臺様ゟ奉文を以仰被遣ゟ御事、いか程　御手前様ニおゐて有かたき御事ニ思しめし被成ゟよし、右之御禮御申上被成ゟ、御文の趣よろしく申上ゟへくゟ、

若君様へもよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

「寛政八年」(朱)

松平
上總介様　御返事
人〻御中

常盤ゐ
飛鳥井
野むら
みねの
瀬川

385

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

御ふみ下されけ、

上〻様益御機嫌よく被爲成、御めて度思しめし被成けよし、扨ハ御同氏豐後守殿おく方さま御病氣御尋として御臺様より奉文を以仰の趣、有かたき御事こおほしめし被成けよし、右之御禮

御臺様へ御申上なされ

淑姫君様へも御申上被成、よろしく申上まいらせけへハ、御まんそくこ思しめしけ、めて度かしく、

(朱)「寛政八年」

常盤井 ゟ

飛鳥井

野むら

峯の

せ川

松たいら
上總介様 御返事
人〻御中

386

齊宣公御譜中

八年夏六月十一日(後故八日)齊宣夫人佐竹氏薨、法號芳蓮院殿華蕚清心大姉、建二墓於江府大圓寺、廟於薩府福昌寺一、

387

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鰹節一箱被獻之けゝ、遂披露けゝ處一段之御仕合けゝ、恐〻謹言、

(朱)「寛政八年」六月廿三日　信成判

〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」安藤對馬守信成

388

仝上

今朝

若君様ゟ鰹節一箱被獻之けゝ、遂披露けゝ處一段之御仕合けゝ、恐〻謹言、

(朱)「寛政八年」六月廿三日　信成判

〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」安藤對馬守信成

389 重豪公御譜中
正文在文庫

端午之
御内書可相渡ハ間、明日五半時
御城ニ家來可被差出ハ、以上、
(朱)「寛政八年」六月廿四日　太田備中守
松平上總介殿

390 重豪公御譜中
正文在文庫

(朱)「為次郎君此年七月五日後三日ヲ以御天亡、七歳也、参考ノ為記ス」
誤辰トス

爲次郎殿卒去之御事
御臺様御聽ニ入、いたましくふひんニ思召ハ、嘸御殘念之御事と思召ハ、御障も御さなくハや心得申せとの御事ニ御座ハ、かしく、
(朱)「寛政八年」
まつ平
上總介様　人〻御中
花町
花園
つほね
富田

391 仝上

御ふミ下されハ、此程御末子嶋津爲次郎殿御死去ニ付、御臺様より御尋として奉文を以御懇の　仰を御蒙り被成ハ、有かたき御事ニ思しめし被成ハよし、今日御遠慮明ニ付、右之御禮御申上被成ハ、御文のやうよろしく申あけまいらせハ、かしく、
(朱)「寛政八年」
花町
華園
つほね
富田
松たいら
上總介様　御返事
人〻御中

392 重豪公御譜中
正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、
(朱)「寛政八年」七月九日　信明判
松平上總介殿　(朱)「在口裏」松平伊豆守信明

393 仝上

爲生見玉之御祝儀、
若君様江黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、
恐〻謹言、
(宋)「寛政八年」七月九日　信明判
松平上總介殿　(宋)「在口裏」松平伊豆守信明

394 重豪公御譜中

同年八月三日
大家遣二石谷周防守(清豊)于芝邸一、賜二御鷹之雲雀一、會微恙、
織田筑前守秀綿代奉二恩旨一、既詣二各老第一謝レ恩焉、

395 齊宣公御譜中

八年秋九月朔日爲二參覲一發麗城、冬十月十三日着江府、
二十七日
幕府遣二　上使一(姓名闕)傳二懇命一、

396 重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲安藤對馬守可
述ハ也、
(宋)「寛政八年」九月七日　家斉公墨印
松平上總介殿

397 仝上

爲重陽之御祝儀、
若君様江以使者御小袖一重被獻之ハ、遂披露ハ處一段之
御仕合ハ、恐〻謹言、
(宋)「寛政八年」九月七日　安藤對馬守信成判
松平上總介殿

398 重豪公御譜中

正文在琉球國司

尊書致拜見ハ、
中將様江爲年首御祝儀、目錄之通被差上之、到江府遂披
露ハ處御滿足　思召ハ、此旨可有洩達ハ、恐〻謹言、
(宋)「寛政八年」九月廿八日　名越右膳(恒中)實名判

399

全上

尊書致拜見候、

若殿様御儀

虎壽丸様と奉稱、御嫡子之御屆被爲濟ゟ爲御祝儀、以伊是名親方

中將様ゟ御太刀一腰・御馬代黄金十兩并目錄之通被差上之、到江府遂披露ゟ處　御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政八年」九月廿八日

名越右膳　實名判

伊勢播磨　實名判

川上久馬　實名判

浦添王子

伊勢播磨（貞矩）　實名判

川上久馬（久敬）　實名判

浦添王子

三司官

三司官

400

全上

尊書致拜見候、

若殿様御縁組被　仰出ゟ爲御祝儀、以伊是名親方

中將様ゟ御太刀一腰・御馬代白銀五十兩并目錄之通被差上之、到江府遂披露ゟ處　御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政八年」九月廿八日

名越右膳　實名判

伊勢播磨　實名判

川上久馬　實名判

浦添王子

三司官

401

全上

尊書致拜見候、當春

太守様御鷹之鶻被遊御拜領ゟ爲御祝儀、以伊是名親方

中將様ゟ目錄之通被差上之、到江府遂披露ゟ處　御滿悦之御事ゟ、此旨可有洩達ゟ、恐々謹言、

（朱）「寛政八年」九月廿八日　名越右膳　實名判
伊勢播磨　實名判
川上久馬　實名判
浦添王子
三司官

402　重豪公御譜中　斉宣公御譜中ニモアリ

同年自二十月八日一至二十日一修二淨國公五十年忌法事於淨光明寺一者三日、重豪使下家老伊勢播磨貞矩獻二香奠銀三枚一拜上焉、

403　重豪公御譜中
正文在文庫

重陽之
御内書可相渡ハ間、明日五半時
御城ハ家來可被差出ハ、以上、
（朱）「寛政八年」十月廿二日　安藤對馬守
松平上總介殿

404　重豪公御譜中

先レ是　家齊公之女淑姫君許二婚于尾張宰相治行卿之男德川五郎太主一、既五郎太主卒、再約二婚于一橋中將齊敦卿之男德川愷千代主一（実中將治國卿之男、治國卿卒、齊敦卿爲嗣養愷千代主、為己子、則家齊公之甥孫為尾張大納言宗睦卿養子）今茲十一月十五日愷千代主遣二家臣飯田能登守易信一納二聘於　大城一、於レ是明日使二留守居登一レ營、各獻二一種千匹于　家齊公及　儲后敏次郎君、一種三百匹于　御臺所及　淑姫君一、奉レ賀二結納之儀一焉、

405　仝上
正文在文庫

淑姫君様御結納爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、
（朱）「寛政八年」十一月十六日　信明判
〆　松平上總介殿　（朱）「在口裏」松平伊豆守　信明

406　仝上

淑姫君様御結納爲御祝儀、
若君様ハ以使者如目錄被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕

合ハ、恐〻謹言、

(未)「寛政八年」十一月十六日　　信明判

〆　松平上總介殿　　(未)「在口裏」松平伊豆守信明

407

全上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせハ、めて度かしく、

御文下されハ、まつ〳〵

上〻様方御機嫌よく成らせられ恐悦ニ思しめし被成ハ、

さやうニ御さハへは、昨日ハ

右衛門督(田安宗武)様御婚禮御首尾よく濟せられハ御事、御めてたく思召被成ハよし、右之御祝儀

若君様ハ御申上被成ハ、御文の趣よろしく申上まいらせハ、めて度かしく、

(未)「寛政八年」

松たいら
上總介様　御こたへ
人〻御中

常盤井
飛鳥井
野むら

〆

408

全上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせハ、めてかしく、

御ふみ下されハ、まつ〳〵

上〻様益御機嫌よく被爲成、御めてたく思しめし被成ハよし、扨はきのうハ

右衛門督様御婚姻首尾よく濟せられハ、御めて度御事ニ思召被成ハよし、右の御祝義

御臺様へ御申上被成ハ、御文の様よろしく申上まいらせハへハ、御滿足ニ思しめしハ、めて度かしく、

(未)「寛政八年」

松平
上總介様　御こたへ
人〻御中

常盤井
あすか井
野むら
ミね野
瀬川

〆

ミね野
せ川

409

齊宣公御譜中

先レ是、中山王尚穆卒、尚温繼レ統、今茲寛政八年尚温遣二使於
幕府一謝レ恩、正使大宜見王子朝規、副使安村親方良頭、
七月十七日着二鹿兒島一、齊宣乃宜二率レ之而參覲一、然預請下
以吾領内唯率レ之後身先行至中江府上、
幕府許レ之、故琉使後二於齊宣一、而以二十一月二十五日一着二
江府一、使事畢、翌九年三月二日歸二着鹿兒島一、

410 重豪公御譜中

同年冬十二月朔日
大家諱二于　儲后敏次郎君一曰二家慶公一、越翌日侯伯皆朝
賀、是日重豪使下遣二留守居于老中及若年寄第一述中慶詞上、

411 仝御譜中　齊宣公御譜中ニモアリ

今茲十二月五日値二　淨岸院殿（繼豊繼室、竹姫）二十五年忌一、齊宣修二法事
於福昌寺一者三日、重豪使下家老伊勢播磨貞矩獻二白銀二
枚一代拜上焉、

412 重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鯣一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻
謹言、
（朱）「寛政八年」十二月十五日　氏教判
〆　松平上總介殿　（朱）「在口裏」戸田采女正　氏教

413 仝上

今朝
若君様ゟ鯣一箱被獻ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐
〻謹言、
（朱）「寛政八年」十二月十五日　氏教判
〆　松平上總介殿　（朱）「在口裏」戸田采女正　氏教

414 重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲戸田采女正可
述ハ也、

(朱)「寛政八年」十二月廿七日　家斉公墨印

松平上總介殿

415

仝上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之ゟ、遂披露候之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

(朱)「寛政八年」十二月廿七日　水野出羽守忠友判

松平上總介殿

416

仝上

若君様ゟ御破魔弓一飾以使者被獻之ゟ、首尾好遂披露ゟ、恐〻謹言、

(朱)「寛政八年」十二月廿八日　忠友判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」水野出羽守忠友

417

重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ゟ、遂披露候之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」正月七日　資愛判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

418

仝上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之ゟ、遂披露候之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」正月七日　忠友判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」水野出羽守忠友

419

白木御文書六番箱中　六十六

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徴納國々年貢事、
右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、
寛政九年正月十一日　齊宣御判
右ノ上包吉書トアリ
外包ニ寛政九年巳正月
張紙
白木六番箱六十六号
寛政九年御吉書
(朱)「六十六」御吉書壱通
右寛政九年巳三月十五日縫殿殿ゟ篠原善之進ゟ被成御渡、
白木御文書六番箱江相納置ゥ事

420
重豪公御譜中
正文在文庫
爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之ゥ、遂披露ゥ處一段之御仕合ゥ、恐〻謹言、
(朱)「寛政九年」正月十一日　資愛判
〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

421
仝上
爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之ゥ、遂披露ゥ處一段之御仕合ゥ、恐〻謹言、
(朱)「寛政九年」正月十一日　忠友判
〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」水野出羽守忠友

422
齊宣公御譜中
寛政九年丁巳春正月十五日、虎壽丸及齊宣生母堤氏觀二犬
追物一、

423
重豪公御譜中
寛政九年丁巳春正月二十一日
儲后家慶公初着袴、是日使三人獻二于
家齊公　御臺所　家慶公各二種千匹一奉レ賀レ之、明日
家慶公遣二奏者水野壹岐守忠韶芝邸一賜二二種千匹于我一、
秋月山城守種德代奉二恩旨一、又詣二老中第一拜謝、

424
仝上
正文在文庫
若君様御着袴爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ゥ、遂披露
ゥ處一段之御仕合ゥ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」正月廿一日　資愛判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」太田備中守資愛

425

仝上

若君樣御着袴爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」正月廿一日　忠友判

〃　松平上總介殿　(朱)「在口裏」水野出羽守忠友

426

齊宣公御譜中

正月晦日、虎壽丸發鹿兒島、夏四月十三日着江府、

427

齊興公御譜中

九年正月晦日、虎壽丸七歲、發鹿兒島、夏四月十三日着江府、

428

近秘野艸　齊興公

九年丁巳正月晦日、發府城如江戸、時生七歲、國老名越右膳盛晨等從、四月十三日至芝邸、

429

重豪公御譜中

同年二月十三日

家齊公遣二石谷周防守(清豐)於芝邸一、賜二御鷹之鶴一、齊宣代レ予奉二恩旨一、又詣二各老第一拜謝焉、

430

重豪公御譜中

正文在文庫

歲暮之

御内書可相渡ゟ間、明日五半時

御城ゟ家來可被差出ゟ、以上、

(朱)「寛政九年」二月廿日　戸田采女正

松平上總介殿

431

重豪公御譜中

同年三月朔日　儲后家慶公加二首服一、任二從二位權大納言一、十一日重豪使三人獻二于

家齊公及　家慶公各太刀・馬代、于　御臺所白銀二枚及一種一奉レ賀レ之侯伯皆以九日獻賀、然重豪有故今日及茲、是日　家慶公遣二奏者松平能登守乗保一賜二一種千匹一、齊宣代レ余拜レ之、既過二晡時一故不レ及レ朝、詣二老中第一謝レ恩、越夏四月二十一日家慶公遷二于　西丸一、於レ茲獻二一種于　西城一、則遣二使价于月直老中及御側衆第一奉レ賀焉、

432

重豪公御譜中
正文在文庫

御臺様より申せとの御事ニおはしましけ、　乗之助殿御事御死去のよし　御聽ニ入、いた〳〵しく思しめしけ、嘸御殘念の御事、強き御障りも御座なくけや、御尋あそハしけ、よふ心得けて申せとの御事におはしましけ、かしく、

（朱）「寛政九年」

まつ平
上總介様
人〻御中

花　町
はな園
つほね
とミ田

433

仝上（朱）「本文乗之助君ハ寛政九年三月七日後以五日為諱辰御天亡、三歳」

御悔のため申入まいらせけ、　乗之助様御事御養生御叶被成す、御卒去被成けよしおとろき入け、嘸御殘念ニ思しめしけ、御愁傷被成け御事と存まいらせけ、御つよき御障りも御座被成すけや、御悔御左右承度さニてけ、類代も同し御事ニ申入度さニてけ、中年寄佐川表使も宜しく申入たくけへくけ、かしく、

（朱）「寛政九年」

まつ平
上總介様

はな町
花その
つほね
富　田

434

重豪公御譜中
正文在文庫

今度就
大納言様御元服御官位、爲御祝儀以使者御太刀・御馬代被獻之けい、遂披露けい處一段之御仕合けい、恐〻謹言、

（朱）「寛政九年」三月十一日　　資愛判

435

全上

今度就

大納言様御元服御官位、爲御祝儀以使者御太刀・御馬代被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

「寛政九年」三月十一日　　忠友判

（朱）「在口裏」

〃　松平上總介殿　　水野出羽守忠友

（朱）「在口裏」

〃　松平上總介殿　　太田備中守資愛

436

重豪公御譜中

正文在文庫

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、め出たくかしく、

御ふミ下されゟ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく被爲成、御めてたく思召被成ゟよし、さては御元服御官位の御祝儀として

大納言様より御同氏豐後守殿へ

上使をもて御拜領物仰付られ、御手前様ニおきありかたき御事ニ思しめし被成ゟよし、右之御禮御申上被成ゟ、御文之趣よろしく申上まいらせゟ、

大納言様へも御禮御申上被成ゟ由、よろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

「寛政九年」

まつ平上總介様御返事　人〻御中

ときわ井
飛鳥井
野むら
ミねの
せ　川

437

全上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御文下されゟ、

上〻様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成ゟよし、扨ハ御元服御官位の御祝儀として

大納言様より

上使をもて御同氏豐後守殿ゟ御拜領もの被成ゟ御事、有難御事に思召被成、右之御禮

御臺様ハ御申上被成ㇾ、御文のやう申上まいらせㇾへハ
御滿足ニ思めしㇾ、
淑姫君様ハも申上まいらせㇾ、めてたくかしく、
（朱）「寛政九年」
まつ平
上總介様　御返事
人〻御中
常盤井
飛鳥井
野村
峯の
瀬川

438
重豪公御譜中
正文在文庫
御文下されㇾ、今日は
瑞巖院様（敏之助、家斉男）一七日ニ當らせられㇾニ付、御機嫌御うかゝひ
被成ㇾ、御文の趣よろしく申上まいらせㇾ、かしく、
（朱）「寛政九年」
まつ平
上總介様
人〻御中
ときわ井
飛鳥井
野むら
ミねの
瀬川

439
仝上
御ふミ下されㇾ、こん日ハ
瑞巖院様一七日ニあたらせられㇾニ付、御機嫌のほと御
うかゝひ被成度、御文のやうよろしく申上まいらせㇾ、
かしく、
（朱）「寛政九年」
松たいら
上總介様
人〻御中
花町
華園
つほね
富田

440
御系図中
齊興
女子
女子
於隣（チカ）　於隣（ムラ）　松樹院　松壽院　種子島伊勢久道室
寛政九年丁巳三月十八日生、母島津仲久建女、慶應元
年乙丑八月二十日卒、法名妙悟日全、

441
近秘野艸　齊宣公御子
女子

於隣（チカ）　於隣（ムラ）　種子島伊勢輔時室（輔時既死、号松樹院後改松寿院）

寛政九年丁巳三月十八日生於府城、母島津仲久建女（名寿賀、至御年寄格、以文化十年癸酉四月三日卒、葬丶寺、法名光含院殿心珠浄臨大姉、是年七月追進級格令用殿字、）

○十一年己未十二月許嫁種子島鶴袈裟（久道）（後改蔵人又改、伊勢、即此也）

442

齊宣公御譜中

三月

御臺所敍二從三位一、二十八日齊宣登　城、謁二老中一奉レ賀レ之、翌日齊宣使下番頭登　レ城獻二

大樹家齊公及

御臺所一、各以二三種千匹一、又獻二

世子家慶公一以中一種千匹上、

443

重豪公御譜中

今茲三月　御臺所敍二從三位一、二十八日齊宣登　レ營謁老中奉レ賀レ之、重豪則遣二留守居于月直老及　西丸老中邸一述二慶詞一焉、越翌日齊宣使三番頭登　レ城獻二各二種千匹于家齊公及　御臺所、一種千匹于　儲君家慶公一、重豪亦使三物頭獻二各二種五百匹于　家齊公及　御臺所、一種五百匹于　家慶公一、又以二女使一、獻二鯛一折于　御臺所一矣、

444

仝上

正文在文庫

今度

御臺様御敍位付ゐ、爲御祝儀以使者御樽肴被獻之ゟ、遂披露ゟ之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

（朱）「寛政九年」三月廿九日　　資愛判

〆　松平上總介殿　　（朱）「在口裏」太田備中守資愛

445

仝上

今度

御臺様御敍位付ゐ、爲御祝儀以使者御樽肴被獻之ゟ、遂披露ゟ之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

（朱）「寛政九年」三月廿九日　　忠友判

〆　松平上總介殿　　（朱）「在口裏」水野出羽守忠友

446

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

御文下されけ、

御臺様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成けよし、扨ハ御敍位の御祝義御申上被成、たい一をり御上ケ被成、よろしくひろう致まいらせけへハ、御滿足ニ思しめしけ、めてたくかしく、

（朱）「寛政九年」

花町

はな園

つほね

とミた

まつ平

上總介様　御返事

人〻御中

447

仝上

なを〳〵何もよろしく申上まいらせけ、めてたくかしく、

御文下されけ、

御臺様ます〳〵御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成けよし、扨ハ此度御敍位ニ付て、猶又御祝義御申上被成、ちりめん十巻・たい一をり御上ケ被成、よろしくひろう致まいらせけへハ、御滿足ニ思しめしけ、めてたくかしく、

（朱）「寛政九年」

花町

はなその

つほね

とミた

まつ平

上總介様　御返事

人〻御中

448

重豪公御譜中

正文在文庫

本國薩摩　故薩摩守重年嫡子

生國薩摩　從四位上中將松平上總介重豪　巳五十三

天明七丁未正月廿九日隱居

御明細書短册西丸ニ一通りツ、被差出けー様、水野出羽守様より被仰渡けー由、大御目付池田筑後守（長惠）殿より御觸達有之けー付、

御兩殿様御明細書一枚ツ、、去ル三日筑後守殿御宅ニ、御留守居付役持參差出けー處、追而可申上旨承けー段申出けー、

別紙御明細書寫二枚相添、此段申越ゟ條、御記錄奉行ゟ
可被相渡ゟ、以上、

(朱)「寛政九年」四月十六日　　市田勘解由

川上久馬殿
菱刈大炊殿
伊勢播磨殿
高橋縫殿殿

449

重豪公御譜中

正文在文庫

今度

大納言樣西丸御移徙爲御祝儀、以使者如目錄被獻之ゟ、
遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐ゝ謹言、

(朱)「寛政九年」四月廿二日　　忠友判

(朱)「在口墓」水野出羽守
忠友

松平上總介殿

450

重豪公御譜中

先ゝ是正月二十三日幕府士武藤莊兵衛(安徵)、爲二齊宣一上二願狀一
請ゝ聘二丹羽左京大夫長祥妹一許ゝ之、於ゝ是夏四月二十五日
成ゝ婚、越五月朔日齊宣登　ゝ城奉ゝ謝二婚姻一、是日重豪亦
使三物頭獻二卷物五于
大樹家齊公、白銀五枚于
儲后家慶公、白銀三枚于　御臺所一、拜二謝之一、

451

齊宣公御譜中

先ゝ是正月二十三日麾下士武藤莊兵衛上書請二於
幕府一、以ゝ使三齊宣娶二丹羽左京大夫長祥(奥州二本松城主)妹一、乃得ゝ
允、(分註左ノ如ン)

謹按　重豪公譜云、是歲正月二十三日

幕府士武藤莊兵衛爲
齊宣公上二願狀一、請ゝ聘二丹羽左京太夫長祥妹一許ゝ之、
於ゝ是夏四月二十五日成ゝ婚、五月朔日齊宣登　ゝ城奉ゝ
謝二婚姻一、島津久明家當時於二執事役所一所二登錄一之日
史、是歲二月十九日曰、有下　太守公聘二丹羽左京太夫
妹一之願狀、正月二十三日呈二之於
幕府一之報至、故今日宜ゝ爲二之奉賀一之命上、其四月二十
八日曰、有下　太守公與二丹羽左京太夫妹一婚姻之事
幕府允許之報至、故今日宜ゝ爲二之奉賀一之命上、其五月

十九日曰、有下　太守公四月十五日賜レ告、十八日登レ城謝レ之、而賜レ馬、二十二日發二江府一之報至、故今日宜レ爲二之奉賀一之命上、據レ此則四月二十五日爲下　公既發二江府一之後上、蓋譜記レ月之誤而所レ謂四月二十五日成レ婚者、則三月二十五日而、五月朔日者四月朔日也、

凡江府之報達二于國一也殆經二三旬一、故三月二十五日之事、至二四月下旬一始達二于國一、故有二二十八日奉賀之令一亦可二推知一矣、姑記レ之以備レ考云、島津久明家舊稱二日置邸一、此日史乃實錄而爲下可二以徵一者上焉、

白木御文書六番箱中　六十七

包紙ニ御明細書二枚トアリ

本國薩摩	故薩摩守重年嫡子	
生國薩摩	從四位上中將	松平上總介重豪
		巳五十三

天明七丁未正月廿九日隱居

薩摩國一圓　本國薩摩		上總介重豪嫡子
高六拾萬五千石餘　大隅國一圓	從四位上中將	松平豐後守齊宣
日向國之内　生國武藏		巳二十九
外拾貳萬三千七百石　琉球國		

天明六丙午十二月七日元服　從四位下侍從　同七丁未正月廿九日家督

同年三月十八日少將　寛政二庚戌十一月廿七日從四位上中將　居城薩州鹿兒嶋

引返ニ

(朱)「御明細書被差出ル事　五月十日到来」

横山喜左衛門
谷山郷士
白濱善之助　便

453

御明細書短册西丸ハ一通りツヽ、被差出ル様水野出羽守様より被仰渡ル由、大御目付池田筑後守殿より御觸達有之ル付、

御兩殿様御明細書一枚ツヽ、去ル三日筑後守殿御宅ハ御留守居付役持参差出ル處、追ゐ可申上旨承ル段申出ル、別紙御明細書寫二枚相添此旨申越ル條、御記錄奉行ハ可被相渡ル、以上、

四月十六日　　市田勘解由

川上久馬殿
菱刈大炊殿
伊勢播磨殿
高橋縫殿殿

右外包ニ

太守様　中將様御明細書一通りツヽ、右ニ相付、江戸詰御家老衆より御国元御家老衆ニ之御問合写壱通

右者寛政九年巳四月三日　西丸ニ被差出ル扣ニ而ル間、当座ニ可納置旨、同年五月十三日大炊殿より相良太郎太致承知之、御文書入白木六番箱へ納置之ル事

(朱)「六十七」

454

齊宣公御譜中

四月十五日

大樹家齊公遣ニ上使一賜レ告且賜レ物、

世子家慶公亦使ニ上使一賜レ物、十八日齊宣登レ城謁ニ二公一奉レ謝レ之、

二公有ニ懇命一且賜レ馬、齊宣二十二日發ニ江府一、六月十九日巳刻着ニ麗城一、

455

重豪公御譜中

正文在文庫

大納言様ハ菖蒲御兜一飾以使者被獻之ル、首尾好遂披露ル、恐々謹言、

(朱)「寛政九年」四月廿八日　　忠友判

(朱)「在口裏」

〆　松平上總介殿　　水野出羽守　忠友

456

重豪公御譜中
正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲太田備中守可述ゟ也、

(朱)「寛政九年」五月二日　家斉公墨印

松平上總介殿

457

仝上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之ゟ、遂披露候之處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

(朱)「寛政九年」五月二日　水野出羽守忠友判

松平上總介殿

458

白木御文書七番箱中　五番

敬白　天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歳三司官役被　仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以　御國許御奉公入念可相勤候事、

一乍恐奉對

御三殿様、毛頭不可奉存疎意候事、

一從　御國許被　仰下候諸事御條書之趣、堅可相守候、若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中之掟并諸事無贔屓親疎可致沙汰候事、

右條々偽於申上者、

神文略ス

寛政九年丁巳五月十二日　幸地親方良篤判

459

白木御文書六番箱中　百三

御記錄奉行ゟ

お隣殿御名順、心鏡院殿次ニ被　仰出ゟ間、帳面ニ可記置ゟ、

五月　大炊

右包紙ニ
寛政九年巳五月廿五日
(朱)「百三」
お隣殿御順心鏡院殿次ニ被　仰出ゟ御書付壱通

460

重豪公御譜中
正文在文庫

端午之

御内書可相渡ハ間、明日五半時
御城江家來可被差出ハ、以上、
(朱)「寛政九年」六月廿四日　太田備中守
松平上總介殿

461
重豪公御譜中
正文在文庫
今朝鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐
〻謹言、
(朱)「寛政九年」六月廿七日　信成判
〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」安藤對馬守信成

462
仝上
今朝鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐
〻謹言、
(朱)「寛政九年」六月廿七日　忠友判

463
重豪公御譜中
正文在文庫
〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」水野出羽守忠友
上總介様より暑中ニ付御獻上物御座ハ處、水野出羽守殿
より之捻奉書、此度文字ニ而御渡有之ハ由、右ハ全書損
ニ而御座ハ、扨〻不念之儀恐入奉存ハ、先例之通此ノ文
字と御心得可被下ハ、留をも直し置可申ハ、以上、
(朱)「寛政九年」七月　前田左兵衛

464
仝上
爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段
之御仕合ハ、恐〻謹言、
(朱)「寛政九年」七月六日　信明判
〆　松平上總介殿　(朱)「在口裏」松平伊豆守信明

465
仝上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」七月六日　　忠友判

(朱)「在口裏」水野出羽守忠友

〃　松平上總介殿

466

重豪公御譜中

同年閏七月十八日

家齊公遣二小菅猪右衛門(正容)一賜二御鷹之雲雀一、島津淡路守忠持代ゝ予奉二恩旨一、既詣二老中第一拜謝焉、

467

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可述ハ也、

(朱)「寛政九年」九月七日　　家齊公墨印

松平上總介殿

468

仝上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之ハ、遂披露候之處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」九月七日　　水野出羽守忠友判

松平上總介殿

469

重豪公御譜中

正文在文庫

重陽之

御内書可相渡ハ間、明日五半時

御城ハ家來可被差出ハ、以上、

(朱)「寛政九年」十月廿日　　松平伊豆守

松平上總介殿

470

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝鯛一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

(朱)「寛政九年」十二月六日　　資愛判

二枚一拜焉、

474 仝上

同年十二月二十二日

家齊公遣二榊原左衛門(職序)於芝邸一、賜二貴鷹所レ搏之鶴一隻一、島津淡路守忠持代レ予奉二恩旨一、既詣二各老第一拜謝焉、

475 重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲安藤對馬守可述ゝ也、

(朱)「寛政九年」十二月廿七日　家齊公墨印

松平上總介殿

476 仝上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之ゝ、遂披露候之處一段之御仕合ゝ、恐々謹言、

(朱)「寛政九年」十二月廿七日　水野出羽守忠友判

松平上總介殿

471 仝上

今朝鯣一箱被獻之ゝ、遂披露ゝ處一段之御仕合ゝ、恐々謹言、

(朱)「寛政九年」十二月六日　忠友判

(朱)「在口裏」水野出羽守忠友

松平上總介殿

(朱)「在口裏」太田備中守資愛

472 齊宣公御譜中

冬十二月十五日行二犬追物於演武館内之場一焉、客年齊宣當二受厄一、乃爲レ祈二除厄一、二月朔日行二鏑流馬於稲荷社前一、今年屬二晴厄一故爲二酬愿一行レ之、齊宣臨觀焉、

473 重豪公御譜中　齊宣公御譜中ニモアリ

明年戊午正月十三日値二　賴朝公六百年忌一、然以レ有二事故一今茲十二月修二法會於花尾山社頭一者三日(自十六日至十八日)、齊宣親行拜レ之、重豪亦初日遣二家老伊勢播磨貞矩一、獻二白銀

477

仝上

大納言様ハ御破魔弓一飾以使者被獻之ゟ、首尾好遂披露候、恐々謹言、

（朱）「寛政九年」十二月廿八日　　忠友判

〆　松平上總介殿　　水野出羽守忠友